

# 大本教學

## 第七号

王ミロク……………	(「水鏡」より)	(1)
朝 嵐(四) 大本事件回顧歌……………	出口王仁三郎	(2)
大本は宇宙意志の表現……………	出口王仁三郎	(14)
— 宣伝使の覚悟と職責について —		
大本三大学則……………	木庭 次守	(22)
大本祭儀史考(二)    出修(2)……………	米川 清吉	(35)
宗医一体の医学を目ざして……………	広瀬 静水	(58)
— 序説 —		
五六七の生活……………	山藤 暁	(66)
— 衣食住・教育の巻 —		
出口王仁三郎聖師歌碑集録……………		(81)
— 附・出口聖師歌碑分布図 —		
大本年表(三) 大正十年六月〜大正十三年十月まで……………		(113)





朝

嵐

(4)

——第二次大本事件回顧歌——

出口 王仁三郎

— (続) —

何事も神の経緯うらと心安く吾は御神に感謝辞いやはびこと宣る

人間は身の程知るが安全と小熊来りてわが前に宣る

小熊等に分るものかとうそぶけば足音荒くわが前を去る

新聞が斯く斯く言ふと小熊等が我言の葉を疑ひて居り

今に見よ我真心の現はれて天地動くと小熊に宣りおく

愛ぐし子や知るべの人の送る文に我よみがへる心地するなり

敷島の歌もて読める物語り都の巻の一部を読みおく

黒犬

註||朝嵐一卷から五卷まで総て歌の巻に誌しあり。

(以上・昭和十七年九月・瑞月回顧の歌・三百廿首)

敷島の道を開きし素盞鳴の歌祭りすと旅立つ出雲路

赤山の館に漸く辿りつき歌祭りすと用意にかかりぬ

昭和なる十年師走八日朝醜の黒犬わが館襲へり

二百余の醜の黒犬我館を取りかこみたり鉞力佩きつつ

寝込みをば叩き起されしとやかに我は煙草をくゆらしにけり

足を病む吾を車に押込みて黒犬館に連れ帰るなり

黒犬の館に入れば醜どもは茶をわが前に運び来るなり

敷島の煙草くゆらし休らへば小犬火鉢を抱へ来るなり

赤山に集る友の顔も見ず妹にもソツと別れを告ぐる

あわてるな騒ぐな天下の王仁さんと犬を待たせて煙草くゆらす

京都府に吾を送ると朝まだき田舎の駅に運び行くなり

良仁氏吾を京都に送るべく言挙げすれど犬は許さず

大犬や小犬に身をばかこまれて汽車の旅する身こそつれなき

出雲富士の形くづれて鳥取の駅にし着けば群たつ黒犬

にぎたへの綾部の駅に吾着けば平青年金を手渡す

仰ぎ見れば本宮山は蟻の如動めき居りぬ黒犬の群

黒犬のささやく声を耳にして建物ごとごと碎かるるを知る

木枯しは窓の外を吹き鍼力尾のがちやがちやと鳴る車中の淋しさ

天恩郷窓より見つつ建物の今日見納めと思ふ淋しさ

振返り天恩郷を眺むれば銀杏大樹の梢の淋しき

丹頂の鶴の舞ひたる亀岡の神苑は犬に穢されて居り

嗟峨の駅花園二条丹波口越えて京都に着ける夕暮れ

黒犬が待てる車に押し込まれ新聞班にカメラを向けらる

数多きカメラの切先き避けむため犬を垣とし顔を隠しぬ

中立売の怪しき館に連れ行かれ住所姓名を調べられたり

醜館の十一番のオリオンの星座に安く一夜を眠る

次々に同志の友の引かれ来る醜の館にある身淋しも

朝起きて手水を使ふ瞬間を黙して見合す同志の友かな

つれづれに雑誌を読めど世の中の出来事一つも知るを得ざりき

腸を病みて便秘に苦しみ十日間にただ一たびの排出あるのみ

隔てられし星座の右に八洲雄氏左座に鳴球押し込まれ居り



右左友はあれども言問はむすべなき日々を淋しみ送る

国々に出張し居たるわが子等も友も残らず星座に入れらる

日に夜に理なき犬に責められて白嶺自ら天に昇りぬ

白嶺が天に昇りしさま聞きて同志の心も斯くやと思へり

昭和十一年一月二十九日朝犬に送られ五条館に入る

来て見れば教の友どち星座ごとにもちたらひつつ吐息して居り

朝々に大本十有六名と電話口にて吠える犬かな

家にあらば今日は節分祭礼と思ひまはせば心淋しも

せめてもの慰安なりけり大空にいかづち轟きいなづま走る

天地の神の知らせか大いなる地震犬の臓をうばへり

鼻ばかり誠二高橋た小糞犬警部たいばかりのくさい畜生

畜生がすかしつ威しつ宥めつつ涙流してくどき立つるも

わが父は君と同年心配をさせたたく無いと吠えつ尾を振る

同情を吾より買つて目的を達せむものと計る黒犬

国文学の素養を持たぬ鼻高は理がわからず誠二困れり

六法全書より外に寸毫も理解無き奴困りものなり

三歳の童子にもを言ふ如く意味は通ぜず吾は困りぬ

明光社平和の殿堂建設すとの言句をとらへ建物と誤まる

平和殿堂天恩郷に建設して○○になるとぬかす唐犬

皇国に伝はる神法帰神術を催眠術とぬかす犬かな

我国の帰神の事証を悉く犬インチキと強調するなり

国体を知らざる犬の戯言を朝夕聞きて神国を憂へぬ

号外の鈴の音高くひびき渡りただならぬ世を語るが如し

ひそやかに犬の吠え立つ声聞きて二・二六事件のありしを覚りぬ

キタリキタリと何か出て来る思ひして国の前途を星座に偲べり  
都にはいと珍らしき大雪と道行く人のささやくを聞く

朝夕を無理解の犬にさいなまれ小犬の好きな焼糞ねぶらす

焼糞にまくし立つれば小犬奴が餌えさゆたかぞと鼻うごめかしぬ

油断すればこぶし固めて攻め来たり噛みつかんとする醜犬の群

天地に神あることをつゆ知らぬ醜のしれもの世を乱すなり

恐るべきものは天地に神坐すを知らぬ司の痴心しれころかも

いぶかしき此世の中の真相を知る人の無き世こそうれたき

世はくだち人の心は濁らひて蔽の真清水汲むものはなし

隣室に吠えつき噛み付く犬の声聞きつつ友の艱なやみを偲ぶも

村肝の心きたなき醜犬が羊をくはへさいなむ朝夕

盗人や掏摸すりのあとのみ嗅ぎ付ける犬には羊の心分らず

美はしき羊の群に四ツ足の爪研ぎすまし迫る犬かな

ワンワンと声を限りにどなりつつ羊の臍を奪ふ黒犬

素直なる羊は犬に従へど心の中に勝鬨あげ居り

小羊の買ひ求めたる羊羹を盗み喰ひするいやしき犬の子

預けおきし敷島煙草の大方を灰にしすまし居る小犬かも

人の屑数多集まる犬の家に爪研ぎすまし雄たけぶ黒犬

大いなる雷地震稲妻の起りて犬のあわてさやぐも

悠々とオリオン星座におさまりて騒げる犬のおかしさを見る

世の中の道理知らぬ醜犬が虎の威を借り吠え立つわりなき

便所に行く我が友の後姿を朝夕ながめて星座ゆいとしむ

人間の屑を集めて狂犬が朝夕ガチャガチャ鉞力の尾を振る

屑犬が吠ゆる度ごと人屑が膝立直しいやいや謝る



ままならば只一打ちと思へども此処では犬のきたためもならず

京都駅ゆ犬があやつる火車に送られ教友と中立売に入る

一切の教友との面会止められて一人淋しく冬日を送りぬ

次々に教友の入り来る姿見ていよ事件の拡まりしを思ふ

黒犬の噛みつく事を前知して我長髪を切り落しけり

長髪を切りて頭の手に預け後日返すと約して分るる

神を知らぬ醜の司の理なきよ雪降る窓ゆ唾を吐き出す

天も地も神の御座と知らずして痰唾を吐き地上を汚せり

日に夜に噛みつく奴は尻に尾の無き犬にして情なきかな

西山に月のうすづく夕まぐれ東の都のさやぎを偲べり

ためしなき騒ぎ起りし東の都の空の淋しき夕暮れ

朝起きて手水を使ふたまゆらの教友の面見れば心楽しき

(後へもどる)

教友よ友やがて岩戸は開かれて汝がいさをしは御代を照らさむ  
教友の顔すかし見るたび上下に右手を返して安きを語らふ

午前九時ゆ午後の四時まで雑誌読むこと許したり黒犬館に

世の中のニウス悉を切り取りて雑誌の糟のみ読ませられける

必要の記事は残らず切取られぬりつぶされて腹立たしき夕べ

ノシノシと鉞力の尻尾をふりながら犬の子星座を嗅ぎ廻るなり

冬の日の寒さしのぎとわが籠る星座の前にストーブ焚くなり

ストーブ焚く煙星座にしのび入りて温かからず苦しかりけり

部長面したる小犬がわが姿さし覗きつつ吠えて行くなり

月も日も清しく照れど我がこもる星座は御空仰ぐよしなき

嫌らしき声を張り上げ吐鳴り居る犬の姿を見れば憎らし

犬の屋に美女入り来れば目を細め声色やさしく和声を出す

君王に仕ふる如き身振りして女の体臭嗅き廻る犬

男こそよい面の皮二ツ目には吠えつかれつつ腹が立つのみ

むかむかと腹は立てども如何にせむ檻にかこまれまならぬ身は

ままならぬ身とつけ込みて小犬奴が我儘ばかり振舞ふ朝夕

無き事があるが如くにつき固め嘘の聴取書をしつらふ

誠無き筈と思ひぬ元来が犬の集まる畜生館よ

見も聞きもせぬ事ばかり書き付けて人を艱むる盲聾

天国ゆ地獄に落ちし心地して小犬の群に襲はれにけり

金と権と嘘の覇の利く現代に誠を語りてなやまされ居る

天地の神の御教に従ひて無抵抗なるわが教友天晴れ

わが教友の無抵抗主義に便乗し臭ひなきことまでも嘸づる

臭ひ無きこと嗅ぎ付けむ小犬奴が騒ぎ廻るぞ哀れなりける

朝夕を嚙み付かれたるわが友の羊は天の御むねに任しぬ

何事も非理法権の現代もやがては天の制罰せいばつうけなむ

盛んなる人の悪事を見のがしつ時の到ればきため給はむ

朝夕をオリオン星座にかこまれて月日の光を見るよしもなき

警察医犬たたきなす姿にて形式ばかりの脈を見て行く

医者いしやの屑のおさまる末は犬の屋と熊の館に定まり居るらし

藪医者やぶいしやも藪には入らず朝夕に雀囀すずめづる館に仕ふる

火の気なきオリオン星座の朝夕を湯タンポ買ひて寒さしのぐも

特別に差入れ許した懐炉一つ高野に参りて穴に落しぬ

糞壺ふんぼに落ちたる懐炉引きあげて寒くも使ふ心はおこらし

小犬等がひそひそ吠ゆる声聞けば夜廻りのたびまぐはひ見しといふ

一夜よさに二十二回も婆いさみさまを見たりと笑ひつ吠えつつ



# 大本は宇宙意志の表現

— 宣伝使の覚悟と職責について —

出口 王仁三郎

昔から国の東西を問はず、古今を論ぜず、すべて神仏の教をひろく人を宣教師、布教師、あるひは訓導などいろいろな名をつけてをりますが、宣伝使といふのは現界においては大本がはじめてであります。「靈界物語」をみますと神界では宣伝使といふのがたくさんあります。むかしは宣伝神であつたが、中古から宣伝使となつたのであります。なぜ他の宗教のやうに「教」の字をつけないかといふと、それは、すべての既成宗教はみんな人のつくつた人造教であります。その人造教をひろくのでありますから、布教師といつてさしつかへない。しかし、この大本は宇宙の大元霊なる幽の幽にましますところの、われわれの目にも見えない、耳にも聞こえない本当に世界唯一の神さまの意志を私と開祖さまが伝達司となつて表示したものを、そのまま自分の考へを加へず世の中へ伝へるのでありますから、宣伝使といふのであります。もしも、たとへ少しでも自分の意志が入り、自分の勝手がいふたならばこれは宣伝使ではないのであります。

仏教に諸善諸菩薩といふ言葉がありますが、この菩薩といふものは、ちやうど、大本の宣伝使のやうなもので

あります。しかし釈迦の教はその時代の婆羅門教の、非常に苛酷な階級制度に反抗して起つたところの平等主義の教であつて、いはゆる釈迦その人が昔からある印度の仏教および婆羅門教、その他の宗教から脱出して、いろいろな宗教の粹を集めて一つの社会主義的仏教をひらいたのでありますから、やはりこれは人造教といつてよいのであります。この人造教を布教宣伝する人を菩薩と唱へてゐるのであります。大本の菩薩はこれとは少し意味が違ふのであつて、いはゆる菩薩以上のものであります。仏の方では如来（仏）といつてゐる、仏といふことは先覚者、証覚者といふやうな意味であるが、本当の宣伝使なれば、これは如来の働きをするのであります。だから神さまそのままの教をするのが宣伝使であります。

さういふふうに宣伝使といふのは尊貴な職責でありますから最も勇気がなければならず、最も人に優れた正しい智慧を走らせ、最も人に優れた光がなければいかず、最も人に優れたところの信がなければいけないので、いはゆる勇親愛智の四魂の働きがすべての凡俗に超越してをらなかつたならば宣伝使の役は務まらぬ、誰も聞く者がないのであります。

それでどうしても宣伝使は勇親愛智のこの四つの靈魂——これをばどこまでも活用せねばならぬ。これはお筆先にあるとほり、学や智慧で出来た鼻高ではいかん、真に腹の底から出てこねばいかぬが、さういふ人は先づ少ないから、神さまが直接に伝達された教をそのまま間違はないやうに宣伝したならば世界一の学者であります。別に今からいろいろなものを研究せなくても神から示された大本の教理を、そのまま誤らず説いたならば大本は本当の神からぢきぢきの教理が出来てゐるのでありますから、世界にたくさんある学者や智者は恐るるにたらぬのであります。

いままでの既成宗教は靈界に偏し、今日の学者は現界に偏し、哲学者は不可思議力、あるひはいろいろなもの



に偏して、中庸を得たものは一つもないのであります。それで宗教家は科学をバカにし、科学者は宗教をバカにしてゐる。しかるに今日の既成宗教家はすべて自分の唯心論的宗教を幾分か輕蔑して科学に迎合するやうになつて来ました。

それでキリスト教などでも聖書の中にある奇蹟などは皆いはぬことにしてゐる。奇蹟をいつたならば、今日の文明の世の中にバカにされる、といふやうな考へをもつやうになつてしまつたのであります。

キリスト教のみならず仏教の坊主もさうなつて来たのであります。しかし既成宗教において經典やバイブルから奇蹟を抜いたならば後は何もものもないのである、真理の方面からいへば、みんな勝手な理窟が並べてあるであつて、ともかく不思議でわからないといふのは奇蹟だけである。その奇蹟もほとんど後人が作成したものが多い。けれども、それがなかつたならば既成宗教はすっかりゼロになつてしまふ。

かういふ科学万能の世の中、宗教のほとんど破産した世の中に宗教も生かし科学も生かし、あらゆる哲学に生命を与へるところの靈力体の三大原則の教を樹てたこの大本は、いままでどんな智者、学者もこれを唱へたことのない天啓の教理であります。五大洲にどんな学者があつても、どんな博士があつても、この靈力体の三大原理に對してはなんともいふことが出来ないであります。アインスタインは相對性の原理説を唱へてゐるが、あれは二つであつて、こちらは三つである。むかうは靈と体と、あるひは東と西と、男と女といふやうなものであるが、男と女の中に一つの妙な力があつて子が出来る——かういふところまでは説いてゐないのであります。靈力体この三つの旗を押し立ててこの闇黒の世の中に進んだならば、きつと明らかな世の中となる。どんな敵もこれに服すべきではありません。非常に立派な正宗の名刀をめいめいに大本の信者は授かつてゐるのであります。これを使ふことを知らないがために、既成宗教家および無宗教者からバカにされ、反對を受けてゐるのであります。

す。本當に教に徹底し、本當に宣伝ができたならば、いかなるものもこれに反抗するはずはないのであります。今日はいよいよ国家危急存亡の場合になつた。国家多事多難の時となつたのであります。お筆先に出てゐたところがいよいよ実現して、これから支那問題のみならず、如何なる難関をわが国は突破せねばならぬかわかりませぬ。食料問題に、経済問題に、軍事上に、思想問題に、あらゆる難関が一度に押しせまつてゐるのであります。これを切り抜けるには、どうしても神によつて、神の勇智愛親、すなはち神の力によつて切り抜けるより方法は、何もないのであります。

宣伝使の中には信者の家に行つて酒（左傾）を飲んで無茶苦茶をいつたりする人があるといふことですが、それは千人に一人か二千人に一人でありませう。けれども、さういふ人があるために、はたの人まで一緒に悪くなつて、ひいては大本全体の宣伝使に影響して来るのであるから、勇智愛親の四魂を働かしてめいめい相いましめて頂きたいものであります。

それからよく私が地方に行つて見ると宣伝使の人が自分に何か神が憑いてゐるとか、神さまが憑いてゐるいろいろなことを見せて下さるとか、なんとかいふ。それをまた浅薄な、意志薄弱な信者が夢中になつて信じてゐるが、これは大變間違つてゐるのであります。

すべて神が一物を造りたまふのには、たとへ一塊の土を造るのにも三元八力といふ諸原素、諸靈力に拠られるのであります。剛、柔、流の三元（鉉物、植物および動物はこの原素よりなつてゐる）と八力（溶かす力、和す力、引張る力、ゆるむ力等八つの力）をもつて一つの物が造られてゐるのであります。そして人の身体もそのごとく出来てゐるのであります。そこへ一靈四魂といふ魂、すなはち勇智愛親の働くところの魂をお与へになつてゐるのであります。一靈は直日の魂である、四魂の荒魂、和魂、奇魂、幸魂は四つ個々別々にあるのではな



く、これは智である、これは愛である、これは親であるなどその魂の働きをいひ表はしただけで、元は一つであります。その時のいはゆる心境の変化で勇となり、智となり、愛となり、親となるのであつて、本当は一つのものであります。直日の魂、これ一つが本当の心なのです。それ以外に、外から神さまが来ると思ふのは違つてゐる。われわれがこの地上に降つたのは本守護神が降つて来たのである。がこの物質界に生まれて衣食住のためにいろいろと心を曇らし、いろいろと画策をするがために正守護神または副守護神といふものが出来て来たのであります。

副守護神といふのは實際は悪霊といふことであります。もとよりの悪霊ではないが、人間の心が物質によつて曇らされて悪霊になつてゐるのである。けれどもすべてのことを見直し、宣り直す教であるから、副守護神といつてゐるのであるが、實際は副守護神といふのは悪霊の意であります。せつかくのよい霊が悪くなつたのであるけれども人間の心に悪霊があるといふと具合が悪いから副守があるといつただけであります。

「天主一物ヲ創造ス、悉ク力徳ニ依ル。故ニ善悪相混ジ醜互ニ交ル」

神さまがすべてのものを造り、すべての人間を造られたのもことごとく力の徳によつてゐるのであります。力といふことは体と霊——霊はチであり体はカラである。霊と体から完成したものが力であります。この力徳により善悪相混じ、美醜相交るのであります。同じ神さまがこしらへてもその時の力によつて異り、同じ夫婦の中から出来た子供でも、男が出来たり、女が出来たり、美人が出来たり、醜女が出来たりするのであります。これは同じ親からでも、その時の力徳のいかんによるので、両親の身体の都合もあり、その時の心理状態の都合もあります。霊の状態が非常によくなつてゐる時と、悪い時などがある、それによつて善悪相混じ、美醜たがひに交るのであります。これは決して神さまがこしらへたのではなく、神さまは靈力体をお与へになつてゐるのであつて

自分たちのその時のあんばい如何によつて善となり、悪となるのであります。

「上帝一靈四魂ヲ以テ心ヲ造リ、之ヲ活物ニ賦ス。地主三元八力ヲ以テ体ヲ造リ、之ヲ万有ニ与フ。故ニ其靈ヲ守ル者ハ其体、其ノ体ヲ守ル者ハ其靈也。他神在ツテ之ヲ守ルニ非ス。即チ天父ノ命永遠不易」

われわれの心は天帝からいはゆる一靈四魂をもつて造られてゐるのである。そしてその心、いはゆる精霊というものを造つて、そして活物に与へられたのである。われわれ動物はみな活物であります。また植物、鉱物も活物であるが、ともかくこの霊をもつて心を造りその心をばわれわれに与へられた、その心がすなはち人の本体なのであります。それからまた魂の神は三元八力、いはゆる剛、柔、流の元素と八つの力とをもつて物体を造り、これを万有にお与へになつてゐる。ゆゑにその霊を守るもの、すなはち私の本当の精霊を守つてゐるものは私の身からだであつて、この身体の守護神は私の精霊であります。たとへば土瓶の中に茶を入れて置くとする。その場合は土瓶が体であつてこの中の茶は霊に相当する。この体がこはれたならば霊は出てしまふ、そのやうに人間の身体に大きな穴をあけて血を出すとすれば体から霊は去つてしまふ。それだから霊に対しては肉体が守護神であり、肉体に対しては霊が守護神であるといふのである。その体を守るものはそのものの霊であり、その霊を守るものはその体であります。その外に弃天さんとか何とか他に特種の神があつて守護するのではない。すなはち他神あつてこれを守るにあらず。これすなはち天父の命——これは天からきまつた法則であつて、永遠に易かはることはない。なにほど信念が強くて、もろもろの神霊や菩薩がその人の霊にうつつて住むといふことはないのであります。ただ神から直接内流を受けるか、間接内流を受けるかだけのものであつて、けつして他の守護神がつくの、守護神が守るといふことは決してないのであります。

宣伝使も大正十四年頃にはわづか七八人でありましたが、それからだんだん殖えて来て、今日ではほとんど六



千人ほどある。しかし初めの七八人とか十五人くらゐの時は非常に精選されてをりました。この頃は数は多くなつて来ましたが、なかには永らく信仰してゐるから、あの人を宣伝使にしたらこの人を宣伝使にせねばならぬといふやうな情実から出来た宣伝使もたくさんあるやうに思ひます。けれども一たん神からさうされて、神柱となり宣伝使となつた以上はたとへ知識はなくとも、なにはなくともあたふ限り、宣伝使の使命の一分なりとも尽すといふ考へをもつて頂きたいと思ひます。さうでなければ、いたづらに神さまの位置を空しく充たすといふことは、かへつて神界の邪魔になるやうなものであります。

神界には宣伝使の数はチャンときまつているから、それに満ちたならばどんなよい人が来てても宣伝使にするわけに行かない。それで充分にその考へをもつて、いつたん宣伝使となつたならば、この進展主義の大本でありますから、後へ退却せないやうに、どこまでも宣伝使の使命を果たすやうに御考へあらんことを希望いたします。

大本の宣伝使は現界のみならず、われわれの肉眼で見えないところの靈界、天国に籍を置いて、宣伝使となつてゐるのでありますから、深夜疲れてグツスリ寝てゐる間は天界を逍遙してゐる、肉体では気がつかなくてもいろいろと活動してゐる、また地上もめぐつてゐる、天翔り、国翔りこくかぎしてゐるのであります。そして日本の既成宗教のごとく、ただに日本内地のみならず、海外の諸国にまで魂は飛んで行くのであります。それでもこの本當の魂を清めておかんと濁つた魂が他処へ飛んで行くと却つて邪魔になります。

私も昼はかうしてゐるが、夜になるとあちらからもこちらからもいろいろな声が聞こえて来る、するとそこ迄はやはり、飛んで行くのであります。その時は誰が来たか判らないから、いろいろと姿を表はすことがあります。これは私が行くのではなくして私の精霊があちらやこちらで活動してゐるので、つまりジツトしてをつてもやはり、宣伝はやつてゐるのであります。本當に神の意志がわかつたならば自分は寝てをつても、宣伝使といふもの

は神さまからその霊を使つてもらつて、あちらやこちらへやられてゐる。現界の宣伝使は口で説くだけであるから、なかなか聞かない人が多いけれども、霊界に入った、すなはちすでに国替へして宣霊社に祀つてあるところの宣伝使は、霊身であるから先づ人の霊に懸つて、現界の宣伝使の行くのを待つてゐるのであります。思はぬ所がよく拓けたといふやうな場合は、昇天せる宣伝使が先に廻つてゐるのである。さうでなかつたならば、今日の頑迷不戻な、我利我欲の人間がききさうなことはない。また光を嫌ひ、善を嫌ふ悪魔が光や善に近づく道理はないのであります。それで大本の宣伝使は現界にも、霊界にも共に活動してゐるのであります。また生きながら現幽にわたつて活動してゐる宣伝使もあります。

大病人が全快するのもみんなこれは間接内流によるものであります。たとへば電燈がポットとぼるのも、その電燈だけの力だとぼるのではなくしてもとに会社があるからである。中には、この人を癒してやつたとか、自分がお蔭を頂かしたとか言つて澄ましてゐる人があるが、これは電燈が自分勝手にとぼるように考へてゐるのと同じことでもあります。自分がとぼしたと思ふのは神徳を横領することになる。「霊界物語」にある天の賊といふのはそれでありませう。これは誰でもウツカリ言つてゐるのであります。私の信者であるとか、私の癒した人であるとかいふことは誰しも当り前のやうに思つてゐるけれども、知らず識らずの間に天の賊になつてゐるのである。これをよく注意してもらはないと、せつかく神さまの御用をしながら、神さまに不快な念を与へるといふやうなことが起こつて来るのであります。

(「神の国」昭和七年三月号から)



# 大本三大学則

## 木庭次守

### まえがき

大本三大学則は本田親徳翁著の道の大原の中にかかげられたものと殆んど同文のために出口聖師が、本田翁の「道の大原」より採用されしものと考える人たちもあろうと思われるので、大本三大学則は出口聖師が小幡神社において明治三十年九月に神授されしものであり、道の大原は靈学中興の偉人本田親徳翁の著述で神界と交流して教をたてられたものであり、たまたま殆んど同文となったものであることを明らかにしたいと思う。

### 学則神授の時期

大本三大学則は出口聖師が明治三十年に父吉松氏の昇天にあい大變失望され、里人たちが鬼門のたたりと盛んに語りあ

うことより鬼門についての疑問がおこり、学者の教を受けた  
り、文献について学ばれたが、どうしても不明のために、八  
月下旬から穴太の産土神小幡神社に深夜参籠して三七の満願  
の日に、神靈親しく降下して、神授されたものである。

#### (1) 聖師著の本教創世記第三章に

明治三十年八月下旬より亦々産土の小幡神社に夜間窃に参  
籠して神教を請ひつつあつたが、神は余の至誠を嘉納しまし  
まして三七日の上りに左の如き神教を賜はつたのである。

一、天地の真象を觀察して真神の体を思考すべし。

一、万有の運化の毫差なきを視て真神の力を思考すべし。

一、活物の心性を覚悟して真神の靈魂を思考すべし。

右之三條を余に憑りて筆に誌し玉ふた。そこで余は謹しん

で吾神畏こし願はくは其意義を教へ玉へと請ふ。神即ち教  
へ諭し玉はく右三條の学則は之れ神の黙示なり、汝よく天

# 學則 王仁

神乃點示彼良吾俯仰

觀宗有る言宇宙を靈力

體の三大學以ては

一 天地の靈氣を以て觀宗を志す

一 萬物之神體故に學考すし

一 萬物之運化此靈氣を

況ん觀之矣神の力を思

考すべし

一 萬物の心性を覺悟志す

一 萬物の靈氣を思考すし

以上の三經典ありて神體其神たるに由て

知る何れも人の者も靈氣を以て思考すべし

靈氣不変不滅の事此經典に明記ありし

地に俯仰して觀察すべし、宇宙はこの靈と力と体との三大元質を以て充たさるるを知り得ん、此の活經典を以て真神の真神たる故由を知るを得ん、何んぞ人為に成れる書籍を學習するに及ばんや、只宇宙間には不変不易たる真鑑実理あるのみと教へ悟されけり。余は始めて此の神教を得て、盲龜の浮木に会へる如く喜びて直ちに感謝を捧げ、益々真理の爲めに神の守護あらんことを祈願したりけり。余は余りの嬉しさに只今教へ玉ひし神の御名を伺ひ奉る事を忘れ居たりしが後に異靈彦命の御教へたることを覺悟したりけり。(明治三十七年一月十二日誌)

## (2) 道の大本 第六章

一、王仁嘗て穴太なる産土の神殿（宮）に夜毎参りて三条の教の旨を授かりければ、茲に始めて百万の味方を得たる心地して勇氣頓に加はり、愈道のため賤しき一つの身を捧げんことを思ひ定めたりき。茲に王仁、三条の神則の旗を押し立てて世の中の哲学を改めしめ、宗教を立直さんものと、身を忘れて、學者、宗教家を尋ね、神の御則を説き廻はりたりしが輕薄なる世の中の事として、一人として此道を覺り得る者なかりしのみならず、却て王仁を氣狂人となし、偽り者と誹り遂には狐使などと悪しくいふ者のみなりき。日頃親しき友達も親族も親も兄弟も飽く迄疑へり。山子天狗狸などと罵りて神の道を破らんとする枉津神五月蠅の如く群



り起りて大いに妨げをなす。

二、神の言葉は泰山よりも重し。如何で小人等の妨げに心を翻さんや。仮令絶壁前に聳ゆとも頭上に剣閃めくとも、真理の為には恐るべけんやと、自ら荒魂に依りて能く忍びたりき。王仁は心を岩の如くに固め、寄せ来る悪魔の敵を防ぎつつ真理を開き明かさんと万の妨げを押し分け掻い潜り、神国の為めに人生のために、世界の哲学を一変し麗しき惟神の大道を現はし開かずんば止まざるの決心をもつて虎の如くに奮ひ進みぬ。(明治三十八年頃)

以上の聖師の文献によって、大本三大学則を神から神授された時期は、明治三十年の八月下旬から二十一日目に降されたとすれば、九月中旬ということになる。

### 学則の成文化と発表の経緯

学則の成文化は本教創世記第三章によれば、「右之三條を余に憑りて筆に誌し玉ふた」とあるように、初発は明治三十年九月中旬ということになる。

ついで明治三十三年執筆されたものを、「神靈界」大正十年一月号七五頁に「靈力体」の題で発表された。同文を改訂して靈界物語第十三巻の総説に転載されて、今日に到っている。

従って印刷発表は、明治三十八年二月二十四日執筆の裏の

神論(第十五章に学則あり)を「神靈界」大正九年九月十一日号八頁に発表されたものが最も早い訳である。この裏の神論は「王仁文庫」第九篇道の大本として刊行された。

(3)「神靈界」大正十年一月号 七五頁 靈力体(明治三十三年執筆)

神徳の広大無辺なる、人心小智の能く窺知すべき所にあらず。然りと雖も、吾人静に天地万有の燦然として、次序あるを観察し、亦活物の状態に付て仔細に思察するに於て、明かに宇宙の靈力体の運用妙機を覚知し、以て神の斯世に敵臨し玉ふこと疑を容るの余地無きに至らしむ。余は斯道研究者の便を図り、立教の主旨の大要を斟酌し、茲に三ヶ條の学則を制定したり。

神の黙示は則ち吾俯仰觀察する宇宙の靈、力、体の三大を以てす。

- 一、天地の真象を観察して真神の体を思考すべし。
  - 一、万有の運化の毫差無きを視て真神の力を思考すべし
- 力とは則ち運動の力にして、地球の太陽を一周し春夏秋冬を為し地球の自転して昼夜を為す等皆力の所為なり。

一、活物の心性を覚悟して真神の靈魂を思考すべし。  
靈とは即ち神也。吾人の靈魂亦之に属す。

以上の活經典あり。真神の真神たる故由を知る。何叙人なんぞ為

の書卷を学習するを用んや。唯不変不易たる真鑑実理ある而已。

#### 出口聖師の学則と本田翁の道の大原

(4)「神靈界」大正九年九月十一日号 八頁 道の大本(裏の神諭)(明治三十八年二月二十四日)第十五章

神徳の廣大無辺なる、吾人小智の能く窮測する所に非ず。然りと雖も、吾人静かに、天地万有の、燦然として次序あるを觀察し、生成化育の徳性を仔細に思考する時は、明に宇宙の靈、力、体の運用妙機を覺り得て、以て神の斯世に儼存し給ふ事、疑ひを容るの余地無きに至る。余斯道研究者の便を計り、茲に三条の学則を發表せり。而して此学則は、神靈親しく王仁に伝へ玉ひし教旨なり。

神の黙示は、即ち吾俯仰觀察する、宇宙の靈力体の三大を以てす。

- 一、 天地の真象を觀察して、真神の体を思考す可し。
  - 一、 万有の運化の毫差なきを視て、真神の力を思考す可し。
  - 一、 活物の心性を覺悟して、真神の靈魂を思考す可し。
- 以上の活經典有り。真神の真神たる故由を知る。何ぞ人為の書卷を学習するを用ひん哉。唯不変不易たる、真鑑実理有る而已。

右学則は斯道の旗幟なり。

ここに特記すべきことは、大本三大学則が印刷して發表されていなく、「神靈界」大正八年九月一日発行の道の大原号三頁に、故本田親徳著作の「道の大原」を聖師が和訳して發表されたことがある。多くの人たちはあらゆる手段で自分のものを先きに發表するものである。しかるに聖師は日頃の主張の敬老尊師の精神を實踐されたものと思われる。

(5)「神靈界」大正八年九月一日号

故本田親徳著作 出口

王仁和訳 道の大原 三頁

神の黙示は、乃ち吾が俯仰觀察する、宇宙の靈、力、体の三大を以てす。

- 一、 天地の真象を觀察して真神の体を思考すべし
  - 一、 万有の運化の毫差無きを以て、真神の力を思考すべし。
  - 一、 活物の心性を覺悟して真神の靈魂を思考すべし。
- 以上の活經典あり、真神の真神たる故由を知る、何んぞ人為の書卷を学習するを用ひんや。唯不変不易たる真鑑実理ある而已

本田親徳翁は薩摩の藩士であったが、靈学に志して靈学中興した偉人であつて、日本各地の靈山靈場において難行苦



行の末、体得されたものを教義として発表された。

これにひきかえて出口聖師は神界からの至上命令として小幡神社と高熊山において、宇宙の主神の神格の内流にみたされて、忽ちに、出口聖師の精霊である小松林命が聖師の手を通じて発表されたのが、大本の三大学則であって、本田翁のものと同文章が殆んど合致していたことは、全く神の経綸の用意周到なことに驚嘆するの外はない。

小さな読者は酷似の文章見て剽竊などといきまくものなりかむながら神より出づる言の葉も現世に對せば人言に同じ天も地も古今東西かはらぬ限り真理語れば一徹に出づ

聖談の中に織り込む言の葉の先哲に似しは経綸のため世の中の総てのものは弥勒神出世のための経綸なりけり

以上の、聖師が靈界物語の内容について昭和五年六月のお歌に示された通りである。

出口聖師が機関誌「直靈軍」に明治四十三年に掲載されるにあたり、本田翁の文献から一靈四魂の説を引用の際には、「本田親徳の遺弟」として示された聖師が「三大学則」に関してはその文章は小松林命の帰神と主張されたのは、以上の理由があるからである。

重ねて考えますと、出口聖師が大正九年九月二十三日五六七殿において「道の大原解説」（「神靈界」大正九年十月一日号、十月十一日号掲載、のちに王人文庫第五篇へ転載）と

して、本田翁著の道の大原を解説されていますが、その講演の中でも学則にはわざわざ『大本の三ヶ条の学則』とのべられてある程である。

出口聖師が、道の大原の解説の時にまでわざわざ「大本の三ヶ条の学則」と語られたのは、出口聖師が明治三十年九月中旬小幡神社において素盞鳴尊の命により、聖師の精霊である小松林命によって記されたものが、たまたま、本田翁の道の大原中の文章とほとんど同文であったためである。

#### 出口聖師と本田親徳翁

靈学中興の偉人である本田九郎親徳翁と聖師の対面は明治二十一年の春のことであった。

○八月廿一日

#### (6) 大正二年十月拾五日発行の聖師著の大本教の活歴史

開祖途中神人に逢ふ

明治二十一年春は弥生の中旬頃開祖は所用のため八木の親族福島家に出行かれしに船井郡鳥羽の村外れ八木島の手前にて一人の偉丈夫に逢ふ。渠は開祖の容姿風采を熟視して御身は実に偉人なり、肉体こそ婦人に坐せど其靈性は全く男子なり、世に所謂変性男子とは御身の事なり、御身はこれ七人の女なり、吁珍らしき婦人なるかな、数年の後不思議の神縁にて必ず天下に大名を掲ぐる事あるべし、又御身

には八人の児女あるべし、而して長男は云々と八人の児の身の上まで途々語り玉ひしに、一々適中して毫も誤りなく開祖は其神異に感じて貴下は人間にて有ざるべし、如何なる神に坐ますやと問ひ玉へば、我名は後に判明すべし、神命を蒙りて丹波の元伊勢に参詣し、且又比沼真奈井神社に神跡調査の爲出張したりし者なり、随分自重自愛せられよ併し十年の後には御身を助くる異人尋ね行く事あらむと、言葉も早々に其姿は何時か見えざるなりけり。扱偉丈夫は開祖の住所姓名を記して別れたりしが、是ぞ王仁三郎が王子の梨木阪にて出会したる靈学の研究者本田九郎親徳先生なりしなり。本田氏の慧眼なる途上一見して開祖の偉大なる人格を看取せしなり。英雄を知る者は亦英雄ならざる可らず。本田先生の此行鳥羽にて開祖を知り、梨木阪にて王仁の性格を看取されたるなり。

(7)神諭 大正七年十二月二十四日旧十一月二十二日

女子が十八才になりたる春、丹波国大枝坂の梨の木峠で、神界からの経綸で靈学中興の偉人、本田九郎親徳に途中に對面いたさしたのも、皆神の経綸の引合せで有りたぞよ。

本田翁は大本開祖と出口聖師の靈性や使命を看破して、静岡の清水にいたり、弟子の長沢豊子に「十年程先になったら丹波から一人の青年がたずねてくる」とて、鎮魂の玉や天然

笛や神伝秘書の巻物をあづけておかれた。

聖師は明治三十一年四月十四日に清水にゆき、長沢豊子より受けとられた神伝秘書を十五日にひもといて、胸中の疑問が晴れあがったのであるが、のちに本田翁の「道の大原」をよまれて、その酷似していることに驚嘆されたのである。

三大学則と道の大原の内容が殆んど、同文であるのに、小幡神社の産土神と高熊山における神示であると示されたのは以上の事実によるのである。本田翁の遺弟と明記しながらも神示とされたのは当然のことである。

(8)靈界物語第三七卷 第二〇章 仁志東

「お前さんは丹波から来られたさうだが、本田さんが十年前に仰有つたには、是から十年程先になつたら、丹波からコレコレの男が来るだらう、神の道は丹波から開けると仰有つたから、キツとお前さんのことだらう、これも時節が来たのだ。就ては本田さんから預つて置いた鎮魂の玉や天然笛があるから、之を上げませう。これを以てドシドシと布教をせなされ」

と二つの神器を筆筒の引出しから出して喜樂に与へ、且つ神伝秘書の巻物まで渡してくれられた。翌朝早うから之れを開いて見ると、実に何とも云へぬ嬉しい感じがした。自分の今迄の靈学上に関する疑問も、又一切の煩悶も拭ふが



如く払拭されて了つた。

明治三十年九月中旬に「右之三條を余に憑りて筆に誌し玉ふた」とするされ、また「学則は、神靈親しく王仁に伝へ玉ひし教旨」と執筆されたものと考えられる。大本教旨と三大学則に関してだけは天恩郷の教学碑にも「右神諦文は出口王仁三郎明治三十一年如月九日高熊山修行の砌案出したる教義の一部分なり」とのべられた理由が判然する。

○ (9) 「神靈界」大正八年九月十五日おほもと号 一八頁に

「明治二十五年からの神論に、出口王仁三郎は世界の新聞や書物を調べて、之を一つに纏めて、世界を救ふ、変性女子の御魂であるから、辛い御役と出て居るのであります」と聖師がお書きになっていますし、同十七頁に

「神論にも、今度の二度目の世の立替立直しは、日本国中に、因縁の身魂が配置まはしてあるから、其れを変性女子が調べて、経綸の御用を致せよと出て居りますから、苟くも教祖の御筆先に現はれた御神示に近き教理は、之を小川の水として、大本の清流に朝宗すべく、努力して来たのであります。故に駿河へも走り、東京へも行き、美濃へも、尾張へも駆け、神政成就の為に奔走しましたので在ります。世界に立替立直しを唱へて居る所は、一切良の金神様の御経綸の発祥であるから、天の岩戸開きに就て必要な教理や説明

は、自由に之を神明の代表たるものの採用し応用すべき特権があるとおもふ」

と強調しながら、神意にかなふものは採用したが、「直靈軍」明治四十三年三十日第十一号六頁に本教々義(承前)に「義」のところ、一靈四魂の解釈の中で「本田親徳の遺弟上田王仁」と堂々と書いてあることを思うと、採用すべきは採用し得ることがわかる。

以上の事情からも、大本三大学則は神授の大文章であることが理解できる。

#### 学則を神授された神

大本三大学則は明治三十年九月中旬に、出口聖師が産土神小幡神社々前にて帰神状態になって、自らの手で記されたのが始まりである。

帰神された神は本教創生記には異靈彦命とするされているが、靈界物語口述からは、神素盞鳴尊の命によって小松林命が帰神して、神教を伝達された由が明示されている。

#### ○ (10) 惟神の道「愛善道の根本義」 二二頁

この靈力体の大原則は私が神明のお導きに依つて靈山高熊山に修業を命ぜられた時に、素盞鳴尊様の命に依つて、小松林命様から神示を得、そこに断案を発見したのであるか



ら、今日までの如何なる学者も唱へたことのない天啓の大原則であつて、これに依つてはじめて一切の既成宗教の説と現代科学の説とが両立し、而も此の二者共に眞生命を与へらるることを覺つたのである。

素盞鳴尊・小松林命は大本文献の上からは、宇宙根本神・天の御先祖様である天の御中主大神にましますミロク神の御靈性であり、神素盞鳴大神は宇宙の主神の御顕現で三千世界の大救世主神である、と示されている。

○ (1) 教祖神諭 大正五年旧九月九日

五六七神様の靈は皆上島へ落ちて居られて、未申の金神との、素盞鳴尊と小松林の靈が、五六七神の御靈で結構な御用がさして在りたぞよ。

ミロク様が根本の天の御先祖様であるぞよ。国常立尊は地の先祖であるぞよ。

○ (2) 「神靈界」大正九年一月十五日号隨筆 二四頁

ミロクの大神様と曰へば至仁至愛の神、世界万民を平安無事に安楽に暮さして下さる神様の総称であつて、第一に宇宙の主宰に坐します天之御中主大神の別称であり、此神の全靈徳の完全に發揮されたる天照皇大御神も乃ちミロクの大神様である。天下万民の為に千座の置戸を負ふて、世界

に一旦流浪された神素盞鳴命もミロクの御靈性であつて、所謂月読尊である。之は地のミロク様であつて、天照皇大神様は天のミロク様で、撞賢木嚴之御魂天疎向津媛尊と曰ふ別称の大神である。此の御神名を教祖の神諭には総合的に頭の一字を取つて撞の大神と仰せられたのであつて、決して月界守護の月の大神様の事ではありませぬ。

○ (3) 靈界物語第四八卷第二章 西王母 一八二頁

高天原の総統神すなはち大主宰神は、大国常立尊である。

またの御名は、天之御中主大神と称へ奉り、その靈徳の完全に發揮したまふ御状態を称して、天照皇大御神と称へ奉るのである。そしてこの大神様は、嚴靈と申し奉る。嚴といふ意義は、至嚴・至貴・至尊にして過去、現在、未來に一貫し、無限絶対 無始無終に坐します神の意義である。

さうして、愛と信との源泉と現れます至聖至高の御神格である。さうしてある時には、瑞靈と現はれ、現界、幽界、神界の三方面に出没して、一切万有に永遠の生命を与へ、歡喜悅樂を下したまふ神様である。瑞といふ意義は、水々しいといふ事であつて、至善、至美、至愛、至真に坐しまし、かつ円満具足の大光明といふことになる。また靈力体の三大元に関連して守護したまふゆゑに、三つの御魂と稱へ奉り、あるひは現界、幽界（地獄界）、神界の三界を守

りたまふがゆゑに、三の御魂とも称へ奉るのである。要するに、神は宇宙にただ一柱坐しますのみなれども、その御神格の情動によつて、万神と化現したまふものである。さうして厳霊は、經の御霊と申し上げ、神格の本体とならせたまひ、瑞霊は、実地の活動力に在おほしまして御神格の目的すなはち用を爲したまふべく現はれたまうたのである。ゆゑに言靈學上、これを豊国至尊と申し奉り、また神素蓋鳴尊と称へ奉る。さうして厳霊は、高天原の太陽と現はれたまひ、瑞霊は、高天原の月と現はれたまふ。ゆゑにミロクの大神を月の大神と申し上ぐるのである。ミロクといふ意味は、至仁至愛の意である。さうして、その仁愛と信真によつて、宇宙改造に直接当らせたまふゆゑに、弥勒と漢字に書いて「弥々革むる力」とあるのをみても、この神の御神業の如何なるかを知ることを得らるのである。(中略) ここにおいて、神は時機を考へ、弥勒を世に降し、全三世界の一切をその腹中に胎藏せしめ、これを地上の万民に諭し天国の福音を、完全に詳細に示させたまふ仁慈みろくの御代が到來したのである。

#### ⑭ 靈界物語第四七卷 総説

(前略) 宇宙の祖神大六合常立大神に絶対的神権を御集めになつたのであります。ゆゑに大六合常立大神は、独一真

神にして宇宙一切を主管したまひ嚴の御魂の大神と顕現したまひました。さて、嚴の御魂に属する一切の物は、悉皆瑞の御魂に属せしめ給うたのでありますから、瑞の御魂はすなはち嚴の御魂同体神といふことになるのであります。ゆゑに、嚴の御魂を太元神たまもとと称へ奉り、瑞の御魂を救世神または救ひの神と称へ、または主の神と単称するのであります。

(中略) ゆゑに神素蓋鳴大神は、救世神ともいひ、仁愛みろく大神とも申し上げ、撞つの大神とも申し上げるのであります。

(中略)

主の神たる神素蓋鳴大神は、愛善の徳をもつて天界地上を統一したまひ、また天界地上を一個人として、すなはち単元として之を統御したまふのであります。

小松林命というのは、瑞霊素蓋鳴尊の分霊であり、日本史上では武内宿弥の精霊である。靈界物語の上からは出口聖師の精霊であることがわかる。

#### ⑮ 靈界物語第五二卷第二七章 胎藏 三二八頁

かく述べ來たる靈界の 誠を写す物語 五十二年の時津風みろく胎藏の鍵を持ち 苦集滅道あきらかに 説き諭しゆくみろく神 小松林の精霊に 清きみたまを満たせつつこの世を導く予言者に 來たりて道を伝達し 世人を普く



天国に 導きたまふ御厚恩

大本の旧役員の誤解により焼却された五百六十七冊（聖師が明治三十二年から三十三年にわたり執筆されたもの）は、瑞靈坤の金神・豊雲野尊・素盞鳴尊の神格の内流に充たされた出口聖師の精霊（小松林命）が執筆されたものであったが霊界物語も、また、小松林命の帰神の産物であることがわかる。

大本三大学則は明治三十年九月中旬に、穴太の産土神小幡神社の神前において、素盞鳴大神の神格にみたされた小松林命の帰神の神筆にあらわれたものである。

この大本三大学則の神筆から始まり、裏の神論五百六十七冊の執筆となり焼却されたが、二十五年目の、大正十年旧九月八日神命が降り、旧九月十八日から霊界物語が口述發表され八十余巻に及んだ。

従って、霊界物語全巻は、大本三大学則の立場から見た真神と宇宙と人生一切への解説書であると曰うことが出来る。

○  
⑩ 霊界物語第一巻 第九章 四四頁

どこからともなく「北へ北へ」と呼ばはる声に、機械のごとく自分の身体が自然に進んで行く。そこへ「坤」と字のついた、王冠をいただいた女神が、小松林といふ白髪の老

人とともに現はれて、一本の太い長い筆を自分に渡して姿を隠された。見るまに不思議やその筆の筒から硯が出る、墨が出る、半紙が山ほど出てくる。そして姿は少しも見えぬが、頭の上から「筆を持って」といふ声がある。二三人の童子が現はれて硯に水を注ぎ墨を摺つたまま、これも姿をかくした。

自分は立派な女神の姿に変化したままで、一生懸命に半紙にむかつて機械的に筆をはしらす。ずるぶん長い時間であったが、冊数はたしかに五百六十七であったやうに思ふ。

○  
⑪ 霊界物語第五巻第二十四章 一四四頁

このとき吾が頭上にあたつて、

「吾は国姫の神なり、汝に今より小松林命といふ神名を与へむ。この綱にすがりて再び地上に降り、汝が両親兄弟朋友知己らに面会して天上の光景を物語り、悔い改めしめ、迷へる神人をして神の道につかしむべし」と言葉をはるとともに頭上より金線は下つてきた。

○  
⑫ 霊界物語第二巻 高熊山参拝者名簿 二七二頁

三十一年如月の 梅ヶ香匂ふ九日の  
月をば西に高熊の 神山に深くわけ井りて  
聖寿万才祈らんと 三ツ葉つつじの其上に



村肝清く端坐しつ 言靈彦の神教を

耳を澄ませてマツの下 吹き来る風もいとひなく

(中略)

月も見五郎の十五日 大山小山の中道を

おのが寿美家へ雄々しくも 松岡神使に誘はれて

本の古巢へ帰りける 尚き教へを市早く

上田の炉辺に宣ぶる時 小松林の神憑り

三ツの御魂が現はれて……

○

(19) 靈界物語第六卷 高熊山参拜紀行歌 三三四頁

三郎九みらくの神の御使ひ 武内宿弥の代へ御魂

ながき月日を送りまし 小松林と現はれて

この一同の信徒に 久米ども尽きぬ神の代の

その有様をた上倉 あきらめ論し玉はんと

天地兼ねる常磐木の 松の大道を教えつ

### 学則の意義

大本三大学則はミロクミロクの神代の神授の憲法である。教の上からは全く大本の大哲学である。独一真神および宇宙の真相人生の本義を解明する三つの神宝である。

神の黙示を宇宙という活經典から靈力体の三方面から読みとる方法を明示したものである。

大本の神教が「最後の光明良の教」として地上に天国を樹立するための根本原則である「靈力体の三元説」の根元をなすものである。

哲学に活生命をふきこみ、唯心論にも生命をあたえ、唯物論にも活力をあたえて、靈(精神)と体(物質)を合致せしめて、地上に歓喜と幸福と平和にみちた理想世界を具現せしむることが、三大学則の内容であり使命である。

神の黙示は「宇宙の靈力体の三大である由を示し、

○真神の体は天地真象の觀察により

○真神の力は万有運化の視察により

○真神の靈魂は活物心性の覚悟により  
思考し祈願することによって、独一真神の大御心とその靈力体を感じ得し、宇宙の真相を理解するに至る、大名文である。

これによって、神示の断案である「大本教旨」に到達し、眼前に高天原を顕現することが出来る、天啓の大原則が、大本三大学則である。

○

(20) 玉鏡 二〇頁

太古よく世の中が治まつて居た時代は無為むゐにして化すと云ふ状態であつた。少しく世が乱れかけてから法律といふものが出来たのであるが、法三章というて、三ヶ条あれば世は治まつたものである。だんだんと世の中が六ヶ敷くなつ

て来て法律の条文が増え、今日の如く厚つばい書籍とさへなるに至つたのは歎かほしい事である。真の法三章といふのは三大学則の事である。即ち

- 一、天地の真象を觀察して真神の体を思考すべし
- 一、万有の運化の毫差なきを視て真神の力を思考すべし
- 一、活物の心性を覚悟して真神の靈魂を思考すべし

### 大本三大学則の決定版

大本では昭和五年四月号以来昭和十年十二月号までは、機関紙「神の国」の扉に、「大本三大学則」として三カ条の文章が、大本教旨、大本四大綱領、大本四大主義とともに掲載されてきた。

昭和十年九月八日、出口聖師が染筆されて岩石に彫刻され亀岡天恩郷の透明殿の西側にふせられたまま、第二次大本事件がおこり、当局によって粉碎されてしまった。

昭和二十八年四月十八日大本開教六十年記念として、三代教主名で新しく仙台石に石版いしばんをもととして彫刻建立された。従つて、この時に、始めて建立されたことになる。(大本教  
学第六号大本教旨二六頁写真参照)

この教学碑の文章こそ、大本三大学則の決定版であり、決定文である。

出口王仁三郎聖師が、鎮魂帰神の神法により神人一致の妙

境にあつて、小幡神社において授けられ、高熊山修行の際に宇宙の神靈世界と人類世界に対して、救世の神教神典として案出された教義がこの大文章である。

この昭和十年九月八日出口聖師染筆の文章こそ、宇宙の主神より神祇と人類におくられた、大哲学であると覚悟するこ  
とが出来来る。聖師は歌集「東の光」に(大正七年三月)「学  
則三條ののり」の題下に

大本の教の奥所おくがをまつぶさに説き示さむと選りし此学則こののりと示されている。

### 天恩郷教学碑の学則全文

#### 学則

神の黙示は即吾俯仰觀察する宇宙の靈力体の三大を以てす

- 一 天地の真象を觀察して真神の体を思考すべし
  - 一 万有の運化の毫差なきを視て真神の力を思考すべし
  - 一 活物の心性を覚悟して真神の靈魂を思考すべし
- 以上の活經典けつてんあり真神の真神たる故由を知る何ぞ人為の書卷を学習するを要せむや唯不変不易たる真鑑実理ある而已

右神諦文は出口王仁三郎明治三十一年如月九日高熊山修行の砌案出みきりしたる教義の一部分なり



昭和十年九月八日

王仁識之

## 学則の解説

出口聖師は大本三大学則については、大正九年九月二十三日五六七殿に於て、その要点に解説を施された。第一条について

此の天地間の真象一姿をば見ましたならば一総ての活動を  
見ましたならば、神さまの御実体の顕現といふことが分り  
ます。山川草木皆な神であると言ひましたならば、汎神教  
の如く思ふ人々が沢山有りますすけれ共、實際は皆真神の中  
に包まれたものであります。

第二条では

万有の運化は数億万年の昔から、毫も變つてをらぬので  
あります。神さまの御活動は、幾億万年の昔から、少しも  
變つたことが無い。一厘一毛も間違ふたことはないのでは  
りまして、実に規律正しいものであります。若しも此の神  
さまが一分間でも、或は二分間でも休まりましたならば、  
死滅一滅亡するよりしやうがないのであります。此の宇宙  
間に遍満する所の空氣と雖も、矢張り神の息であります。  
若し神さまが御活動を御休みになつて、一切の物を止めら  
れたならば、此の宇宙は瓦斯斗りになつて了つて、人間は

一分間も生きることが出来ない。人間斗りでない、世界一  
切の物は死滅する斗りであります。之を学者は天然力とか  
自然力とか謂つてをるけれども、世の中に偶然といふもの  
は一つも無い、皆な因つて来る所の原因あり、訳があるの  
であります。

第三条については

凡て世の中の物は皆な活物であります。宇宙が運行する、  
或は太陽、月、地球、其の他一切の物、或は人間なり、総  
ての物は皆な生きてをる活物であります。是には皆な心性  
一心があるのであります。がなかつたならば大きくなるこ  
とはない。草木にも矢張り草木の魂があるのであります。

高天原と至大天球たかあまほはら一宇宙内には、神靈の元子が充滿してを  
るといふことが分るのであります。

以上のごとく、三大学則の中の最も中心になる「天地の真  
象」「万有の運化」「活物の心性」の意義について明快な解  
説を加えられて、学則運用の方法を示されている。換言すれ  
ば、真神の黙示である宇宙という經典の読み方の原理原則が  
指さされている。全く有難い次第ではないか。

註 靈界物語は校定版による



# 大本祭儀史考 (2)

—— 出修 (その二) ——

米 川 清 吉

## 弥仙山お籠り (前号のつづき)

この御用をしてもらわんとまことの事が出て来ん

出口の旅立ち、何時も月の八日でありたが、二度目の天の岩戸へはいりたのが、明治三十四年の九月の八日、出口直おとしたのぞぞよ。二度目の天の岩戸へはいりたのが、およぎの弥仙山の中のお宮へ立て籠りたのであるぞよ。

人間界では出来ん御用であるから、良の金神が連れまいりて居るから、べつじょうはないぞよ。此の御用をしてもらわんと、まことの事が出て来んから、今度の用は人民のなかにおりては出来ん御用であるから、連れまいりたぞよ。今が夜と昼とのさかいのところであるから、役員皆御苦勞、岩戸から出るようになりたら、だいぶものがわか

りかけるなれど、岩戸へ這入る折は、何につけても皆御苦勞であるぞよ。質素ちしつにしてくれいと毎度申したが、道の違う方へ行たなれば後戻りせんらんから、毎度いやな事をいう出口に言わせると、出口が肉体で申すように思つて、何を言うても気にさわりて、一緒に居りては御用が出来んから、岩戸の中で御用さすぞよ。出口はまだ大譎な御用あるのに、出口すておいて女子がいちぢりき一力ではやれん御用があるのに、あまり女子がはばるから、やもうえず岩戸に立てこみて御用さしておるから、出口の事は心配致して下さるなよ。あとをよろしく役員頼むぞよ。男子と女子と一緒に居りての御用はごてつくから、役員と皆がつらいから、わけて御用致さすぞよ。おもいの違ふことあるから、この事わかるまでは別れておくぞよ。わかりて来るぞよ。毎度申すが二度目の世の立替、二度目の岩戸へいま

二度目の世の立替・二度目の岩戸へ這入る金輪際

のさかい

這入る金輪際のさかいであるから、因縁ある身魂は、今は御苦勞であるぞよ。先きは広き結構な事になるなれど、

先は広き結構な事になる  
出口の御用つくならふで  
さきどおりでない道が  
違つ

大橋越えてたずねに行く  
ところ他にはない

しくみ通りに致さねば何  
事もものが出来が致さん  
から出口をこ苦労になる

このことわかつてきたら  
岩戸が開く

出口日々苦勞するのは、皆があまりよきことを来るのを、悪きことの来るより早く良きこと来るように思つて、皆の心が違うから、肝腎の人が取違ひがあるので、日々出口が苦勞、これでは肝腎の御用が出来んから、連れまゐりたから、上田には好きな様にやらして下され。やりてみるもよからう。出口の御用つくなら、ふでさきどおりでない道が違つと後戻りばかりで、ちとはらへはいりよると後戻りばかり、これではものが遅くなりて、ものごとがのびるばかり、神は改心でけたら人民もでけるが、守護神がしぐみわからんから、もたえるから、まことの心になりたら申してやると筆先に出してあるぞよ。肝腎のことほかいておいて、さきへ行こうも行くえわからん、後戻りせんならんと申して、筆先さえみてはらへしめこみたら、やりそこない致さんなれど、おはしこいてたずねに行くところ、ほかには無いのに、ほかへたずねに行きたりしよると、何もわからんようになるぞよ。何程言つてやりたとして、あまりものをせくと、しそこないが出来るぞよ。良の金神の筆先で開きたら、心配ないなれど、ゆうようにせんと、じりじりまうことが出来ると言つて、毎度出してあるのを、出口の肉体で書く様に思つて、取りそこないを致しておるから、まだ氣にさわること申すから、出口は岩戸へ入れてしもうたのであるぞよ。岩戸の中で肝腎の御用聞かせるぞよ。なるべくは竜宮館で御用さしたいと思つたなれど、やはりしくみ通りに致さねば、何事もものが出来が致さんから、出口を御苦労になりたら、役員一同あとをよろしく頼むぞよ。ひととこに置いて御用さしては、日々皆が御苦労であるから、別に居りての御用しておるとよくわかりだすぞよ。いまからはでにやりたら、行きも戻りもならん事が出来るから、筆先で氣をつけば、えらいお氣に障りて、ひととこには居れんから、連れまゐりて御用さすから、いまが金輪際のかなわんとこであるぞよ。このこと段々わかりて来たら、岩戸が開くのさぞよ。わかるまでは岩戸が開かんぞよ。今度は出口の大謨な御用であるぞよ。筆先に何もかも書かしてあるぞよ。筆先腹へはいりておれば、何が来たとして驚かいてもよいなれど、世に落して御用さしておるから、まことに致さんので、ものごとが遅くなりて、神出口が長く苦しむぞよ。そうだと申して、この経綸問に行くところは他にはないぞ。道の違つたとこへ問に行くくと、役員まで迷うぞよ。良の金神は、苦勞のかたまりで突き貫くのであるから、心が出口とはあわんどよ。学でできることなれば、こんな苦勞はしもさせもせんなれど、智慧学ではいかんから、骨が折れるのさぞ。こう申すと海潮をえらい悪く申すようにあれど、そこへ心がおしうつらんと、心配しては後戻りばかりで、何時までもこのほうのきかいかになわんどよ。まずはおもわくにやりてみるもよいが、おもわくはずれて後戻りせんならんぞ。



## 弥仙山での御用

出口は大謨な御用であるから、今等の御用は一先懸命の御用であるぞよ。出口に良めよの御ご用大望と申して、筆先きに出してあるが、弥仙山での御用と申すのは、頂上おんさうの木花咲耶姫様と和合いたして、一番世に出ておいでます神様に和合さして、その中で間に合う神様を、今度の立替の御用しらべる御役に相定まりたぞよ。精神悪き神さん、私の強き御方、御用あとまわしに致すから、その覚悟なされよ。間に合う神から御苦労になるぞよ。神集会致したそのうえでも、いつ天災のみせしめが何処からはじまるやらしれんから、その用意をなされよ。出口をたかみから見物さすと申したが、見物させようよりも仕様がないぞ。うたがいもきりあるぞよ。明治三十四年九月十日の御筆先。

(明三四・旧九・一〇)

今度まことの和合がでける

二度目の世の立替の形

今度まことの和合がでけるから、坤の金神と和合が弥仙山でできたぞよ。弥仙山のどちらの神さんも、咲耶姫さん大謨な御用、ひこほほでみの命さまも、えらい御よろこびでありたぞよ。人民からはなんでもないような事なれど結構な御用でありたぞよ。御用結構にでけたぞよ。今度の御用大望と申すのは、二度目の世の立替の形であるから何につけても御苦労であると申すのぞ。これから段々わかりて来るに近うなりたぞよ。これから神に和合さして、海潮には坤の金神の守護さすようになるから、そうなりたら、大本は高見から見物いたさすぞよ。

(明三四・旧九・一六)

弥仙山の神々のおよろこ

九月八日におよぎの弥仙山にまいれと仰せ頂きて、八日の三時に綾部をたちて、昔から女の参られんお山であるところへ立籠りて御用して頂きて、頂上おんさうの神さん木花咲耶姫様、天照大神宮様の御血統みちづらで、中の神様彦火々出見命様咲耶姫様の御子でありて、大変御よろこびでありました。人間界ではでけん御用でありたゆえ、岩戸へはいりたのでありたぞよ。大謨な御用でありたが、まことに結構でありたぞよ。

(明三四・旧一〇・五)

竜宮館で和合の出来るお  
役なされてそれぞれの御

弥仙山で申してあるぞよ。出雲から御帰り遊ばしたらば、竜宮館では分りた神様から御出でなされて、出雲大社大神殿と、弥仙山の木花咲哉姫殿とが、竜宮館で和合の出来る御役なされて、それぞれに御用なさるから、何かの事



用なさる

が神は激しくなるよって。

(明三五・旧二・八)

大本は結構な実地の神の寄る処

此大本は結構な実地の神の寄る処、弥仙山と綾部の竜宮館ほか見苦しうて、よりつく処、外にはないぞよ。此世界には神の住居致す所は女嶋男嶋よりない。

弥仙山で大望な事を成就さす

女嶋男嶋では物は不都合なから、弥仙山へ是迄は女は参拝させずに、清らかに致して置いて、今度弥仙山の山で大望な事を成就さすのぞよ。

(明三六・旧六・一四)

### 変性男子・変性女子の戦い

此仕組は知恵学では分らん

横の仕組ばかりで開いて貰うたら、三千年余りて仕組致すには、良の金神出口の苦勞が水の泡となるから、此仕組は知恵学では分らんと申して、毎度筆先に出してあるのぞぞよ。神がしよる事が解るまいがな。縦をほかいて置いて、横の御役一方でやれるならやりて見よれ、初発は人がたっぴつ集りて来るが、誠の者は寄りて来んぞよ。

良の金神は稲荷講社の下にはなれんから、此方で一派たてるから、坤の金神が我が折れて上田の改心出来たら、其上では仕組通りに致そうなれど、今の精神では、さっぱり悪に返りて居る故に、先ずは思惑をやりて見るもよからうが、早う気が附かんと気の毒でけるぞよ。

(明三五・旧四・六)

綾部の大本は世界の大本になるところ

綾部の大本は世界の大本になるところであるから、どこの下にもならん。此綾部の大本を下に致して、稲荷講社でやるとはえらい間違ひできた。小松林のやり方では最初には、うまいやり方結構なげなが尻すばりとなるぞよ。

(明三五・旧四・七)

善悪、神力学力とを立別けて世界の人民に改心を

変性男子の身魂が世に現れて、三千世界を世を立替えて、昔の元の神が表になりて、世界の世の立替えを致すには変性男子の身魂を現わす時節がまいりて、女子との戦で善悪、神力学力とを立別けて、世界の人民に改心を致さし

致さし、善へ立返るよう  
に仕組してある  
世界の事、ある事が大本  
の中に実地がして見せて  
ある

善へ立返る様に仕組がしてあるから、此仕組が分りて来ると、何程悪に強い身魂でも、改心が出来て、善一筋の道  
になりて、元の昔に立ち返りて、外国人が往生致す仕組がしてあるから、日本の国は小さくても、ナシタ尊い国で  
あると申して往生いたすぞよ。世界の事、ある事が大本の中に実地がして見せてあるから、変性男子と女子とにし  
て見せてあるから、此中の戦で日本と外国との負け勝ちがよく分るから、それに就ては何かの事が大望であるぞよ

(明三六・旧正・三〇)

## 二度目の世の折の型

天照皇大神宮殿に敵対われなされたは素戔嗚命、二度目の世の立替は、勿体なくも御妹子の稚姫君の命が、変性男  
子の身魂であるからまた同じ身魂さ。

二度目の世の折は、若姫君の命の身魂が出口直になりて、素戔嗚の身魂が小松林になりて、上田喜三郎が世の乱れ  
た方の敵対役さ。充分出口を敵対うて明治三十四年の九月の八日に、湊与岐の弥仙山のお頂上は木花咲哉姫、次が  
彦火々出見命、此中へ這入りて、有明の月の夜に出たのであれども、まだ岩戸は閉りて居るのぞぞよ。

(明三六・旧二・二二)

三千世界の事が皆さして  
見せてある

世界の曇りが変性女子に全部<sup>すべて</sup>写るから、改心が出来難いなり。改心を致さぬから世界の立替が遅れるなり。大本へ  
立寄る身魂が判らん者ばかりで、神と出口が永らく苦勞を致すぞよ。変性女子の身魂は、何時も敵対役がさしてあ  
るぞよ。三千世界の事が皆さして見せてあるぞよ。

(明三六・旧三・五)

男子と女子との大戦い

善と悪との力比べを致すのであるから、男子と女子との大戦いが見せてあるから、此中へ立寄る人は、此大本は他  
の教会の行り方とはさっぱり行り方が違うから、男子と女子に此大本の中に実地をして見せたのぞぞよ。

(明三六・旧四・一)

此世の乱れを実地に

此世の来るのは知れて居るから、変性男子の身魂と女子の身魂が、昔の分け御魂でありて、善と悪とを拵えて、男  
子は縦役で、女子の役は横役で横は色々と変る御役、女子の身魂は此世はこう云う事に乱れて居るのを実地して見



見せる

せたなり、明治三十五年の六月一杯が小松林に変化て、此世乱れた事がさしてありたなれど、小松林は園部の内藤へ鎮めて置いて歸りて坤の金神に變る善一すじ。

(明三六・旧五・一八)

悪で世を持ちたら国はさっぱり潰れてしまつ

女子は同じ分け身魂で、此世こう云う世が二度目其折に実地をして見せねば、人民には解らん善と悪とを拵しらいて、人民よう解けんなれど、是から良く解るから、此世悪で世を持ちたら、国はさっぱり潰れて仕舞うぞよ。

昔の岩戸閉めたのも素戔嗚命でありたなり、二度目の岩戸閉めたのも同じ身魂、今度は小松林と名を拵えて敵対役でありたなり、此世持つのは悪では持てんと、改心出来た故、何事も時節が参りて来たから、世界の人民が一度に改心致さならん事になるから、神に改心出来んでは、今度は此日本の内の守護は出来んから、元の分け身魂は解るのも早いから。素戔嗚命の御役も辛い御役でありたぞよ。此御役もほかの身魂では出来んから、元の分け身魂に大望な事さしてありたぞよ。悪では万古末代世は続かんから、悪働いた身魂も悪ではもういかんと改心出来て、昔から因縁の身魂は皆引寄して、調べて御用致す身魂天からさせられて居るのぞ。

(明三六・旧五・二一)

### 岩戸開き—四魂そのついで

今度岩戸開きの御供致す役員は、末代名の残る御用であるから、此御用致すのは誠のうぶの心になりて、此先は水晶魂にちつとも曇りなき様に磨いて下され。

世界の大本の今度岩戸開く役員は、日本魂の元の種になるのであるから、此岩戸を開いてから、此方の申すことを反いて行い出来ん様な事ではあかん。あの行いなれば世の立替は出来ると、人から見ても申す様な行いを揃うてして貰わねばならんから、家内和合して貰わんとつまらんから、気をつけて置くぞよ。

(明三六・旧四・二四)

一生懸命の大事の御用を仇な事では後が勤まらん

御供と迎いとに分けて下されよ。我も俺もと申して御供致しても、後の御用が勤め上らんと誠の差添の種にはならんから、一生懸命の大事の御用を、仇な事では後が勤まらんから、念に念を入れて、気を付けて置くぞよ。長い苦



勞の固まりで、此結構な身魂を、是丈け世に落して、糞粕に化いて置いて物事出来させた、今度の岩戸開くのは、並や大抵の事ではないぞよ。

女子は是まで悪役であり  
たなれどー  
善へ立ち返りて、和合致して、澄子も続いて行え代えさして、役員、差添の役員一つの道に固まりて仲良く致して  
勤め上げて下されよ。

(明三六・旧四・二六)

男子と女子と和合出きて  
四魂揃つての御用  
是からは男子と女子とが和合が出来て、四魂揃つての御用となりて、一つの道へ立歸りて、此中らしく御用が出来  
るぞよ。

(明三六・旧四・二七)

今度岩戸を開くには、会長は神界では出口になりて、坤の金神に守護が變りて、善一筋の道へ立ち返りて、澄子も  
行いを変えて貰わならんぞよ。

会長は神界では出口王仁  
三郎と名を致す  
皆揃つて改心致して、会長は神界では出口王仁三郎と名を致すから、願ひ致すのは其願ひに致して下されよ。今度  
載きた御子は、水晶の種に致すのであるから、岩戸開きの御願ひは、出口に付けさすから、何も神からの都合であ  
るぞよ。出口が致しても、良の金神が致すのぞぞよ。唐天竺も動く事になるぞよ。

出口直日と申して木花咲耶姫、彦火々出見命殿、神界御願ひ致して下されよ。あらましの事書かずぞよ。

(明三六・旧四・二七)

出口直日は水晶の種に致  
す

出口直六十八、明治三十六年の五月ついたちのしるし

二度目の世の立替のしるしぞよ。出口直明治三十六年四月二十七日、良の金神が御礼申す。稚姫君命が変性男子の  
御霊であるから、今度出口の神と表れて三千世界の世の立替を致すには、大望なことばかりで、いんねんある身魂  
は大望な御用さして、物事出来致さしたぞよ。明治三十四年の九月に弥仙山の御そらの木の花咲耶姫殿も因縁のあ  
ること、人民には見当の取れん事なれど、結構な御用を出口直にさしたのでありたぞよ。弥仙山は女は参拜を致さ

世に出ておいでる判りた神を和合致してお働きをさせて――

なんだなれど、世を変えて女も参拜致さすから、淤与岐嵯峨根久兵衛殿、結構に能き御世話が出来て清らかなうらざ。神の住いを致すとはどこにもないぞよ。余り開け過ぎて清らかな所は女島よりないぞよ。近くで守護致さねばならんから、弥仙山を借りて居りたなれど、岩戸開いて、世に出ておいでる判りた神様と和合致して、夫々に手別け致してお働きをさせて、お手柄次第で今度は御出世は何程でも出来るから、お働きなされよ。

嵯峨根久兵衛殿、結構に御世話出来て物事出来が致したから、真倉後野市太郎も結構な手続き、結構なおん御用でありたぞよ。

明治三十六年の四月の二十八日に岩戸を開くから、もう此先には無き事であるなれど、今では左程に皆思わんなれど、此事判りて来たなれば誠に結構な事、万劫末代名の残る御世話でありたぞよ。御礼には、あらごもとお杖としるしにやりてあるから、そのあらごもは大石の木下慶太郎の父の亀次郎が、寒かろうかと心尽して村へ忍んで持ッて来てくれたあらごもでありたぞよ。何も書き残すぞよ。万古末代残る事許りぞ。

(此筆先は出口の神より嵯峨根久兵衛に授けられたるものなり。後日のしるしのために出口王仁三郎の手で書き写して置く)

(明三六・旧四・二八)

四魂揃ふて三千世界をナラシ今度の仕組を成就致さす

変性男子が現われて世界の守護致すには、明治三十六年四月二十八日に、岩戸開きと相定まりて、変性男子と変性女子と和合が出来て、金勝要の大神は純子に、竜宮の乙姫様は日の出神に、それぞれ御守護なされて、四魂揃うて三千世界をナラシ、今度の仕組を成就致さすのであるぞよ。外国は竜宮の乙姫様が日の出の神様を御使いになりて三千世界をヒックリ反しなざるなり、世に落ちて居る神と、世に出て御出でる神と和合致さな、世は治まらんぞよ

世に落ちて居る神と世に出ておいでる神と和合致さな世は治まらん

游与岐は因縁のあるところ、清らかな弥仙山と云う結構な、御山のあるところ、御山の頂上に木花咲耶姫殿、中の御宮が彦火々出見命殿、下の御宮が三十八社なり、今度は頂上の木花咲耶姫殿が、世に出ておいでる神さんと、世に落ちて居りた神との和合をさせる御役を、神界から仰せつけがあたりたのじゃぞよ。人間界では出来ん事ぞよ。

木の花咲耶姫殿が――和合させるお役

此大望な三千世界の世の立替は変性男子でない出来ん事であるから、世を治めるには木花咲耶姫殿の身魂、大本の変性男子の御世継は末子の澄子なり、女子が坤の金神、身魂は男子と女子とが夫婦なり、澄子の身魂と会長の身魂とは親子なり、肉体では会長と澄子が夫婦に致して、木花咲耶姫殿の分け身魂、此大本は代々女の御世継と相定めるぞよ。肉体が女子であるぞよ。取違のなき様に致さんと取違を致すと大間違が出来るから外の教会とは違ふ

此大本は代々女の御世継



と相定める

から、無調法は恐うてやう致さん様になるなれど万劫末代続かす大本であるから、出口直のうちに気を付けてお  
ぞよ。

(明三六・旧四・三〇)

木花咲耶姫殿因縁ありて  
三代と定まりた

弥仙山の御空の木花咲耶姫殿も長らく悔しかりたなれど、世を立替を致して、長らく悔しかりた身魂、因縁ありて  
三代と定まりたぞよ。

(明三六・閏五・三)

昔から悔しかりた神―物  
事成就いたしてのお悦び  
大望な岩戸開きを致した

木花咲耶姫殿も昔から悔しかりた神でありたなれど、二度目の世の立替について、淤与岐の弥仙山も因縁ありて、  
木花咲耶姫殿も彦火々出見命の悔しさと、良の金神は良く心を知りてをる故に、昔から悔しかりた神は、今度世の  
立替致して、物事成就さしたのぞ。それで木花咲耶姫殿も、彦火々出見命殿も今度は物が成就いたして、御二方は  
御悦びであるから、此方は余り悔しかりたから、悔しかりた御方皆良くして上る仕組がしてありての、今度の弥仙  
山での大望な、木花咲耶姫殿の御社の中で、大望な岩戸開きを致したのでありたぞよ。彦火々出見命殿も大望な  
悦びであるぞよ。

世に出てお出なされても、謹みて世に落ちておいでた同様の神は、今度早く良く致してあげるから、今度  
改心早く出来た神様、それで長らく出口の手で知らしてをるのであるぞよ。

(明三六・旧六・一四)

岩戸開いたら神界の方は  
日の出の守護となりて

岩戸開きが明治三十六年の四月の二十八日に行たをりは、此世は真暗がりの世になりて居りた折で、昼の白昼に提  
灯の火を附けて行つたのでありたぞよ。岩戸開いたら、神界の方は日の出の守護となりて、判りかけがしていたの  
であるぞよ。

(明三七・旧六・二九)



## 七社まゐり

### 七社の神へお礼参り

今度の七社参拝の御供は、我も私も申して参拝致すのは結構ではあれども、変性男子と変性女子と、竜宮の音霊女殿と、禁闕金の神殿の、四魂揃うた御礼やら、三代の世継を授けて貰うた御礼やら、結構に神界の経綸の成就いたした大望な事の御礼やら、弥仙山で神界の岩戸を開いた御礼やら、産土、氏神さまに国々所々の氏子を構うて貰ふ願ひやら、大望な神業ばかりであるから、何に付けても斯の大本の御用は、気づかひな事ばかりで、人民には一寸も知らん事であるから、昔から未だ斯世に無き事やら、人民の知らぬ事を先きに知らして、世界の人民に改心をさせて、三千世界を一つに丸めて、日本と外国との身魂を立分けて、日本の御魂は日本魂ばかりを選抜いて、日本は神国霊主体であると云ふ事を、斯大本から世界へ模範を出して見せねばならぬ所であるから、今度七社の神へ御礼参拝を致すのは、昔から無き事の深い因縁のある、大望な神業であるから、余程皆が清らかな心に復りて、後戻りをせぬやうに心得なされよ。

### 三千世界を一つに丸めて

### 日本は神国霊主体従

大本から世界へ模範を出して見せねばならぬ所

神の気勳に叶はぬ事がありたら、酷しきみせしめいたす

変性男子と変性女子も薩張り守護が代りて、坤の金神の守護と成りた御礼やら、また此の先の日本と露国との大戦争や、世界中の大戦争の御冥助の御願ひや、いろいろの深い経綸の御礼の参拝であるから、今度の参拝の御供いたした人に、能く言ひ付けておこぞよ。今度の御供を致してから心間違ひやら、神の気勳に叶はぬ事がありたら、誰彼に由らず是からは酷しき懲戒をいたすから、此心得を胸に離さぬ様に致されよ。御供さへ致したら、直ぐに良い利益が貰へるやうに思うてをると量見が違ふぞよ。

(明三六・旧六・八)

## 出 修 総 括

本文中( )内は出口聖師による註

でぐちのかみ、きげん十二年四月だい六弥仙山の岩戸開き

明治三十六年四月二十七日、二十八日、三十日、五月朔日の御筆先、明治三十六年六月朔日大本にて出口王仁三

郎写す

岩戸開き、良の金神 稚姫君命変性男子 出口の神と現れるのしるし。良の金神稚姫君命、出口の神と現れるは、

## 二度目の世の立替を致す 沓島開き

変性男子の身魂が現れた折、二度目の世の立替、二度目の岩戸開きを致した折の様子は、こう云うものに世が乱れて居りたと云ふ事を書き置くのは、万古末代残る事ぞよ。二度目の世の立替の折は、世界がさっぱり闇の夜同様、此世が無茶苦茶になりた折、岩戸閉りたのは明治三十四年の九月の八日に出口直のおり、余り此世が見苦しくて、此世の人民の心と云ふものは、世につれられて、さっぱり鬼きじんの心に日本の人民がなりてしまふて、二度目の世の立替を致すには、丹後の沓島開きと云ふ様な大望な事がさしてあるのぞぞよ。

綾部の大本は結構な竜宮館が高天が原であるから、此大本で御用勤め上げさしたいと思ふたなれど、明治三十四年頃には、何も此のなか闇雲でむごたらしき折、男子と女子との戦いで、大本の中で和合が出来ん、余り此中荒立ちて男子と女子が敵対うて、三十四年の九月の八日に、弥仙山の彦火々出見の命の御社の中へ立籠りた折が、金輪際の叶はん折でありたぞよ。それから明治三十六年の四月の二十八日迄、岩戸はびしやりと閉りて居りたなれど、岩戸閉めて置いては暗がりの守護で、何致しても暗がり致した事は速かな事は出来んによって、明けの鳥と致さねば物事が遅くなるから、明けの鳥と致して守護致すには、岩戸開かな夜が明けんから、明けの鳥と致さねば物事が成就致さんから、是からは日の出の守護となりたから、善し悪しが明白に能く判るから、大本の高天が原は日に増しに気づかひになるから、是迄の様に思うて来たら、了見が違ふぞよ。沓島へ参拜を致してから、良の金神のきかいに叶はん事致したら、高天が原へは入られんぞよ。先に気が付けてあるぞよ。前つ前つに何事も皆気が付けてあるぞよ。夫れに不調法致した人は、我身を恨めるよりもう仕様はないぞよ。世界からしやうまつ出て来出すと、我も我もと申して来るから、そうならん中に判る人民でないと、良いお蔭は貰えんぞよと、毎度出口の手で気が付けてあるぞよ。今の人民誠が嘘に見えるから、誰も誠に致さなんだが、誠の花が綾部の大本には咲きかけたぞよ。一度に開く梅の花、金神の世に天晴れ表になりた、良の金神の世になりて、世界を自由に致すようの時節が参りたぞよ上下覆りたぞよ。是が天地が覆りたのぞぞよ。時節待ちたらば昔の松の世が参りたから、世界の人民我れの心が恐いから、何も此世には外に恐いものは少つともないなれど、恐いのは己の心が恐いぞよ。善にもなれる悪にも返るから、何事も先に皆気が付けてあるぞよ。心磨いて天地へ御詫が第一等、夫れよりもう仕様はないぞよ。何事も良の金神が此世の闇魔であるぞよ。元の昔からの事をしようまつて居りて、此身魂は昔からこついふ事を致して居る身魂である、此性来の身魂は此働きをして居る身魂であると云ふ事が帳に付けてあるぞよ。今度の二度目の世の立替は骨が折れると申すのは、余り此世が悪る開けに開けて居る故に、大望な世の立替であるぞよ。始まると大分敵

判る

良の金神のきかいに叶はん事致したら高天が原へは入られん

良の金神の世になりて世界を自由に致す時節  
心磨いて天地へお詫びが  
第一等

良の金神が此世の闇魔  
この世が悪る開けに開け



ておる

変性女子は此世の鏡―人  
身御供

しき事あるから、何も天へ其帳面は御渡し申してあるから、天地に御託を致さんと、其御託は今度現れるは、変性男子が良の金神稚姫君命の身魂が同じ身魂ぞ。良の金神の身魂が変化て引添うて、元から苦勞致した身魂が稚姫君の命出口の神と現れて、男子の御用は経役なり、女子の御役横役で、男子と女子とに実地を善と悪とをして見せて（変性女子に実地の悪をして見せてとあれども、是は心して読むべし。肉体にての悪き罪は犯さず、心は尚更水晶なれども、変性女子は此世の鏡とあれば、世界の悪が此大本の中に映りたるならん。役員のやり損ふた事や慢神した事を皆かぶせられて、人身御供に上げられたのが変性女子である。）

此世は斯う云ふものぞ、同じ腹から善と悪とが出来るから、人民は何にも知らんものであるから、正末をして見せたのでありぞよ。

役員信者の罪を我子の罪  
とせられたる出口の神の  
御心

（此筆先をよくよく味ふべし。正末とあるは、此中にて実地の神力と学力との力競べなり。神徳を忘れて学問のみに凝ると、遂には悪き事を企む恐れありとの事なり。役員信者の罪を、我子の罪とせられたる出口の神の御心を察し奉りて、益々改心致すべし。人の事じやと思つて居ると我の事である。）

綾部の大本には今の世はこう云う事に乱れて居る。其世を立直すのはこう云う遣り方に致すのぞと云ふ事が、実地が男子と女子とにして見せてあるから、世界は此中にありた事が皆出て来るぞよ。

変性女子は人民の母  
世界の罪は坤の金神出口  
王仁三郎の罪となれば

（変性男子は神々へ改心をさせなさらねばならん故、此世の守護神に色々と戒めなされて、改心させなきて先へ知らせなざるし、変性女子は人民の母なれば、世界の罪は皆坤の金神出口王仁三郎の罪となれば、砕けても人民を改心させねばならん役である。それで此御役は上から見れば氣楽さうにあれど、心には云ふに云はれん人の事、苦勞が絶へたひまはないのぞ）

ぼつぼつと人が出て来るぞよ。

出口直六十八才、明治三十六年の四月の二十八日の岩戸開きの御しるし、

岩戸開き、良の金神稚姫君命出口の神と現れるぞよ、変性男子のしるし、続き筆先、御伴（御伴人名前にあり略す）

弥仙山は昔から、女は参拜致されんお山でありたなれど、余り世が開け過ぎて、生神の住ひ致す所は、此近辺では弥仙山、世を立替致すについて丹後の女島が、此綾部の大本から開かしてあるぞよ。女島開かしてあるのは大望な事であるぞよ。女島は昔から人の行けなんだ所を、綾部の大本から変性男子と女子と、教祖が男子、出口直、会長



が出口の鬼三郎

(神界にては出口鬼三郎と名を貰えども、現界では上田喜三郎、澄子の夫なり)

末子の純子が御世継で、会長とが夫婦で、鷹の栖四方平蔵、八木の福島と、初禿に女島開いたのは五人

(ほん初は明治三十三年六月八日、出口教祖と上田喜三郎と純子と四方平蔵と木下慶太郎と都合五人であったが其時は男島までの参拜、女島の時はその年の七月八日であつたが、女島へ開きに行つたのは三人と、四方平蔵、福島寅之助の五人で、中村竹造、木下慶太郎、福林安之助、四方祐助都合九人、あとの四人は男島迄の御伴、九人の写真はこの時に舞鶴でうつしたのである)

二度目には御伴たつびつありたなれど、初禿の御用は致さしてしもつてありたぞよ。(二度目の女島開きは御伴三十六人であった。此時に丹後の国元伊勢の岩戸の水を女島への海へ鬼三郎がまいたので大望な役目でありたのだ。)

是は明治三十四年の四月の十日であつた。鬼三郎と木下とは男島行きを合せて四遍目である)

其前に(明治三十四年三月八日)元伊勢の昔から変らん水晶の産水のおんご用、其次は出雲の御用

(明治三十四年五月十六日、十五人連れにて出立、六月の五日に竜宮館へ帰りけり)

今度の淤与岐の弥仙山の御用は、中々大望な御用でありたが、綾部の竜宮館が高天が原と相定りたから、良の金神が変性男子の身魂が出口の神であるから、出口の手で筆先に書かしたら、良の金神が書くのであるから、何処からも手をさへるものは世界にない様になるのぞぞよ。今度の弥仙山の御伴岩戸開きの御伴は、まう此行先にはまう無き御用でありたぞよ。木の花咲耶姫殿の分霊を頂きた御礼やら、結構な御用でありたぞよ。直霊と(朝野の事である)出口直霊と申すから、位田の四方与平の家内とみと申すのが松心(何時もかわらぬ心なり)、塩見順が変らん心が松心で、直霊の御伴して呉れて、神は変らん心を好くから、花の心はいやと申すのぞぞよ。御迎ひが

(御迎ひ人名、前にあり略す)

二度目の世の立替へ  
二度目の岩戸開き  
この行先にはなき事

世を持ち荒しなされてそ

二度目の世の立替、二度目の岩戸開きと云ふ様な大望な事は、まう此行先にはなき事ぞよ。有りてはならん、末法の世を縮めて金神の世に致して、二度目の世を立替へて二度目の岩戸を開いたら、まう此先で岩戸は閉める事は出来んぞよ。岩戸開きの御伴御迎ひは誠に結構な事、万古末代名を残すは、出口直の手で、昔から此世出来てからまだなき事を書き残すは、良の金神稚姫君の命が出口の神と現れた折の世が、世が至り過ぎて此世へ出て御いでる神さん、世を持ち荒しなされて其世を受取る折が、淤与岐の弥仙山のおそらの木の花咲耶姫殿の神殿の中での、大望

の世を受取る——大望な  
岩戸開き

高天原へ分りた神様が  
お越しになりて御用仰せ  
つける

真暗がりになりておりた  
世を、岩戸開いて明けの  
鳥と致す

出口の心が冴へば空も冴  
へる  
世を変へて金神の世にな  
ると物事早くなる

な岩戸開きを致したのであるぞよ。何事も神の致す事は人民では分るまいがな。

神が足掛三年、弥仙山で世の立替の仕組、良のとの仕組を致すには、出口直を彦火々出見の命の御宮の中へ、明治三十四年の九月の八日に御苦勞になりて、有明の月の夜に出したのでありたが、皆神の都合の事でありたぞよ。

夫れから明治三十六年の四月二十八日迄、岩戸はびつたり閉めて置いて、竜宮館と弥仙山とで仕組致したが、空がさへんと申して筆先に出してあるふがな。是れからは此高天が原へ、分りた神様は追々とお越しになりて、夫々に御用を仰せ付けて、手別け致して御守護あり出すから、世界は段々変りた事が出来るから、家々には夫々の見せしめがきつくなるから、遠方の人、誠の人に誠を云ひ聞かすから、一人になりと筆先の事を云ひ聞かして助ける事をして呉れば、其誠の人は此方が日々守護致すから、無理な心配して呉れなよ。

出口直六十八才、明治三十六年の四月の三十日、二度目の世の立替のしるし

岩戸開きのしるし、良の金神 稚姫君命変性男子 出口の神と現はれる。続きの筆先ぞよ。

二度目の岩戸は淤与岐の弥仙山でありたぞよ。燈火が消えて此世が真暗がりになりて居りた世を、岩戸を開いて明けの鳥と致して守護致すには、岩戸開きに参るには暗がりの世になりて道が分らんから、昼の白昼に火をつけて行た事を書き残すは、出口の手で書き置くぞよ。岩戸開きに行く折は提灯の火、昼の白昼に行たなれど、道暗かりたなれど、岩戸開けば世が明けて日の出の守護になると、神の方は楽に御用が出来るから、皆勇みて御用して下されよ。何も筆先に出してあるが、明治三十五年に竜宮様の御守護あるには、一度の御守護は厳しきから、霊で御守護あるよつて空がさへんと申したが、出口の心が曇りて居るから空も曇ると申して、筆先に出してあるうがな。

出口の心が冴へば空もさへると云ふ事知らしてあるぞよ。岩戸開きは大望でありたなれど、岩戸開けば何事も判るが早いから、此中役員も楽に御用が出来だすから、勇みて暮らすに近うなりたから、出口直に申してあるが、世を変へて金神の世になると、何も物事早くなると出口に申してあるのぞよ。筆先通りが出て来るぞよ。岩戸開きの御伴とお留守番と同じ御役。

御留守番が。

(御留守番途中お迎ひは御待受け御見立て、御留守番御手伝人名あれど、前に記したる故是を略す)

四月の二十八日岩戸開き致すには、二十七日の夜丑の刻に竜宮館を立ちて、大石木下慶太郎の宅に着きたのが三時に着きて、変性男子、変性女子、金勝要の大神、竜宮の乙姫殿、四魂揃ふての岩戸開き、直霊も御礼御伴、一度に



お休み御馳走になり、又帰りにも機嫌よく岩戸開きて帰りに又馳走になり、木下慶太郎因縁あるから、深い世話出来て居るぞよ。

明治三十四年の九月八日に岩戸へ遁げこみて、有明の夜に出て、木下慶太郎の家で三日休みて帰れた。

お待受けの手伝ひ、高槻の梅若さと、高槻の山室もと御手伝ひ、此お待受けの事は、明治三十六年の四月の二十八日の事ぞよ。三十三年に冠島へ参拜致した折、大石木下慶太郎のうちで、行き戻り休まして貰うて、其次が女島開きの折も、行き戻り休みて楽に参拜を皆が致したぞよ。三遍目には会長が混ぜこぜの折に、三遍目にも行き戻り休まして貰うて御馳走になり、三十四年にませこぜのおんど、ませこぜと申すのは、良の金神と稲荷講社とでありたのを、さっぱり立替えて善一つの道に致したから、此先は神の方は結構ばかりが分るぞよ。何時も時節を待てば嬉しき花が咲くから、万劫末代世は持切りに致させんと申してあるぞよ。何も時節が参りて来たぞよ。

## 沓 島 出 修

地の世界の規則定めに  
良の金神―地の世界の大神となりて

世界の岩戸開くは  
元こしらえた生神である

今度の岩戸開くのが、世界の吃驚箱が開くのぞぞよ。  
(明三七・旧一一・二二)

昔からなき事を致さす

出口の神の参るとこは結構なところであるから、大謨な御用であるけれど、昔から無き事を致さすのであるぞよ。あらましの御用をさすと四十日はかかるなり、続いて御用致したら誠に結構であるぞよ。

(明三八・旧四・一〇)

沓島の行場で変性男子の手で書いたしるしぞよ。

沓島におれた神みな世に  
良の金神稚姫君の命、出口の神と現れるは、変性男子の身魂が現はれて、沓島にお住居なされて居れた神、皆世に



あげて、世界の守護する。あげて、世界の御守護遊ばすから、世界は激しくなるから。

(明三八・旧四・一九)

世に落ちて居りた元の生神が世に上げてもらう時節参りて

沓嶋でも竜宮の乙姫殿の御住居なさる荒海であるから、激しきところであるぞよ。乙姫殿の御住居処を綾部の大本から現わして、綾部の元新宮出口が元で、やはり大嶋が入口であるぞよ。沓嶋冠嶋もおなじ事、冠嶋が竜宮の入口であるぞよ。

乙姫のお宝を受取りて

世に落ちて居りた元の生神が、世に上げて貰う時節が参りて、綾部から世に落ちて居りた沓嶋へ住居を致して居り

三千世界を自由にいたす

た神を、今度沓嶋へ来りたのは、竜宮の乙姫殿の御住居処を、変性男子が参りて、出口一太郎と出口直の六人目の伝吉とを、大謨な修業をさして、変性男子の行のあがりでありたから、今度沓嶋での修業は、人民ではようござらん用をさした御かげで、竜宮の乙姫殿の御住居処が現わしてあるから、乙姫殿が何程の御宝を持ちて御出なされて

良の金神が受取りて

も、海の底の御住居では、宝の持ちぐさりであるから、良の金神が稚姫君の命出口の神と現れるは、変性男子が現

三千世界の世の立替をいたす

れて、竜宮の乙姫殿が御宝をお受取りて、三千世界を自由に致すから、もう神界では何も表になりたから、残らず

世に出て居れる神

の金神の御宝も、良の金神が受取りて、三千世界の世の立替を致すから、世に出て居れる方の神、天地がかえりて

天地がかえりてこれまで

是迄の事は用いん様に世が変るから、従ごうておいでんと、是から身魂の立替致すぞよ。

変る

(明三八・旧四・一九)

世に出ておれる神従うて

変性男子が沓嶋へ三十三年から、三年の六月の八日に、沓嶋へ参拜、七月の八日には沓嶋開きに参りて、四年の四月十日に沓嶋へ参りて、今度明治三十八年の四月の十日に参りたのは、変性男子が現れる時節が参り来て、冠嶋へ

おいでんと身魂の立替をする

参拜致した折、冠嶋が竜宮の入口と申したでありたが、何かの時節が参りて来て、今度出口直、出口一太郎、出口直の實地の伝吉と、沓嶋へ行きたのは、沓嶋が竜宮であると云ふ事を現わせに連れ行きたのでありたぞよ。

乙姫の住居所を現はせに

竜宮の乙姫殿のお住居処と云ふことを、現わせに連れ参りたのでありたから、三人の行は大分きびしき行でありた

変性男子の行の上り

から、沓嶋の淋しき処へ押込められて居つた良の金神変性男子の身魂が、稚姫君の命の身魂であるから、今度沓嶋

の荒海で行の上りでありた故、御苦勞でありたなれど、沓嶋へ落ちて居りた元の生神、竜宮の乙姫殿が表になりて

日の出の神……良の金神の片腕に女でもなれる、改心は結構なものであるぞよ。

元こしらいた良の金神  
出口の神となりて綾の高  
天原に治まる時節

日の出の神を使いなされて、三千世界を動かすのは、今度沓嶋へ落とされて居りた、元こしらいた良の金神稚姫君の命、出口の神となりて、綾部の竜宮館の高天原に治まる時節が参りたから、何事も時節が参りたら、ぬしがでに  
なりて来るぞよ。

(明三八・旧四・二六)

出口直七十歳、明治三十八年五月三日、良の金神稚姫君出口の神と現れるは、変性男子の身魂が世に現れ、こんど沓嶋へ連れ参りて、御苦労な修業をさしたのは、因縁の深い事があるぞよ。沓嶋の難渋な所へ、お水の無いと云ふ事は良くわかりて居るのに、変性男子出口市太郎、出口の実地の伝吉、辛い行さしたなれど、実地の事を此世三千世界の世の立替と云ふ様な、大謨な事を致すのは、出口市太郎、出口の実地が一人と何かの事を見て置かんと、沓嶋にはぐるり中水ばかりでも、人民の戴く水はないなれど、誠の心がありさえしたら、実地誠をつくす人民でありたら、此世を自由に致す様になりたから、乙姫殿の御住居のとお水であるぞよ。着類、食物、小遣いは授けなされるのであるぞよ。

(明三八・旧五・三)

良めの行と世の元の御用  
出口直が沓嶋へ行て貰は  
んと世に落ちて居る元の  
生神は表になることが出  
来ん

今度変性男子が沓嶋へ行て呉れたのは、誠に結構な御用でありたぞよ。変性男子の身魂が出口直になりて来て、変性男子の行のあがりでありたから、今度沓嶋での行は辛い行でありたなれど、良めの行と世の元の御用とでありたから、中々御苦労な御用でありたが、今度出口直が沓嶋へ行て貰はんと、世に落ちて居る元の生神は表になる事が出来るので、あの難渋な所へ御水を一升持ちて、四十日が半分になるか知れんと申したでありたが、御水の無いのにも苦に致さずに、どうなりとして貰うであるぞよと思ふ精神で、二十日居れと申しても、御水の無いのも苦にも致さずと、三人の心の心配もせず、出口直、出口市太郎、出口の実地の伝吉も、一升の御水で二十日居れと申したでありたが、神の申す事は音り無き様で、たよりになるから、別に声があるでもないし、側へ来りて直には是が良の金神だと申して、姿見せて声をかけた事も無いのに、我一人言申して居りて、それを誠に致して、十四年振り

身魂の世一代の苦労  
艱難の徳によりてお水を  
授けたのである

肉体では十四年であるなれど、身魂の苦労が世一代の苦労艱難の徳によりて、今度沓嶋には御水の無い所でも、竜宮の乙姫殿の御住居所の結構なお水を授けたのでありたぞよ。



誠の行は沓島でないとい  
来ない

地の世界の大神と現れて  
地できめる規則は厳しい  
今度の規則を背いて  
底の国に落されたら――

昔の元の地を固めしめた  
のはもとの国常立の尊で  
ありた

竜宮の宮はみな綾部に  
さまる  
変性男子の苦勞をみて、  
神、仏事、人民が改心致  
さならん時節

みろく菩薩のおでましに  
なりて、みろくの世へ立

今度沓嶋へ変性男子二人の御供、出口市太郎、出口直の実地の伝吉、大謨な御用でありたぞよ。変性男子の行のおがりがりでありたから、今度沓嶋の行は、辛い行でありたなれど、今度は行のおがりがりであらう行を三人にさしたなれど、沓嶋が神国の行場となるのであるから、辛い行場であるなれど、誠の行は、沓嶋でないといでは致さんぞよ。今度の御用は、因縁の判る時節がまゐりてきて、長い艱難の年のあきとなりて、変性男子の身魂は、これだけの苦勞を致さんと、規則やぶりの身魂であるから、今度地できまりた地の世界の大神と現れて、地できめる規則は、もひとつ厳しきから、万古末代の事であるから、世に落ちたとゆうものは、難洪なものであるから、今度の規則を背いて、底の国に落されたら、沓嶋に住居を致す様なものでない。沓嶋は海の竜宮、冠嶋が入口で、沓嶋が竜宮の乙姫殿の御住居所であるから、変性男子の行じまいに、結構な御用に連れ参りたのでありたぞよ。沓嶋はきびしきとこであるのは、乙姫殿の御住居所であるから、荒海であるのぞぞよ。今度変性男子の行の上りで、海の竜宮は、今度まで現はず事わからねんだのぞぞよ。今度変性男子の規則やぶりののがしめの行のあきに、結構な御用がでけたといふ事を、竜宮の乙姫殿の御住居所を現はしたといふことを、末代残す綾部の大本であるぞよ。昔の元の地を固めしめたのは、もとの国常立の尊でありたと云ふ事を、今度変性男子が現はして、海の竜宮海は、乙姫殿が御住居の陸地であると云ふことを現はせた、良の金神が出口直、二人を連れて竜宮を開きに参りたのでありたぞよ。竜宮の乙姫殿も、大変な御悦びであるぞよ。竜宮を開いて見せんと、世界の人民の改心のだけかけが致さんぞよ。竜宮の宝は、皆綾部の竜宮館に皆おさまるのであるぞよ。海の底に何程結構な宝を置いたとて、石、瓦同様であるから、乙姫殿がかっぱつな事わかりた御方であるから、一番早い御出世なさるから、世に出て居れる神さん、乙姫殿の御働き、何かの事を見て、早く改心致されよ。世が変れば、これ迄の世のもち方ではいけんから、竜宮の宝を、良の金神が受取り、出口の神とおさまりて、変性男子の苦勞をみて、神、仏事、人民が改心を致さならん時節が参りた、元こしらいた元の生神は、沓嶋に住居をして居りて、二度目の世の立替に就いて、変性男子の現はれる時節が参りて、埋もりてをりたものは、みなほりあげなならん世が参りて、みろく菩薩のおでましになりて、みろくの世へ立替るぞよ。乙姫殿は、海の御住居、岩の神、荒の神、雨の神、風の神、地震の神、沓嶋の岩戸今度は開くぞよ。これを世界の吃驚箱と申すから、改心致さな、この先は改心致さなする様にして改心をさすから、世界

替る

元の生神が長い艱難を沓島に落されて蔭からの守護をしておる

立直しの御用と立替の御用

用

男子は経の御役

女子は緯のお役

日本は神力、あちらの国は学力

九分九でひっくり返す仕組

出口直の行の仕舞いと世

の元の御用

沓島からのおひかり

童宮様の御守護がありだすと、はげしくなるぞよ。今度はかりは改心を致さんと、我を折りて、今度世をもつ元をこしらへた元の生神が、これだけ長い艱難を、沓嶋へ落されて蔭からの守護をしてをる事も、人民ではわからまいがな。

立直しの御用になりたら、皆勇みて御用さす、されど立替の御用の間はつらかりた。変性男子の御用は、ここまで致さんと御用がつとめあがらん、規則やぶりの身魂であるから、これだけの艱難を致さんと、御用がつとめあがらん変性男子の辛い御役でありなれど、今度明治三十八年の四月十日に沓嶋へ、変性男子の行じまいに御供出口市太郎を、出口直の実地の伝吉二人の御用大謀でありたぞよ、変性男子の御用長い行のあがりでありたから、皆が辛かりたなれど、童宮を開かしたのでありたから、何かの事に骨が折れたのでありたぞよ。毎度筆先で知らしてあるが、今度二度目の世の立替がある故に、変性男子と変性女子との身魂をこしらへてありて、男子は経の御役なり、女子は緯の御役で、経を敵対て、大本のなが、皆役員いと辛かりたなれど、今度は日本は神力なり、あちらの国は学力なり、敗けたら従うてやるし、勝ちたら従はしてやる仕組がしてあるから、今度の九分九厘いたとこで、ひっくり返してやる仕組が致してあると申してあるぞよ。

明治三十八年に四月の十日に参拝をさして、出口直、行の仕舞と、世の元の御用とをさしたが、後野市太郎、直の実地の六人目の伝吉二人を連れ参りて、結構な御用がさしてあるなれど、今では左程にはないが、結構な御用でありたぞよ。昔から人の行かれなんだとこを開かして、御水の無いとこ迄も御水を授けるし、二度目の世の立替の元の御用でありたから、此世が出来てから、まだ無き事をさしたのぞぞよ。

沓嶋からのおひかりは、まだ初めての結構なおひかりでありたが、続いて又今年は又結構な事である。此先は成るべきは沓嶋を開きに参りた日に、参拝致して貰うて、おひかりを元の生神に、元の御ひかりを御供へを致して呉れば、元こしらへなされた大神様へは、世に落ちて居りた、地の世界を拵らえた国常立命から、御三体の大神様へは地の世界の大神から、元の御恩を此先は守護神に云ひ聞かして、世界の人民に天地の御恩知らせる為に改心致して身魂の磨けた人民から、此先は毎年御恩を忘れん為に、綾部の童宮館の高天原から、身魂の洗濯の出来た身魂に使はれて居る肉体を連れて、参拝を致すぞよ。



元を造へた神世の活神は  
沓島の山に落ちておりた  
蔭からの守護

良の金神国常立尊が現はれて守護致すには、元を造へた神世の活神は、沓島の山へ落ちて居りたぞよ。力量のある元の肉体のある活神は、沓島に住居を致して居りて、蔭からの守護で居りたなり、竜宮の乙姫殿は海の底の御住居で在りたなり、冠島が竜宮の入口であると云ふ事を、出口直に、初めて冠島へ参拝を致した折申してあるが、明治三十三年に沓島が開かしてあるのは、これから判るぞよ。

初発に出口直、出口王仁三郎、出口澄子、八木の福島寅之助、鷹栖の四方平蔵二人の御供で開かしたなり、冠島でさへも、今に女人は能う行かん所であるぞよ。沓島は昔から人は行かなんだ所であるけれど、今度二度目の世の立替があるに就て、沓島が女人に開かしてあるぞよ。これには深い因縁の靈魂であるから……。竜宮は冠島から沓島の荒海が乙姫殿の御住居所、海の御守護は乙姫殿が御大将であるぞよ。昔から無い事が出口直にはさしてあるぞよ判らなんだ事が判る世界の大本であるぞよ。

三十三年の初発には冠島へ参れと申したでありたが。三十三年の六月の八日に、出口直、王仁三郎、澄子、四方平蔵、木下慶太郎二人の御供でありたなり、沓島を開いて貰ふたのが七月の八日、四年の六月の八日にも船の都合で十日になりたが、其折には京都方々から御供が多数ありたけれど、思念が皆違ふて居りたから、沓島へ参拝を致してから違ふた事がありたら、綾部の大本へは寄り附かれん様になると申して、即座に筆先で気がつけてあるが、世界の大本と成る大謨な所が余り粗末にしてあるから、皆これ迄には取違をして居るぞよ。

(明四〇・旧七・一一)

宋代の事が分る元の生神が世におしまれて、めしまのお山に住居を致して居りたのでありたぞよ。冠嶋と沓嶋とに落ちて居りて、沓嶋には人をよせなんだけれど、沓嶋は神国の荒行場と致して、このさきは分りた神さん、水晶の身魂でない、沓嶋では行は出来んのぞ。このさきで水晶の身魂になりたら、沓嶋に行き下され。元の生神が表になりて沓嶋に参拝を致すと、曇りた身魂はきびしき事があるよって、このさきは水晶の身魂に磨けたら、女でも行にはいけるぞよ。われもわしもと申して、間違ひ信心やら、取違ひ、慢神ありたら、海の上がこわいぞよ

(明四〇・一一・八)

みるくの神

五六七神様の霊は皆上島へ落ちて居られて、未申の金神どの、素盞鳴尊と小松林の霊が、五六七神の御霊で、結構な御用がさして在りたぞよ。

ミロク様が天の先祖

ミロク様が根本の天の御先祖様であるぞよ。国常立尊は地の先祖であるぞよ。

国常立尊が地の先祖

二度目の世の立替に就ては、天地の先祖が爰までの苦勞を致さんと、物事成就いたさんから、永い間皆を苦勞させたなれど、茲までに世界中が混乱なことが、世の元から能く判りて居りての経綸でありたぞよ。

天地の開ける時節が参りて来たから、守護神に改心が出来んと、人民には判りかけが致さんから、変性男子が現はれて、世界の実地を分けて見せるなり、次に変性女子が現はれると、ビックリを致して、世界中が一度の改心を致さな成らんような神事ことが在るから、改心が一等ぞよ。

今度上嶋へ坤の金神の身魂が御参りに成りたに就て、変性女子の御苦勞な御用の事實じじを顕はずぞよ。

変性女子が現はれると、坤の金神どのの神力ちからが出るから、誠の心で願へば何事でも直ぐに聞済みあるぞよ。

変性女子の身魂を表に出す

天の御先祖様が世に落ちておいでましたゆへ、地の世界の先祖も、世に落ちて居りたから、世界中が暗黒くろくも同様に化て了うて、斯の世の立替いたすのには、中々に骨が折れるなれど、何彼の時節が参りたから、是から変性女子の身魂を表に出して、実地の経綸を成就いたさして、三千世界の総方様へ御目に掛けるが近よりたぞよ。  
出口直八十一歳の時の筆記。

神島開きの御用

大正五年の旧五月五日には、変性女子の身魂に、昔から永らく世に隠れて守護を致して居りた、坤の金神の住居を致した播磨の神嶋が開かしてあるが、人民からは左程にも無い御用の如うにあれども、神界では大変な神業かみわざでありたぞよ。朝日の直刺す夕日の日照す高砂沖の一嶋一つ松、松の根本に三千世界の宝いけおくと、昔から言ひ伝へさして在りたが、今度は瑞の御魂の肉体を使ふて、三千世界の宝を堀上げさしたぞよ。その宝と申すのは、斯世を水晶の松の代、神世として治め遊ばすミロクの大神様の事でありたぞよ。その年の九月九日に良の金神、国常立尊が変性男子の身魂出口直に懸りて、二代三代を引連れ良めを刺して参りたのも、深い経綸のある事ぞよ。斯の因縁もモウ少し致したら分けて見せるぞよ。大正五年辰の年五月午の月の八日に、変性女子が全部すべからずと現はれて、女神の姿になりて、大本へ参りた折、出口直は変性男子国常立尊と表はれ、海潮は変性女子豊雲野尊すうぐんと現はれて、昔の神代



から杳島と神島へ別れて落ちて居りた夫婦の神が、竜宮館の高天原で、再まゐ会の祝に益がさして在るうがな。其日から変性女子の身魂には、坤の金神と豊雲野尊が守護致したから、段々と緯の御用が表はれて、ポツポツと神界の経綸が出来かけて来たので在るぞよ。此の大本は明治二十五年から申してある如うに、男子と女子と経緯が揃はねば何事も成就いたさぬのであるぞよ。坤の金神の身魂には、変性男子と女子との御用を勤めて貰はな成らんから、是からは今迄とは海潮は忙がしうなりて、苦勞が段々殖へて来るから、今迄の身魂では能うしのび忍耐んから、七十五日の神から修行をさしたのであるぞよ。この先きは変性女子の教祖と致して、男子の直系の二代三代の後見を致さすのであるから、坤の金神の女子は一代の役であるから、此の次第を取違ひ無きやうに氣を付けておくぞよ。

大正五年の五月に、五六七の大神様が大本へ御降臨おくだりあそばしてから、余程判る人民が大本へポツポツ参りて来るようになりて、今では世界の大本と申しても、余り耻かしよう無い様なれど、神から見れば未だ未だいはのいの片方までも判りては居らんぞよ。

誠の元の生神が高天原に  
現れて水晶の世の御用を  
いたす

綾部の大本は昔から神の経綸で隠して在りた結構な所であるから天地の神が昇降のぼりくだりを致して今度の二度目の天の岩戸を開く地場であるから、塵一本でも無いやうに清らかに致して下され。

今までは誠の元の生神は、丹後の男嶋女嶋と播磨の神嶋とに隠れて、三千世界の守護いたして居りたぞ。時節参りて天の大神様の御命令を頂きて、竜宮館の高天原に現はれて、水晶の世の御用を致すのであるから、人民は猶更この大本へ引寄せて貰ふた人民は、余程心を清らかに持ちて、善の道へ立帰らぬとウカウカ大本へ参りて致して居りたら、御神徳いたたく所ところで無い恐い事が出来て来るぞよ。是からは神は日増に烈敷くなるぞよ。人民も改心せずには居られんやうに成るぞよ。この大本は誠に結構な所の恐ろしい所であるぞよ。

天と地の元の生神  
綾部本宮の世の本の地場  
に現はれる

それで今度は天と地とを拵らえた元の生神が、綾部本宮の世の本の地場に現はれて、今度の世界を構ふて遣らねば何時までも天下泰平には成らんから、経と緯との機織の仕組が世の元から致してありたのじやぞよ。機の初り丹波の綾部、あやの神戸にあるわいなと、昔から歌が遺してありたのは今度の世界の立替立直しに就ての譬であるぞよ。経糸はモウ出来上りて天へ上りたから、是から先は変性女子が御苦勞なれど、緯糸をかけて柵機姫殿の御用を致さすのであるぞよ。珍らしき機の仕組であるぞよ。二十七年に渡りて、良の金神が出口直の手と口とで知らして置いた事の実地が今年から判りて来るから、此の大本は何彼の事が忙はしく成りて、目の廻る如くに成るから、モチト

役員しつかり致して、神界の忙がしいやうに、人間界も急いで御用いたして下されよ。一日が愚かでないぞよ。片時も早く人間界で出来る丈けの仕組にかかりて下されよ。今の大本の立廻りの人民余り気楽過ぎるぞよ。斯んな事で神界の御用には成らんぞよ。我一と骨を折りて勤め上げねば今の立廻り心が緩みて居るぞよ。

出修の神事に関して示された神論のうちの主なるものを、大本教学

研鑽の資料として二回にわたり紹介していただいたが、序文にも述べたように、大本の歴史を緩まず神秘の事蹟のわずかずのうちにも、ことわけて「出修の神事」は、大本の基礎的神業（型）として、また大本神学の実証として、まことに重大な意義をもつものである。

「言いおきにも書きおきにもないこと」を世の元の親神が現われて説き示されている大本の根本教典である「経緯の神論」ならびに「靈界物語」による「大本神話」についてわれわれはさらに深く、大本信仰の本源として研鑽さして頂かねばならないことを痛感するものである。

大本出現の意義、大本神業の由来は、まさに「大本神話」にもとづくものであるからである。

近時、興味ある事象のなかに、「神話」について語られることが非常に多くなってきたことである。国の内外を問わず、文学、映像および舞台芸術の世界においても、いまやブームといわれるほどに、神話をテーマにしたかずかずの作品が世に問われている。

その神話に対する姿勢、志向のなかに「西欧的ロゴスのみを絶対視するおごれる欧米人、そしてそれに追従するわが国知識人の大半に対する重大な警告」（レヴィ＝ストロース「民族学者」）として取りあげられ、「人類文明の根源にあるもの、それは神話である」との深い

認識に立っている。

現代の知識人の多くは神話を非合理のものとして、神話はまさに「過去、現在、未来を同時に関連する」。その恒久性ゆえに歴史の内にありながらそれを越えるものである。——明治以後わが国の知識人が絶対視して来た西欧思维に対する根源的疑問が起り来たり、それに対する安易かつ一方的評価が再検討を迫られている時期にはかならない。特にいわゆるヒューマニズムやマルクシズム、社会主義レアリズムといった不動とも思われた価値が全面的にゆらぎ出した時代である」とする。

以上の社会、文化的現象や所論にもみられるように、現在は、「神話」に対する再認識が強く求められている時代となった。

大本神の経緯のまにまに、神世から一貫して展開されてきている大本神業——三千世界にわたる——のなかにみる「大本神話」こそは決して過去の神話ではないのである。今の世にもまた人類の将来にわたっての、生きた大本神学の根源をなすものである。

「大本神話」こそは「人類全体の神話」たるべきものであると信ずるものである。



# 宗医一体の医学目ざして

—序 説—

明治以来一世紀にわたって欧米の文化を吸収した日本は、一面において今日の繁栄と文化生活をもたらしした反面、それからの悪い影響や弊害も見逃し得なくなってきた。

医学の領域においても現代医学の豪華さやドラマチックな著効の例症のために、在来の漢方医的処方や諸種の民間療法はほとんど無視または蔑視される傾向さえみられた。

しかしながら、すでによく知られている如く、中国では、民族的な伝統医学と西洋医学の総合統一を目標とした医学政策がとられており、印度でも、伝承医学であるアイルベーターと西洋医学が同等に待遇されている。過般来日したガンジー首相の侍医は、アイルベーターの医師であったという。いかに民族医学を誇りとしているか、その一端がうかがえる。

## 広 瀬 静 水

西洋の科学文明を土台とする現代医学は、進歩する関連諸科学との連携のもとに、ますます専門化されつつ開発されている。その輝かしい成果は、たとえば、公衆衛生、環境衛生等々の普及と相まつての急性伝染性疾患の激減や心臓移植に象徴される未来への医学的関心に入々の目をうばいつつも同時に、ガン、脳卒中、心臓病、高血圧などの成人病をはじめとする各種慢性諸病への有効な解決法をもたない多くの欠陥や矛盾を有している。たとえば、西洋医学の薬剤がおおむね強い副作用をもち、ペニシリンのショック死、ストレプトマイシンの不治性の難聴（聾）や平衡失調、コーチゾンによる浮腫その他はげしい全身症状などを絶滅することができにくいし、また病原体がこれらの薬剤に対する耐性をうるならばそれらに対する治療はほとんど手におえなくなってしまうと

いわれる。

本来、科学という学問は、分析的細分化と遠心性拡大を宿命とする。無論分析と総合を課題とするけれども、総合は分析の進行速度に歩調が合わず、とかく遅れる。かくして科学の進歩は、自然の均衡を破壊する。人体は環境の変化になかなか適応できない。このすきに新しい病気が生まれてくる。医学は病気に追いつけない。

○ 西洋医学が、分析的、局所的、人工的であるのに対し、東洋医学は、生物的、生薬的、自然的、全物的であるために、作用が調和的、均整的そして持久的であるといわれる。そしてまたなによりも、人体における「自然良能」を重視し、これを振起作興することを根本理念とする。そのため交通災害や工場などにおける不慮の事故による身体障害、その後遺症とくにむちうち症など、或いはまた神経痛、リウマチ、慢性の心臓、腎臓、肝臓疾患などに対しても緩徐な治療効果を期待する場合が多く、最近では、リハビリテーション（職場復帰）の訓練中にも、諸種の東洋的療術が採用されようとしている。さらに心身の過労、ストレス、睡眠障害、肩凝り、頭痛、腰痛などのあるとき、或いはこれらが発生以前においても、鍼灸、按摩、指圧その他精神療法などによって無害な物理的自然療法ないし予防法をおこなうことができる。さらに

東洋医学は、東洋の風土、因習、環境のなかに生育した民族本来の体質、体力に相応して発達してきたもので、特有な東洋人の気質や性格にも適合するものといわれる。

○ 以上のような長所をもつにもかかわらず、東洋医学に関する評価は今日なお低く、専門医師の間だけではなく、一般民衆からもなお軽視される風潮を依然として払拭できない。それは何故であろうか。その大きな原因は、明治維新の政策によるものが大きいことは申すまでもない。長い間民衆の間に育ってきた伝統的医学が日本の西洋化の嵐の中で葬り去られたのである。けれども、その責任の一斑は漢方側にもあったようである。たとえば明治十一年（一八七八）七月、東京神田に官立の脚気病院が開設され、ベッドを同数に分けて洋・漢による脚気病をめぐる比較治療がおこなわれることになった。その結果は経験的に長所のある漢方の勝利となったが、その具体的治療方針を秘伝と称して公開を拒否したため、かえって世間の反感と嘲弄を来たして、結局は漢方の失脚という事態を招いたという。明治以降の漢方の没落には、その技能者たちが家伝式療術を守り、その進歩発展のために社会的に認められるような精神や研究を怠ってきた、という感がつよい。



しずかにふり返ってみると、東洋医学の医療施術や和漢薬の中には、世界的に優秀なものがあるにもかかわらず、古い伝統のまま包蔵され、未知の宝庫として開拓されずにきたものが少なくない。したがって西洋医学の粹を導入することによって、たとえば、印度で古くから長寿や鎮静に効あるものとして重宝された蛇木からの、ロウオルフィヤ（高血圧症に卓効）の精製、また中国や日本等において栄養価のものとして信ぜられて来たニンニクからの有力なビタミンB<sub>1</sub>（アリナミン）の開発、そのほか特定動物の肝臓や胆汁、朝鮮人蔘の中から精製された有効成分など、ほんの二、三の事例にすぎないが、東西医学の提携による明るい展望を指示するものとみることが出来る。たんに薬学の領域にとどまらず、生理学や病理学、栄養学あるいは診断や治療の領域等においても同様のことがいえる。

すでに大阪医科大学では兵頭教授によるペインクリニック療法に「はり」療法が利用され、大阪大学、東京大学、千葉大学、金沢大学などでも現代医学的立場から東洋医学の研究と理論の開発がすすめられている。

○ わが国においては、古くから正統的漢方医学を輸入したばかりでなく、これに幾多の改良を加え、皇漢医学として独特の発展をとげ、特に儒教、仏教、神道などと連帯して、心身

一元論の立場において新しい領域を開拓してきた。それらの中には、たとえば、白隠禅師の調息を基調とした「内観の法」などは、肺結核、精神神経症、慢性胃腸病等に對し基本的な作用するものとして今日なお一部の療養に使用されており、（白隠禅師著、夜船閑話―遠羅天釜参照）さらに、健康法ないし療養道に関しては、貝原益軒の養生訓のほか、丹波康頼の医心方、曲直瀬道三の養生物語、三浦梅園の養生訓、杉田玄白の養生不可欠、佐藤一斎の言志晩録などがすぐれている。これら東洋やわが国で発達した食養や精神療法など、西洋医学と異った原理や発想による異質の医学が、相互に敬虔な態度をもって批判的摂取を行なうことは、医学そのものをより偉大な医学へと止揚発展するものであろうと思われる。東洋医学或いは民間療法を、その未科学性のゆえに軽視することなく、西洋医学の中に東洋医学を採用し、東洋医学の中に西洋医学の技術を導入するという東西医学の積極的提携によって、よりすぐれた第三の医学ないし明日の医学を確立することは、世紀の課題となりつつあるといっても過言でない。

○ 申すまでもなく、医学は、生身の人間を対象とする。したがって医学の根本問題は、なんといっても、生命現象に対する認識と把握である。生命の神秘は、月面に到達するという科学技術文明をもってしても、今日なおほんの生命の入口に

たらずんでいるといえる。生命への追求は、生化学や分子生物学あるいは量子物理学等の専門領域から、あくことなく追求されるとしても、それは所詮富士の高嶺に登る道によって富士山の容姿が変わるごとく、そこに描がられる生命観は生化学的生命観であり、分子生物学的生命観である。科学的認識にたつ生命観は、分科された生命観である限り、生命そのものの全体像を投影するものではないはずである。

○ 科学の本質、その価値と限界を知ることが、医学のよりよき発展のために必要である。特に、医学の中心である生命の問題について、科学はどこまで真理を把握することができるであろうか。生命科学の領域では専門化は必ずしも好ましいあり方ではない。生命は分割し、分析することのできない、調和と動的秩序（平衡）を保っている全体だからである。医学は、科学技術のもつ宿命的な欠陥を、否定的ではなく、より高い次元への止揚発展の経過において、全体的な統一、調和、進歩をはかるべきときに直面している。医学を全体的にとりあげて、その本質、固有の方法、本来の使命を考究するなど、その総合のおくれを早急にとり戻さねばならない。

○ ものとを根源的にとらえ、総合的、本質的に理解してゆくことは、哲学あるいは宗教の問題である。現代は医学の哲

学が必要である。けれどもこのことは、科学の蔑視や哲学の科学に対する優位性を強調するものでは決してない。事実の精密な科学分析の成果にもとづかない抽象的な、観念的な哲学であってはならない。科学的認識による生命観を土台として、生命の真理に一步一步近づかねばならない。分科的、分析的な生命科学の情報が全体的、根源的に把握されるべき生命の哲学を必要とする。

○ 哲学は存在の学である。存在自体の理法を直視し、その直観的事実を分析することにより、その事実の合理的合法則的整合さを「分析的総合」的に再構成したとき、そこに哲学体系が成立する。じつはこのことは、正しい意味の実証科学において、すでにとられていると思われる。科学と哲学は、不完全なものがより完全をめざすところの相補の学なのである

○ 東洋医学の優秀性は、古来の賢哲たちのすぐれた直観によって宇宙や世界を把握した、その宇宙観、世界観に負うところが少なくない。より偉大な生命観、宇宙観、世界観が確立されてこそ新しい未来の医学への道がある。

○ 大本の偉大な宇宙観、世界観が、新しい医学確立に大きな貢献を果すであろうことは想像にかたくない。そのすぐれた生命観の教学的深化が、科学との協力関係においてなされるところに、出口聖師の提唱された大医学を樹立する可能性が



見出される。宗教と科学の結合は、生命の尊厳を第一義とするところの医学において、まず具体化されねばならぬ。宗教と医学の一体化こそ、東西医学の提携を、矛盾対立ではなくより高い次元へ止揚發展させ、真の正しい医学の確立を可能にするところの大前提と思われる。

たとえば、大本の宇宙観、それは又神観であり、生命観であるが、出口聖師によって示された靈力体の三大学則、即ち「神の黙示はすなわち、わが俯仰觀察する宇宙の靈、力、体の三大をもつてす。

一、天地の真象を觀察して真神の体を思考すべし。  
二、万有の運化の毫差なきを視て真神の力を思考すべし。

一、活物の心性を覺悟して真神の靈魂を思考すべし。

以上活經典あり、真神の真神たる故由を知る。何故人爲の書卷を學習するを要せんや」

は新しい医学創造の活教典ではないか。

あるいはまた、基本宣伝歌に示される「月日と土の恩を知れ」の一節は、われわれの健康觀の基礎となる深い生命の哲理を示すものではないか。さらに又、人間を宇宙の縮図（又は小宇宙）としてとらえ、人間と宇宙を相応の理において把握することは、人間存在をもっとも深い次元においてとらえる生命原理ではないかと思う。これらは、ほんの二、三の事例にすぎないが、大本の教理の中に示される自然や宇宙、そ

して人間に対する哲理は、新しい医学創造の生命の鍵をにぎる宝庫の如く思われる。偉大な思想は、偉大な医学を創造するのである。

○

宗医一体の医学の重要性は、生命の尊厳が著しくおびやかされつつある高度成長の現代社会において一層重大である。農薬、食品添加物、化学薬品、自動車の排気ガス、騒音、工場の廃液やばい煙等々、生物的自然の破壊は止まるところを知らない。

高度工業社会或いは經濟の高度成長は、もろもろの公害という悪を成長させ、多くの人間から幸福をうばう。チクロ、人工着色料、漂白剤など有害ないし不正食品の氾濫、それらに対する厚生省の消費者無視の行政措置、公害に対する企業の無責任な態度などの身辺的な公害から、大は戦争と平和の問題に至るまで、生命蔑視の風潮がたらぬいている。戦争や武器開発も国民総生産を上昇させる。科学技術を駆使して、できるだけ苦痛の多い大量殺人に熱中している間に、人間も科学技術も退廃する。ハッと気がつけば、生命の尊厳というようなものが、ほんとうに感じられなくなっているという事態が、現在の日本の社会や文化、政治や經濟のあらゆる面におこっている。医療の領域もその例外ではない。医者や医療機関における医療のマンネリズム、あるいは非常に不注意な

措置、或いはそのほかの……そういう生命への畏敬が生き生きと感ぜられなくなってしまうている医療の実態の中で、たとえば一度病氣をして死んでしまうと、残された遺族は、自然死を死んでいったとは考えず、極端にいうと殺されたという感じをもつ人々が少なくない。

たとえば、最近東大医学部付属病院に入院していた少年患者が日赤中央血液センターの血漿の有機水銀中毒で死亡した事件を想起してみるがよい。そのほか森永ミルク中毒事件、千葉医大のチフス事件、広島大におけるガン人体実験、あるいは心臓移植事件にみられるごとく、一步間違えば殺人にもなりかねない。人間の死は部分死がつかさなべて全体死へ導くといわれる。心臓移植は、脳死と心臓死の間でおこなわれるという。そもそも死とは何か、生とは何か、医道とは何か。巨大にしてすさまじく躍進をとげる現代医学のメカニズムの中で、常に根源的に問いなおされねばならぬ問題である。生命の尊厳が再びとり戻されねばならない。生命をはぐくむ生物的自然においても、人間の歴史社会においても。開祖のお筆先は、まさに生命の尊厳を破壊するものにはたいする神の怒りの言葉であるといえよう。

さらに、宗医一体の医学は、真の健康観確立にとって、一層大切であるように思われる。医学の理想は健康にある。ま

ことに健康こそあらゆる幸福の源であり、それ自体最大の幸福であると考えられる。けれども従来医学は「健康」について語ることが極めて少かった。それは医学が病気の治療を第一の使命としてきた発生的理由による。すなわち治療医学として発展してきた現在の医学においては、健康の問題を論ずるには、まだ医療の領域において問題が多すぎるのである。多くの医師たちの率直な気持は「健康の問題が大切なのはいうまでもないが、目前の患者の病気をどうして治療するか」が差し迫った問題なのである。或いは「健康とは誰でもが常識的に知っていることで、ことさらにとりあげて語るべき問題ではない」というかも知れない、けれども「健康」とは何かとたずねても、明白な回答のできる人は必ずしもそう多くはない。また健康の問題は、ことさらにとりあげて語るべき問題ではない、というが果してそうであろうか。もし健康の問題が誤って理解されれば、文化的に重大な影響を及ぼすものと考えないのであろうか。たとえば、もし、骨が太く筋肉がたくましいことのみをもって健康と考える思想があるとすれば、そこから生まれる文化がいかなるものか推測にたたくない。あるいは健康とは長寿であるとのみ考えて、「個人の死を延期して民族人類全体の死期を早める」ようなことがあっては大変である。

健康に関する定義で、今日もっとも先進的だといわれるも



のは、國際連合の世界保健組織の憲章の中で、「健康とは、単に病氣や虚弱がないばかりでなく、肉体的に、精神的に、そして社会的に完全に良好な状態である」とうたっているところのものであるといわれる。肉体的健康ばかりでなく、精神的健康、社会的健康の重要性を指摘しているところに、このすぐれた健康觀の面目がある。

精神的健康とは、たんにいわゆる精神病ではないということだけでなく、社会的健康と不可分である。アメリカの精神衛生國民委員会も「今日意味する精神健康とは、たんに精神病からまぬがれるということだけでなく、完全な人間的關係を建設し、かつこれを保持する能力をいう」とのべている。

さらに現代の大哲學者ベルグソンは「行動への意欲をもち、社会生活に柔軟に適合しながら更に、歴史創造への理想をもつ」と精神的健康を定義している。

健康問題は、全人間的に理解されねばならないものであり、靈肉一如の人間觀にたつての、人生觀、永遠の生命觀の土台の上に、眞の健康道が會得されるものであろう。

○

出口王仁三郎聖師は、靈肉一如、靈主体従の宇宙の理法にもとづく健康道を明示せられ、又数々の神示の薬法などを折りにふれ示された。例えば松と土と水は万病の薬として尊重され、そのほか肋膜炎にはユズリ葉の黒焼きがよろしいと

か、胃癌には塩のニガリ、腎臓病にはオバコ、胆石病にはボレ（カキ殻の粉）、下痢、赤痢、コレラ等には寒天の煮たもの、糖尿病には松の新芽と松の葉を煎じたもの、回虫には海岸に住む人は海人草を煎じたもの山地に住む人は松葉を煎じたもの……等々枚挙にいとまがない。

さらに、人間には天与の正食が定められており、これを破るならば、身体を損ね、天寿を全うすることができないと説かれている。食生活の重視はたんに身体的生命の健康のみでなく人間精神への重大な影響が力説されるが、さらに進んで食制改革は社会改良の第一義であると強調される点に、大本の健康論のきわだった特長を見出すことができる。

○

ご神論には、「この神は病直しの神ではないぞよ。心直しの神であるぞよ」と示される。もとより、大本は病氣治療を第一義とする宗教ではないけれども、釈尊をして生老病死を人生の四大苦といわしめたごとく、病いは人類のなやみであり、これの救済に目を閉じることは宗教の自殺にひとしい。病氣はおかけのはじまりなのである。

けれども病は、たんに個人的なものに由来するのではなく先祖代々の靈的因縁あるいは肉体的遺伝に由来するものもあり、他面、家庭的環境、社会的環境、靈的環境等々に由来するものも少なくない。さらにさかのほれば、人体の祖、天足

彦、胞場姫が神命をおかして体主靈從の果物を喰うて以来、世界の各地に妖氣發生し、天地を曇らしてきた。その「天地の大病」、「世界の国の大病」の救済こそ、大本の使命であり、この救済を通して人民の病もまた根源的に救済されるという。神世になれば人民の心は勇み、寿命は長くなると示されている。

○ 医療の社会化は、近代社会の基本的な条件の一つである。

現今わが国民医療の柱である社会保険制度のもとでは、如何に保健の点数をかせぐかは、医師の生活や利潤につながる。医師会と社会保険の支払い側との間には、中央医療協議会を場とする絶えざる紛争がつづけられており、そこでの論争の的になっているのは、医療費の問題だけなのである。国民のためのすきまのない国土医療整備計画とか、医療内容の科学性の問題ではない。無医地区をそのまま放置し、無効な保健薬、活性ビタミン剤の大量消費については触れることもない医療が栄利の対象となるところには、本質的には、人々が真の健康をうるといふ願いは、じつは実現が難かしい。

出口聖師が「疾病と罪惡とは社会の陰影なり。社会病みて人病み、社会罪惡におちいりて人罪惡を犯す。社会組織は本

源にして、各個の疾病、罪惡はその影なり、末なり、結果なり。社会組織をあらためずして、各個より疾病、罪惡を去らんと欲するものは、すなわち墨汁の中に墨痕を洗い去らんとす如し……」といわれるものの一端を示すものであろう

○ 古くからの東洋の言葉に、「下医は病気を治し、中医は人を治し、上医は国を治す」とある。大本は、下医を追うものではなく、少くとも中医、上医の理想を追うものである。

先哲プラトンは「医術とは、身体に薬と栄養を与えて、健康と体力をつくる仕事である」といい、近世の大哲学者デカルトは「人間を今までよりも一層有能に、一層聰明にするものがあるとすれば、それこそ医学である」とのべて、このような期待を医学によせた。

出口聖師は、「医学の目的は、医学をなくすことだ」といわれ、これにかわるに大医学の提唱をされている。それは病気の無い世界の実現を意味しているとともに、たんに病気をなくすことに満足せず、人間をより健康にし、新しい歴史創造の主体的役割を演ずる人間形成を医学の理想とされているかに見える。新しい世界と新しい人間、それは新しい医学の使命でもある。

(昭45・3・6)



# 五<sup>み</sup>六<sup>ろ</sup>七<sup>く</sup>の生活

——衣食住・教育の巻——

大木は宇宙根本神の神示のまにまに明治二十五年以来「生活問題」を解決するために救済の神法を天下に向って指導してまいりました。左に衣食住を中心に大要をまとめてみました。

住む家も食物着物も賜わりし

瑞の御霊の恵み尊き

神示によりますと生活一切の物を産出守護されるのは瑞霊系の神々であり、この神の流れをくむ日本固有の美風良俗を地上にひろめて地上天国を実現するのは神国の一大使命を遂行することであります。

天産自給

「人生の本義たるや、其の天賦所生の国家経綸するを以て根本原則とす。されば其の人類の生活に適當なる衣食住の物は必らず其土地に産出するもの也。故に天賦所生の人間は其の智能を啓発し以て天恵の福利を開拓して、文明の利用を研究し、その国土を経営するは、人生の根本原則たる也」

(参考文献)

出口王仁三郎全集第一卷三四九頁皇道維新について

出口王仁三郎全集第六卷二八九頁神示の世界経綸

皇道維新と経綸

靈界物語第一卷第三篇言霊解

- “ “ “ 第一五章大気津姫の段(一)
- “ “ “ 第一六章 “ (二)
- “ “ “ 第一七章 “ (三)

## (一)ミロクの食制

正食

ミロクの食制は人類は自ら生れた国土に産出した物をその季節に摂取することを正食と教えられています。

社会改良の第一義—正食

山 やま

藤 ふじ

暁 あきら

神に接する道を開く

世界平和と救世安民の経緯の素因。

# 1 天賦の食物

(神諭) おつちから、あがりたものでゆけるしぐみ(天産物自給自足経済)

○日本の人民には天から五穀、野菜、菜園物、川魚、海魚が授けてあるぞよ。

日本人(東洋人)は米食―玄米パン―白米は粕、米<sup>もち</sup>、<sup>もち</sup>糠は糠。食用の動物は水産動物、(陸上動物は人の労力の補助)

○艮の金神の天晴守護になりたら、天産物自給<sup>おつちからがた</sup>其国々の物で生活<sup>いっけ</sup>る様に致して、天地へ御目に掛ける仕組みが致してあるぞよ。

(参考文献)

大本神諭天之巻(明治二六・旧七・十二)二四頁

玉鏡二六八頁玄米食  
月鏡一七六頁食用動物

玉鏡二七五頁キノのつく動物  
玉鏡二七四頁肉食の害

月鏡二二六頁肉食  
靈界物語第三二卷第一章平等愛

玉鏡二四〇頁毒瓦斯と菜食  
玉鏡二二頁食糧問題

玉鏡二六〇頁食物  
玉鏡二六七頁食膳について

〃 二七三頁味のよい所

〃 二五四頁生命と齒

〃 〃 齒

○海藻(河川、泉)貝類、山菜、野菜、木の果実、菓子。  
○種々(くさぐさ)の物を食べることに。

# 2 食べ方

清潔を主として感謝の念をもって、天神地祇と人々に感謝しつつ食べることが大切である。

○住む土地の生産物をその季節に食べる(新鮮)完全食

火食と生食と生水  
一日二食(十二時間おき)

毎食に腹八分(時々十二分たべる)  
労働するときは多くたべる(労働が食う)

旅行・入浴・食事の間は三十分おく。  
ミロク<sup>ミロク</sup>の世は午前中勤務(朝廷)十一時朝食で二食とする。

(参考文献)

天祥地瑞卯の巻(七六卷)第一章御舟巖  
月鏡一八一頁睡眠と食事

玉鏡一七五頁旅行と入湯・食事

# 3 食事の態度

物質世界で活躍するためには肉体を食物の摂取によって健全に保



存することが根本的のやり方である。食事の方法は、正しい姿勢でなすことが肝要です。

二拍手（清潔にして）四恩を感謝しつつ、

耳（言葉と音）目（色彩と形）鼻（香）で味わいつつ口（味）に入れてソシヤクする。

お給仕は三杓子で（天国は三杓子）

（参考文献）

月鏡一八四頁お給仕について

#### 4 光線栄養学（月日と土の恩を知れ—空気）

今日は食物の栄養については種々研究されていますが色素によって太陽の光熱を摂取しますから、色彩のとりどりの食物を摂取することが大切であります。

○色々の物を食べることに。

果物など皮のまま食べて色素を活用して光線を栄養に。自然の電気・磁気等も吸収。（添加物に注意しつつ）

#### 5 嗜好品

人々にはこのみがいろいろありますが、極端にかたよらないように食物をとることが大切であります。また刺激はほどほどがよいのです。

日本酒は一日五勺（五尺の人は）

連日の晩酌は健康を害す（奈良漬状態）

酒のめば何時も心は春めけど心の花は散り乱るなり

煙草はくゆらすか吹かすもの。

番茶をガブガブのむ。緑茶（薄茶、濃茶）コーヒー。紅茶は程々に。

（参考文献）

水鏡三二二頁耐寒力と飲酒、肉食

#### 6 料理の心構え

料理には美しい心で清潔の場所で清潔な態度でする必要があります。

山河の百の馳走をなすよりも真心一つを客はよろこぶ。

歡喜と愛情にみちて誠心誠意で持ち味を生かす。

五味（あまい・すい・しおからい・にがい・からい）の調度よろしく。

（参考文献）

靈界物語第五卷第六章洗濯使

#### 7 靈界物語に示されたタマシヒの食物（日本の場合）

神示の物語に示された果物は肉体の栄養となると同時に吾々の精神に活力をあたえる物でありますから、物語の中に示されたもので自分の住所に産出する物を食べますと心に活力をあたえ、神さまに近よることができます。

栄養の考え方の中でも、大根一本が鯛一匹の栄養をもっているの聖師の教示は大いに学ぶべきであります。

梅、無花果、柿、梨、イチゴ、ナツメ、香具の木の実、ブドウ、

リンゴ、ビワ、桃、岩梨、松露、松茸、橘、ミカン、夏ミカン、

橙、山桃、銀杏、百合根、蓮の実、松。

智(魚)仁(野菜)勇(米)の食物。

ラッキョウ、大根、ねぎ(冬、青いもの)、梅干。

○大根一本と鯛一匹と同じ栄養(聖師談)

(参考文献)

玉鏡二〇八頁食物と性格

玉鏡二七五頁智・仁・勇の食物

月鏡二一八頁万病の妙薬

## 8 その他

今日は温室栽培が大いにふえましたが、温室産のものは香りがありませぬし、精神に活力をあたえる力がありません。

また下級霊に供えたものは味がまずく、栄養がすくないものです同時に食べると消化しやすいもの、消化しない物と、栄養がふえるものと減るものがあります。危険な食品はさげなければなりません。

○室に咲く千花の色は赤くとも神の恵の香なきかな

○新鮮な食物―霊のぬけた食物(店ざらし)は食べないこと。

にくみ、いかり、うらみ、ねたみ、あらしい、かなしみの心で作られた食物。

花が咲くと去年のものは霊が樹木にかえる(果物)。

○食べ合せ。

○危険な食物。

外国生産の食物(移植して十年したら日本の食物になる)。

インスタント食品。

食品加工剤(化学調味料、漂白剤、着色剤、防腐剤、香料、洗剤)

農薬(除草剤、殺虫剤)

○毒と薬

薬石は人の精神を破壊し、神魂を汚すものなり。潔斎し、根絶せざるべからず。量によって効くものは薬、副作用のあるものは毒で使用すべからず。

○薬のみ方

体質に即応して定量を定時に服用、一服で効かぬものは使用せぬこと。(土地生産のもの)

治療法、健康法との併用は慎重に。

(参考文献)

霊界物語第六二巻第四九一―)

水鏡二一頁霊と食物

月鏡二三二頁食ひ合せについて

出口王仁三郎全集第二巻宗教教育編第二編新興宗教第四章戊申詔書七二頁

## 9 料理の名人

物の味、性質、栄養を知り、食べる人の状態を理解することによって、舌に心地よく栄養となるようにする人たちです。



## 10 教祖と教主の食生活

大本の教祖と教主は菜食中心主義で淡泊で新鮮なものをおおがりになっていきます。

開祖Ⅱ麦飯、野草、乾物類、樗の実団子、落ち穂拾ひ、芋の皮、大根

の株と赤葉も食べられた。好物は桃、生湯葉、鮎の塩焼。

聖 師 穀物、野菜、川魚、海魚、貝類、小さなおにぎり。

好物Ⅰ柿、本ミカン。

二代教主 大きなおにぎり、大根飯、五目飯。

三代教主 山菜、野菜、田舎料理、お弁当、魚。

(参考文献)

玉鏡一七三頁食物

## 11 漬物の名人

季節に居住地域から産出したものだけでは食物がたりませんので保存食として漬物と干物を上手につくることが家庭経済の基礎でありますから、家庭の人たちは乾物のつくり方と漬物のつけ方を大いに学ぶ必要があります。

○白米をたべたら必ず糠漬をたべて糞で造った畳の上で暮すこと。

↓ナットー

○動物性(魚、かしわ)のものを食べたたら、野菜や海藻や果物を食することによって消化する。

○粕漬、ミリン漬、塩漬、昆布漬、味噌漬、鮎漬、酢漬、醤油漬、

(魚類、野菜)、水漬(餅)、砂糖漬等。

○押ずし

## 12 祝詞の精神(真釣りⅡ天上の儀を地上にうつす)

日本神道の祝詞にかかげられた神饌物は、理想のみろく食でありますから、この実行が最も大事であります。

御饌は高杯に盛足らはし、御酒は甕の戸高知り甕の腹満て並べて餅の鏡は八十比良加に積み重ね山野の物は甘菜辛菜種々の果実、海川の物は鮓の広物鮓の狭物、奥津藻菜辺津藻菜、御水堅塩にいたるまで、横山のごとく置き足らはして、称言意へ奉らくを。

(参考文献)

霊界物語第六〇巻第四篇善言美詞第一章祝詞

## 13 食器—清潔で感じのよいもの

### (一)ミロクの服制

#### 正衣

肉体をつくるのは正食であります。肉体を守るものは体をつつむ衣服であります。天理になつたやり方を実践して神に近づき楽しい生活をきずかなければなりません。

## 1 天産物自給の天則に従って日本に相応する服装を制定

鼻あぶらに小豆あじなり

治者、神官は絹物

実務に適する制服―職分、氣候風土に応じたもの―身分相応。  
純木綿の肌着（イザナギノ命の御衣―ワツライノウシノ神）  
時処位に應ずる服装（イザナギノ命の御裳―時置師神）

（参考文献）

大本神諭天之卷一六頁（明治三一年旧五月）

大本神諭〃 一四頁（明治二九年旧一二月二日）

靈界物語第一一巻第一七章大氣津姫の段（三）

靈界物語第一〇巻第二八章言靈解（二）

出口王仁三郎全集第五卷農村座談会三八七頁

## 2 原料

理想としては日本産出の生糸および植物性の糸を、草木染にして  
歡喜にみちて織りあげた布地を愛情をもって裁断し縫いあげた着  
物。

日本産のものを肌につけ、外国産は表面につけるのもよい。

鉱物質や動物質は身魂にさわりあれば表面につけること。

## 3 着物

木綿も絹小袖―ノリのついたシワのないひとえ物（開祖）。

清潔な服装は神と人とを歡喜させる。

見直し聞直しはあるが臭ぎ直しはない。

老人ほど美しくすること―さわやかな人生―天国の登竜門

（参考文献）

水鏡四九頁素齋鳴尊と鼻

水鏡三四頁見直し聞直しと嗅ぎ直し  
月鏡一七九頁老年と身躰み

## 4 冠婚葬祭

○結婚の際は差当り必要な衣類を一通りだけ持たせてやり、その  
余の金は新夫婦の社会に立って活動する時の資本金とすれば一挙  
兩得。

○身魂相応

（参考文献）

出口王仁三郎全集第二卷教育編第二篇第四章無題録（二）六〇七頁

## 5 宣伝使の服装（宣伝使帽と宣伝使服）

大本神諭や靈界物語によりますと、職業により服装を定めてあり  
ます。昭和十年までは二度まで制定されました。今日は宣伝使の  
場合は、礼服兼用になるものが良いと考えられます。

大本開祖―十二ひとえ―木綿の着物、紙巻草履。

出口聖師―千変万化―ひげを刺る。

宣伝使―（冠、天眼鏡、ひれ）―みの、かき、わらじ、きやは  
ん。

祭員と俗人―清潔、優雅。

（参考文献）

玉鏡二四三頁宣伝使帽

靈界物語第五卷第二五章姫神の宣示

靈界物語第六卷第三三章五大教



## 6 髪型

聖師は頭髮は神界に通じるアンテナであるから一寸以上保つ様に示された。髪をいためないように清潔に保つことが良いと教えられている。開祖は髪の色は世相の予言と教えられている。

神界へのアンテナ（一寸以上―長髪）

世相の予言（結び目の高い時代に指導者が敬愛される）。

二代教主の髪（金勝要神） 開祖帰神の初発に神眼の通り、大正

四年二代さま自ら髪型を結われた。

（参考文献）

玉鏡二五〇頁頭髪

## 7 装身具

聖師さまは老人になるほどおシャレをするように教えられた。

太古の正しい神々は光る寶石を忌み光のない自然の美しい石を身につけられた。

化粧品は霊体一致の原理によって、美しくすること（植物性のも）。

ハミガキ粉をつけて法廷にでた二代教主。櫛は植物性（ツゲ）を理想とする。

（参考文献）

玉鏡五八頁原始時代の貴重品

玉鏡一九四頁光る宝石と曲津

天祥地瑞辰の巻（七七巻）第一章邪神全滅

出口王仁三郎全集第五卷六〇一頁美人と化粧

大本神諭火の巻一六七頁（大正二年旧九月二日）

大本神諭火の巻一一五頁（明治三六年旧一月九日）

## 8 天人の服装

天人の衣類は主の神さまからあたえられ、神真の内流をうけた程度の智慧と相当する衣服を時処位に応じて着用している。

（参考文献）

靈界物語第四七巻第一七章天人歓迎

靈界物語第六巻総説

## 9 冠と履物

冠り物は人格をあらわし、履物は健康を守りますから自らにピッタリの物を選ぶことが大切です。

自分を美しく若々しく見せる帽子、活動的なもの。

活動しやすく美しい履物（下駄と靴）

お筆先―男は竹の皮のねじ花緒、女は木綿の花緒。

足袋と靴下（純木綿）。

裸と裸足（神と人の前では正衣正食を）。

（参考文献）

大本神諭火の巻一一五頁（明治三六年旧一月九日）

## 10 大本の服装史（ミロクのの雛型と世界の型）

大本開教以来の服装史をしらべますと神示に應じながら時処位相

応に変化しています。

木綿の紋服

モンペ（湯浅仁斎氏参綾のときの服装、開祖の神夢に見える竜宮神の眷族の服装そのまま）

大本祭服の制定

大本宣伝使服の制定（二度）

昭和青年会服の制定（二度）

昭和神生会服の制定。

更生ゆかた。

木の花帯。

（参考文献）

月鏡一四三頁日月模様の浴衣

霊界物語第一八卷第一章春野の旅二〇頁（八瀬大原―畑の小母の

産地―校定版）

## 11 裁縫と洗濯の名人

家庭経済は、料理、裁縫、洗濯のあり方で大きく左右されるから

ミロクのやり方としてはこの三つの名人になることである。

大木は錦の機の仕組（神論と二代教主）古い社杯をといて新しい

糸をタテとし、聖師さまの羽織が織りはじめ。

布地、染料、形を変えないよう汚穢としみを取る。

布は家庭で織りあげ―見事な裁断と縫いあげ。

（参考文献）

霊界物語第五卷第五章飯の灰

霊界物語第五卷第六章洗濯使

## (三) ミロクの家かくれ居

清居―すみきる生活（澄・住）

### 1 国民住宅の根本義

ミロクの世はスミキル（住み切る）ことでありますから、一日も早く職業、人数、気候に応じた住宅があたえられることが条件である。まず、第一には現在の住宅をフルに活用することに努力することでありませう。

統一的国民の住宅は、天産自給の国家経済を充実円満ならしむるが大眼目。

全国一人の徒食遊民の絶無を基礎とする。

(イ) 各人その家族の多寡に応じて造ること。

(ロ) 気候風土に適すべきこと。

(ハ) その職務に適すべきこと。

### 2 用材

今日はほとんど外国の材木になり、また木材以外のものが多いが植林の万全を期して、できるだけ日本の山の木で住宅をたてたいものであります。

檜は宮、杉や松は人家用。

### 3 場所（宅地）



小高い処で、草木の繁茂し、良い水の湧くところ、日当りのよいところ。聖師は住宅は天国の通りに高原地帯に建てると教示。

(参考文献)

月鏡一五四頁家を建てる場所

#### 4 方位

東北、西南を清らかにする。東南たつみの便所。西北いぶがの倉。

大神さまを奉斎したときは方位が変ったことになり、神床が良、(東北)であり、坤(西南)となるので、其処を最も清らかにすること。

理想としては主人の居間をつくること、土台の石から三尺の椽。

床は地上三尺以内(大地の霊衣三尺)。

ミロクミロクの世は家屋は平屋外。

便所は家の外に。排水と塵埃の処理を十分に。

(参考文献)

玉鏡二八九頁良の方角

玉鏡二八七頁倉と便所

月鏡一六九頁ひき目の法

月鏡二〇七頁同殿同床の儀

月鏡一五一頁主人と居間

水鏡二二頁天と地

水鏡二三頁山上の家

玉鏡二七二頁襖の開け閉め

#### 5 天人の住宅

—美しさが遥かに優っている。  
天国は木造、霊園は石造、花壇。

家屋……奥の間、寝室、部屋、門、中庭、築山、花園、樹木、泉

水、井戸、山林、田畑。

住家櫛比して都会のごとく列んで居る。大道、細道、四辻。地上の市街と同一。団体の統制者の邸宅一戸分立。

奥の間(真善美の額)床の間(七宝の欄間、玻璃水晶の茶器、珊瑚珠の火鉢に金瓶)

(参考文献)

靈界物語第四七卷第一八章一心同体

靈界物語第四八卷第一章靈陽山

霊の礎(一〇)

#### 6 庭園の樹木(大自然の縮図)

忌むもの一竹(孟宗竹は良い)と楨の木と蘭

久久延知の神のいさをに人の住む家居は安く建てらるるなり

山に野に立木のいさをなかりせば人の生命は保てざるべし

素盞鳴の神のまきたる檜こそ宮居をつくる材料なりけり

凡俗が檜の家に住いなければ宝を失ひ生命をうしなふ

人の住む家の柱と定めてし杉こそ人世の柱なりけり

杉柱もちて建てたる家に住めば心清しく病は少なし

常磐木の松は棟木に用ふこそ素尊のさだめし御規則なりけり

あか松の床柱ある家居にはまねかざれども宝集まる

人間のなきがら葬むる棺桶につくれと素尊のさだめし楨の木

槇の木を植ゑて生垣つくる家は死人病人絶ゆる時なし  
庭先に槇の植木のある家は栄ゆるとも遂に亡びむ  
素盞鳴の神の尻毛ゆ生れたる槇は不浄の樹木なりけり  
庭木には木斛木屋椏多羅弥常磐木植うれば家居栄えむ  
大山津見神のいさをに百木木は人の宝と繁り栄ゆる  
草も木も大山津見の幸わいに人の宝と繁りゆくなり

(参考文献)

水鏡二一九頁樹木のいろいろ

玉鏡二八八頁竹藪と悪魔

神の国昭和八年一月号言霊(歌集言華一二七頁)

玉鏡二七六頁植木と主人

玉鏡二七七頁庭石と配置

玉鏡二七八頁井戸の位置

玉鏡二七八頁床の高さ

水鏡二九頁小さい蒲公英

水鏡四四頁天国霊園と花壇

水鏡六三頁神様と温室

玉鏡五四頁樹木

水鏡一八〇頁樹木の心を汲め

水鏡一八八頁気候による植物の植ゑ方

〃 一九〇頁男松と女松

〃 二〇八頁桐

〃 二一三頁植ゑかへた木のため

〃 二二二頁南天と蓮

〃 二四二頁雑草は彼岸前に刈れ  
〃 二四五頁花は皆太陽に従って廻る  
玉鏡二七九頁宅地と植樹

## 7 清掃と保管の名人

(イ)手のとどくところから足の方へ(大本開祖)。

(ロ)感謝と歓喜にみちた精神をもって(聖地を清めさせて頂く心で)

(ハ)家居および家具調度一切の保管と清掃。

## (四)ミロクの喬育

聖師は「ミロクの世は教育の世界になり人格と教養の完備した人ができるから政治は玩具のようになる」と教えられているから、神示の理想の教育の実現に着手したいものであります。

(参考文献)

出口王仁三郎全集第一巻第五篇第九章 神国の研究「宝剑と宝

鏡」。

## 1 胎教(夫婦の人格の向上と日常生活によつての精

### 神教育

大本のミロクの教によつて根本より身魂の立替え立直しに全力を捧げ、霊主体従の天授の大精神に立帰り、神の御子たる天職に奉仕する。

(イ)祈願―主神と大本塩釜大神へ。



妊娠中に腹帯をグツとして働いておく→安産→丈夫な子。  
②生れた時の顔は一生を支配する。

妊娠の室を綺麗にし綺麗な絵→綺麗なお子。

火事を見ると→アザのある児。

酒を呑むと→酒呑みの児。

果物許り食べると→果物好きな子・猿みたような細長い顔の子。

米をやつと食べておくと→丸々とした肥た子。

観音さま許り見ていると→観音さまみたような顔。

◎ 霊界物語を沢山拝読すること。

聖人の教等を聞かすのはよい。

妊婦が思っている人の顔に似る。

兎を殺すと→三つ口の子ができる。

①母体を大切に。

乗物は一体によくない→安産しても→何処か弱い子。

五カ月たつと腹の中で人の形になるから→汽車は十カ月前あま

り乗らぬこと。

妊娠中に高い処から飛びおりたりして→引つけの子。

妊娠中に転ぶと流産。

ソバとタニシを食い合わせると流産。

油っこい物を食うと→髪が薄い児。

変なものを食べると→胎毒（両親の毒素）

妊娠前の避妊→立派な子はなんぼでも産んでくれたら……。

（参考文献）

霊界物語第二巻第四五章天地の律法

霊界物語第三巻第四七章夫婦の大道

大本神諭火の巻大正二年旧九月一日

出口王仁三郎全集第二巻教育編第二篇第五章愛児のために

## 2 幼児教育

○産後の神前の礼拝やお給仕は清めてその日からでもいい。

①名前をつける時に→感じの良い名を選んだらいい。

悪、鬼、邪、熊、虎とか獣の名、一郎、二郎、三郎、正、信は忌

む。

②子供の内は華やかに育てる方がよい。

三月三日と五月五日の節句はしてやったがよい（ひし餅、ちまき

は廃止）。

七五三の宮詣等は→大本ではせぬ。毎日神様を拜んでいるから、

大本本部はじめ別院、本苑、分苑、支部へ参拝。

③放任主義教育（放任の中に干渉があり、干渉の中に放任を）

両親の人格と生活の態度で不言実行が導く。

全くかまわぬ方が一番いい→谷間の木の方が役に立つ（学校の教

育は厳しいから）家庭は本当に自由な天国にしておいてやらねば

いけない。

早教育はいけない。つめ込み主義はいけない。→大器晩成。

④天才教育

すべて天才教育で一つか二つ好きなものをやらせる。

一人前になる。一つ道をズツと行きさえすればそれに関連して覚

えるものや。どんな学問でも総て付随してゐるものや。

## (中) 喬育

家庭教育などの七むずかしいことは強はず、自然の成熟に任せていた。

故に親子の關係は兄弟の如く円満にして少しの差別もなく、和氣霽々として春風の如き家庭を造っていた。

森林の中に雲を凌いで聳え立つ喬木の喬だ。現代の如うな教育の行方では、床の間に飾る盆栽は作れても柱になる良材は出来なない野生の杉檜松などは少しも人工を加えず惟神の俤に成育しているから、立派な柱となるのだ。今日の如うに児童の性能や天才を無視して庄迫教育や詰込み教育を施し、折角大木になろうとする若木に針金を巻いたり、心を摘んだりつっぱりをかけたたりして、小さい鉢に入れて了うもんだから、碌な人間は一つも出来やしない惟神に任して、思うままに子供を發達させ、知能を伸長させるのが真の教育だ(靈界物語第六九卷第三章)

## (下) 幼児の病

ハシカー水位少しずつ吞ませてもいいが冷したりしてはいけないうはっとくより仕方がない。一度したらかからぬ。ハシカは命定めほうそうは器量定め―大事にせぬといかぬ。

百日咳の葉―桐の花の蔭干しを煎じて吞ませる。一週間つづけるジフテリアも桐の花の蔭干し。

疫痢―何も食べさせず腹を干すこと。

虫がおきたというのは、身体に何か欠陥があるのや、食べたがる時は食はしたらいい。

持て余す程泣く児は―間接外流―一寸靈が感じているのや。

胎毒―出るだけ出して仕舞うより仕方はない。

親の毒気が出る。妊娠中の変な食物。

子供のひきつけ―神経系統を犯されているのや。

生れてから高い処から落ちたり(妊娠中に高い処から飛び降りたりした)。

(参考文献)

月鏡二―一頁姓名

水鏡一―一頁放任主義の教育に就て

出口王仁三郎全集第六卷農村座談会四〇九頁教育は天才教育にする

靈界物語第六九卷第三章喬育

## 3 児童教育(小国民)

聖師は十三才まで人としての人格教育を仕あげる。これには女子の先生と母親があたる。二十才まで専門(職業教育)をなし、二十才以上は国民としての教育をすと教えられている。従って十三才まで男女共学で、十三才以上はすべて専門教育をほどこすとのことあります。

○小学校では人格者が奉仕的に教師となって教育し、  
○家庭では母親が教育にあたる。

○母を見て娘をさとり信徒の行ひを見て教をさとする。

○小国民教育の根本義。

(この小国民教育は女子を以て天賦的職責とす)



十三才以下の児童教育は国体の精華を發揮し奉る智能啓発の準備時代なり。この教育制度は全国統一的たるべきものなり。而して大日本の本義と国民の天職及び精神教育とを根本基礎とする。

この時代に於ける第一の定義は、児童の心理的天賦の個性を正確に査定すべきに在り、これ将来国体の精華を發揮すべき科学的専門の智能を啓発せしむる方針の基礎を定むる唯一の必要条件なればなり。

(参考文献) 318

出口王仁三郎全集第二巻教育編第一篇皇道教育

五二七頁第一章大日本神国

五三一頁第二章皇道教育の大本

五三七頁第三章日本教育の大本

五八四頁第四章教育制度の根本改正

#### 4 女子教育の根本義

聖師は、女子は家計の主任であり夫の補助者であり子女教育の担当者であるから、これに適應するように教育する必要があると教えられた。

現代日本の女子教育は全然その根本方針の欠陥せるものあり。

抑も女子教育の第一は、児童教育者となり、母となり、一家の経営者たり、国家保全内助の勤務者たるべく、最も重要な天職は大日本精神教育の布教者たるべき事は、大日本の女子の天職たるなり(賢妻良母)。

○一家の経営者とは料理の名人であり、裁縫の名人であり、洗濯の

名人であり、掃除の名人でなくてはならぬ。特に人の長所を發見し育成し活用するとともに和合させる名人であること。

#### 5 教育の四大基礎

ミロクの世の教育のイシズエは歴史、地理、倫理、国家天職上です。この四大基礎にもとづく円満な教育が必要です。

大日本教育の大本を分ちて、

歴史上の基礎

地理上の基礎

倫理上の基礎

国家天職上の基礎

○歴史上の基礎

国民教育における諸学中の統一学として首位を占むべきもの。

歴史—その国家の成立、人民發展の過程を表示するもの。

相續人たる国民は、明確正確に国史を知了する必要がある。

我国においては歴史と経典は全然同一物

○宇宙の創成から国家人生の成立發展を記述すると同時に、

○一貫して国民の大精神の中核となり道義の大本源を成す。

○地理上の基礎

日本独自の個性あるいは民族性に応じ、日本国内でも地域に適し自ら変化即応させる教育。

外国語教育(正しい日本語の理解得から)。

○倫理上の基礎。

○神より来る絶対的倫理的基礎の上に統一して立てた教育。

○上は大学から下は小学幼稚園まで確固たる倫理的基礎の上に築かれた教育。

### ○国家天職上の基礎。

○地上の太陽として暗黒の世に光明を与へ、道によって混沌の民に統一を与ふる日本の使命。

○日本は来るべき理想世界の雛型であり地上天国の縮図。

故にこの大精神を広く深く国民に知らしめて、天賦の大使命達成を助長すること。

以上は渾然一体として融合し歴史の中に倫理的基礎を有し、地理の中に国家天職上の基礎が合体し—完全なる教育の実がある。

精神を自由にし—自然の良智良能の発達を促す。

(参考文献)

神聖昭和一〇年七月号「神聖運動」とは何か、皇道教育の基礎—  
六頁—二五頁

## 6 中国民教育の根本義

今日の大学卒も直ちに役にたつものが少い。どうしても十三才位から専門教育をしないと頭脳も体力も習得できなくなる。

二十才以下の中国民は国華發揮の専門的学芸を教授すべき時代なり。

内は国民福祉を開発すべき工、理、化、芸、農、経済等

外は、語学、国教その他世界を經理救済するに必要なる学科を専門的に教授すべきものなり。

(参考文献)

玉鏡八頁教育について

玉鏡一頁放任主義の教育に就て

## 7 大国民教育の根本義

二十才以上の大国民とは国民全体の総称なり。この時代はすでに教育せられたる所に因りて各天賦の智能を啓発し、国家経綸の天職を掌り、以て国家に貢献し徳器を成就せしむべきものなり。然り而して経世済民世界平和保全の爲—奉仕の天職を發揮す。

## 8 大国民教育の統一機関

二十才以上の国民を理想の教育をするためには、マスコミに人格者権威者のみが従事するようにしなければならぬと聖師が示されていきます。

大国民教育の機関となり、国家経綸の機関と為り、社会の事情を報告する国政運用の統一機関を制定する事は—最も重要な事業なり。蓋し現在発行せる全国の新聞を統一して、その社会教育的機関とするは最も簡便なる方策とす。

(イ)新聞、雑誌、単行本一切は権威者のみが執筆する。

(ロ)言論機関・マスコミは権威者のみで放送、執筆、演出される。

マスコミ(大衆通報、大量伝達、ラジオ、テレビ、新聞、映画、演劇、その他耳と目を通して広く大衆に呼びかける作用)

## 9 人格教育(塾教育)

初稚姫は学校教育をうけぬ、幼少母を失い、父と共に各地の霊山



霊場に参拝し、神靈に感じ三五教の宣伝使と神的苦行を経て靈魂の光を發揮。

寢食を共にして。

(参考文献)

靈界物語第五〇卷第一章至善至惡

## 10 偉大人物教育

もとのたね ぎんみ いたすは こんどの ことぞよ。

たねさへ よければ どんなことでも できるぞよ。

大人物を抜擢して教育する(指導者の育成)

天分を発見して教育する(天分の玉成)

(参考文献)

出口王仁三郎全集第一卷第五篇皇道と国体第六章現代の精神的墮落

## 11 特殊教育

(イ)精神障害(治療と訓練)

(ロ)身体障害(治療と訓練)

(イ)事故による精神障害  
(ニ)事故による身体障害

## 12 ユーモア教育

滑稽諧謔は天国の花ですよ。

笑ひのとまらぬ仕組。

嬉し嬉ししておれぬ花が咲く。

笑ひの波は一座をただよわす(靈感)

(参考文献)

靈界物語第四七卷第一八章一心同体

靈界物語第四〇卷第一八章沼の月

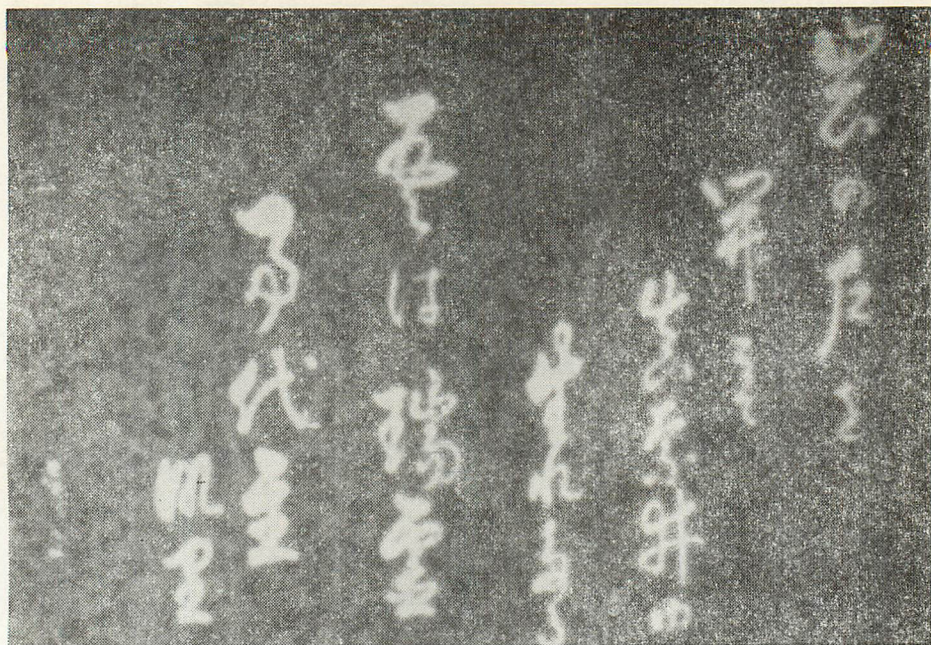
## 結 語

宇宙創造のミロク神の御教示に従って、正食、正衣、清居が実行され、健全な精神と肉体を持つ人々を神示のミロクの教育をほどこして、地上の天人すなわちミロク人種を一人も多く産み出すことは、大本神業の第一歩であるといえます。

(昭和四十一年三月十四日稿)







岩の戸を開きて真奈井に生れたるわれは瑞靈事代主なり（映画「七福神」より）

出口聖師は綾部の熊野神社に岩石に和歌をしるしてたてまつられ  
てから、大本の聖地と聖師の誕生地をはじめ日本列島の北海道から  
台湾に至るまで神縁深き土地に歌碑をたてられた。

出口聖師が宇宙の主神から重大なる神業をゆだねられた中の靈的  
神業として、日本列島を大三災から救うために、ヒキメの神法によ  
って、鶴山にたつ天の御柱の靈の太柱と亀山にそりたつ国の御柱  
の靈の太柱にマツリ合わせて、国土を永遠に安泰にたもつために、  
日本列島を幾度も巡笏された。

日本の国土中で最も神聖な靈の御柱のたつ靈国、天国の靈場に日  
本列島の各地の靈場とをむすび合わせられたのである。

この神の国日本列島の国土のマツリゴトの大神業のしるしとして  
打ち建てられたのが、出口聖師の歌碑の建設である。

聖師自作自演の映画「七福神」の中で、

吾こそは言靈清き蛭子なり

国のあちこち歌碑建つるも

と詠歌されたように、重大な意義を持っているのである。歌詞は神  
業の意義がひめられている。

よろづ代の道の礎固めむと

われ国々に歌碑を建つるも

末代の記念と建てし吾が歌碑の

おもてに牙ゆる三五の月かけ

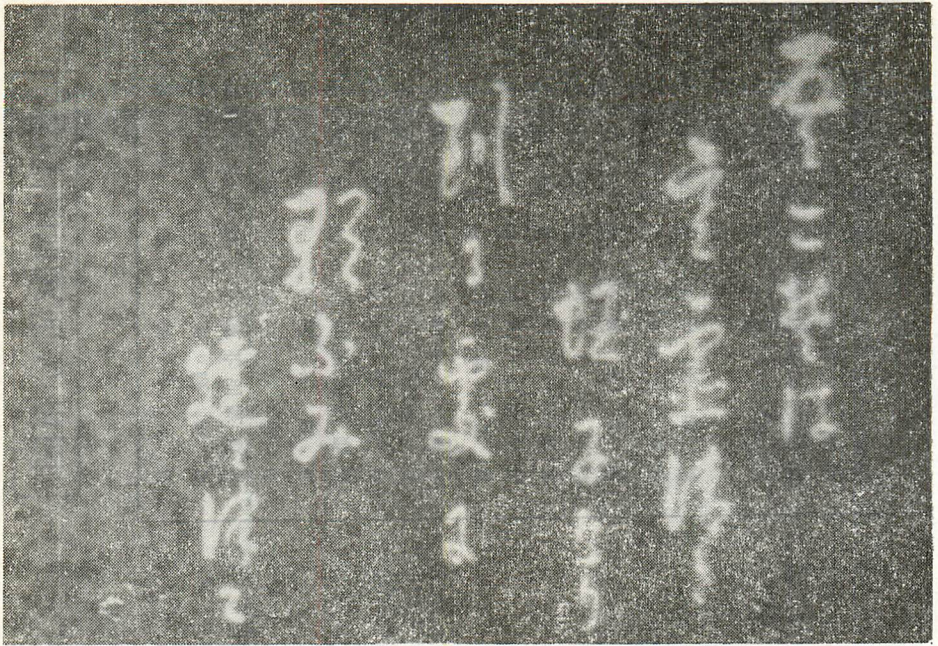
五十あまり大石に歌を誌しつと

永久の生命を吾れ保つなり

千引岩に思ひのたけの歌を彫りて

千代万代の生命とやせむ





われこそは言靈清き姪子なり至る所に歌ふみ建て津、(映画「七福神」より)

聖師の歌碑は、神業の発動の内容と、惟神大本の大道の弥栄をた  
たえられたものであるから、歌碑を御神体として発揮される、瑞靈  
大神の神徳と神教の発展は、全く同じ道を進むものということがで  
きる。

主神の神権神力の発動は言靈を最も大なるものと教えられている  
特に三十一文字の歌は言靈の結晶精華精髓である。したがって、歌  
碑にひめられた神徳神業は実に大きいものである。ここに全部の歌  
碑の歌詞をあつめて出口聖師が昭和十七年十一月二十日に染筆され  
た順序にもとづいて編集させて頂くこととした。

聖師の歌碑は、第二次大本事件にほとんど破砕されたが、大分県  
の神聖歌碑はそのまま土中に埋められたものが再建された。喜界島  
の神声歌碑、九州別院歌碑、新居浜歌碑、南海分院歌碑は元の碑に  
字だけを彫り直して建てるのが出来たもの。五六七歌碑のように  
字を削られたそのまま三基が建てられたもの元神別院の白雲歌碑  
や元島根別院の風景歌碑のように、三ツ四ツに割られたものを継い  
で建てたもの、新たにつくり直して再建させて頂いたものもある。  
みてしる発祥歌碑は三代教主のおゆるしを頂いて杓子の手を拡大し  
て建設させて頂いたものである。

つぎつぎに新しい息吹きに生まれて、歌碑が建てられてゆくこと  
は、実にミロクの神業の上からもありがたいことである。この歌碑  
に瑞の大神の神霊が降下されて威力を発揮されることも近いことであ  
らう。

(註) 歌の下に○印があるのは、出口聖師が昭和十七年に御染筆  
されたものであり、◎印があるのは歌碑を再建、新建されたもの  
である。

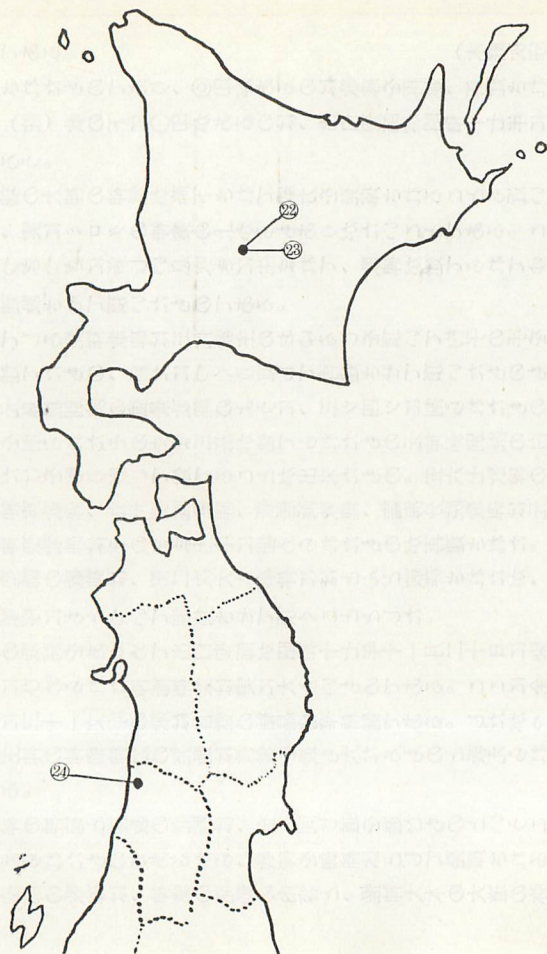
(木庭次守記)

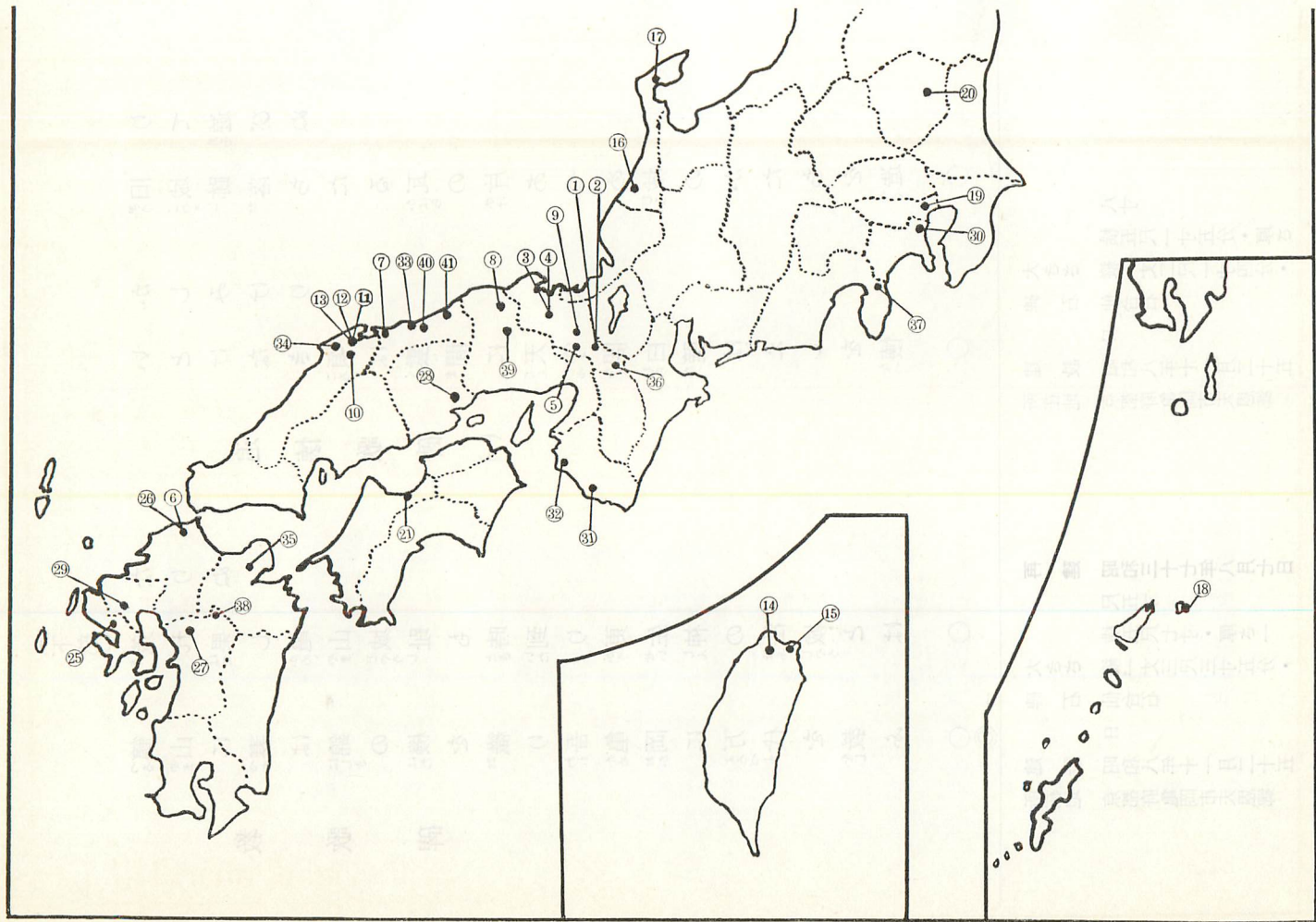


# 出口聖師歌碑分布図

- |                |                   |
|----------------|-------------------|
| ① 教歌碑          | ②② 神生歌碑           |
| ② 追懐歌碑(一)(二)   | ②③ 要巖歌碑           |
| ③ 熊野神社歌碑       | ②④ 東北別院歌碑         |
| ④ 鶴山歌碑         | ②⑤ 三六歌碑           |
| ⑤ 神聖歌碑(一)(二)   | ②⑥ 国光歌碑           |
| ⑥ 大道歌碑         | ②⑦ 九州別院歌碑         |
| ⑦ 白雲歌碑         | ②⑧ 向山歌碑           |
| ⑧ 但州別院歌碑(一)(二) | ②⑨ 五六七歌碑(一)(二)(三) |
| ⑨ 八木歌碑         | ②⑩ 関東別院歌碑         |
| ⑩ 八雲山歌碑        | ②⑪ 三栖の歌碑          |
| ⑪ 憧憬歌碑         | ②⑫ 紀伊別院歌碑         |
| ⑫ 風景歌碑         | ②⑬ 由良分院歌碑         |
| ⑬ 赤山歌碑         | ②⑭ 地恩郷歌碑          |
| ⑭ 草山歌碑         | ②⑮ 神聖歌碑           |
| ⑮ 基隆別院歌碑       | ②⑯ 城南別院歌碑         |
| ⑯ 言霊歌碑         | ②⑰ 白梅歌碑           |
| ⑰ 皇道歌碑         | ②⑱ みてしろ発祥歌碑       |
| ⑱ 神声歌碑         | ②⑲ 竹田別院歌碑         |
| ⑲ 天王山歌碑        | ②⑳ 三朝別院歌碑         |
| ⑳ 霊泉歌碑         | ②㉑ 史蹟(賀露ヶ浜)歌碑     |
| ㉑ 新居浜歌碑        |                   |

注・ゴチックは昭和45年2月現在再建されているもの。







教歌碑

鶴山に妻は錦の機を織り吾亀岡に万代を教ふ

○◎

(下部) 荒れ果し亀山城趾も時到り更生神の法城とは

○

なりぬ

追懐歌碑 (一)

いとけなき頃は雲間に天守閣白壁はえしを懐

○

かしみけり

旧城跡落ちたる瓦の片あつめ城のかたちを造

○

りて遊びぬ

所在地 京都府亀岡市天恩郷

建設 昭和八年十一月二十五日

碑石 仙合石

大きさ 縦一丈三尺三寸五分・

横五尺七寸・厚さ一

尺五寸

再建 昭和三十七年八月七日

所在地 京都府亀岡市天恩郷

建設 昭和八年十一月二十五日

碑石 仙合石

大きさ 縦一丈二尺一寸四分・

横五尺一寸五分・厚さ

八寸

(下部) 鶴山は綾部の聖地花明岡は旧龜山の城址なり

けり

追懐歌碑 (二)

玉の井の池に湧き立つ真清水はみつのお三魂の

命なりけり

寝ながらに月を仰ぎしあばら家のむかしの住

居吾眼に新らし

(下部) 玉の井はわが生れたるふる里の狭き屋敷の西

南の隅

所在地 京都府亀岡市天恩郷  
建設 昭和八年十一月二十五

日

碑石 仙合石

大きさ 縦一丈一尺五寸三分・  
横五尺一寸五分・厚さ  
九寸五分



熊野神社歌碑

神の子の真心ささげて 拈めたる神苑清しも石

の玉垣

若生して神さび立てる常磐木の松に志るけし

水無月の宮

鶴山歌碑

盛なりしみやるのあとのつる山にやまほとと

ぎす屋よるを啼く

よしやみは蒙古のあら野に朽るともやまと男

の子の品は落さじ

所在地 京都府綾部市熊野神社

境内

建設 大正十年一月

碑石 仙台石

大きさ 縦八尺五寸・横五尺二

寸・厚さ六寸

再建 昭和四十三年四月八日

所在地 京都府綾部市本宮山

建設 昭和六年九月八日

碑石 仙台伊那石

大きさ 縦一丈二尺・横六尺・

厚さ一尺

○  
やすかはのましみつなせるみさばきをわすれ  
ざるべし千代につたへむ ○

注||このお歌は、第二次大本事件の思い出のものであるが、歌碑歌御染筆集中に附  
加されている。

### 神聖歌碑 (一)

百八<sup>も</sup>十<sup>や</sup>国<sup>そ</sup>く<sup>くに</sup>まなく大<sup>おほ</sup>道<sup>ち</sup>を照<sup>てら</sup>さむと若<sup>わか</sup>き日<sup>ひ</sup>吾<sup>われ</sup>は  
故<sup>ふる</sup>郷<sup>さと</sup>を離<sup>まか</sup>りぬ ○

ふるさとの山<sup>やま</sup>野<sup>の</sup>は秋<sup>あき</sup>の錦<sup>にしき</sup>きて吾<sup>われ</sup>を照<sup>てら</sup>せど父<sup>ふ</sup>母<sup>ぼ</sup>  
は世<sup>よ</sup>になし

(下部)  
足<sup>たら</sup>乳<sup>ち</sup>根<sup>ね</sup>の母<sup>はは</sup>も吾<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>も応<sup>おう</sup>挙<sup>きよ</sup>も生<sup>あ</sup>れし清<sup>すが</sup>処<sup>ど</sup>と思<sup>も</sup>へ ○  
ばなつかし

所在地 京都府亀岡市菅我部町

穴大瑞泉苑

建設 昭和九年八月二十三日

碑石 仙台石

大きさ 縦一丈一尺九寸・横四

尺六寸・厚さ七寸



神聖歌碑 (二)

新詩

西は半国東は愛宕南妙見

北帝釈の青山屏風を

引廻し中の穴太で牛を飼ふ

父よ恋しと西山見れば山はさ霧に

包まれて墓標の松もくもがくれ

晴るるひまなき袖の雨



所在地 京都府亀岡市曾我部町

穴太瑞泉苑

建設 昭和九年八月二十三日

碑石 仙台石

大きさ 縦六尺・横一丈四尺七

寸・厚さ九寸

再建 (新詩のみ) 昭和二十

九年八月十一日

道歌

動きなき天津日継は天地のひらけしときゆさ  
だまれる道

天の下四方の国々統べたまふ我大君のみ代は  
とこしへ

大本の神のおしへは人皆の習ひて進むまこと  
のみちなる

大もとの教は内外に開かれて玉鉾のみち明け  
わたりける

かりごもの乱れたる世を治めむと吾はあさ夕  
皇道を宣る





但州別院歌碑

(一) (更生歌碑)

三千歳の田鶴のすごもる出石山尾根のまつ風  
○  
更生をうたふ

(二)

丹頂の鶴のす籠る常磐樹を吾つる山にうつし  
○  
たくおもふ

八木歌碑

神国のほまれをながす川ぞひの松のこずゑに  
○  
澄める月影

所在地 兵庫県豊岡市倉見旧但

州別院内

建設 (一)昭和八年四月二十二

日

(二)昭和八年十一月十二

日

碑石 自然石

大きさ (一)縦七尺・横二尺・厚

さ一尺五寸

(二)縦七尺五寸・横四尺

五寸・厚さ七寸

所在地 京都府船井郡八木町福

島方

建設 昭和九年四月十八日

碑石 仙台石

大きさ 縦一丈・横四尺



瑞<sup>みづ</sup>みたま綾<sup>あや</sup>の高<sup>たか</sup>天<sup>ま</sup>に導<sup>みち</sup>びきしゆ<sup>ゆ</sup>かりの<sup>ひと</sup>人の住<sup>す</sup> ○  
める<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>里<sup>さと</sup>はも

### 八雲山歌碑

(右面) 千<sup>ち</sup>早<sup>はや</sup>ぶる神<sup>かみ</sup>の聖<sup>み</sup>跡<sup>あと</sup>を<sup>し</sup>た<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>八<sup>や</sup>雲<sup>くも</sup>の山<sup>やま</sup>に吾<sup>わが</sup> ○  
き<sup>つ</sup>つる<sup>か</sup>も

(正面) 八<sup>や</sup>雲<sup>くも</sup>立<sup>た</sup>出<sup>い</sup>雲<sup>づも</sup>の歌<sup>うた</sup>の生<sup>う</sup>れ<sup>ま</sup>た<sup>る</sup>須<sup>す</sup>賀<sup>が</sup>の皇<sup>み</sup>居<sup>ゐ</sup>の八<sup>や</sup>重<sup>へ</sup> ○  
垣<sup>がき</sup>の跡<sup>あと</sup>

(左面) 大<sup>だい</sup>山<sup>せん</sup>は<sup>み</sup>そ<sup>ら</sup>に霞<sup>かき</sup>み海<sup>うみ</sup>は<sup>光</sup>る<sup>て</sup>出<sup>い</sup>雲<sup>づも</sup>の<sup>くに</sup>国<sup>くに</sup>は<sup>錦</sup>の<sup>にしき</sup>錦<sup>にしき</sup>の ○

秋<sup>あき</sup>なり

所在地 島根県大原郡大東町須

賀(八雲山々頂)

建設 昭和八年十月十日

碑石 黒御影石

大きさ 縦十尺・横二尺五寸・

厚さ二尺

再建 昭和四十四年十月二十

四日

憧憬歌碑

出雲路の旅にし立てば時じくをわが眼引かる  
る雪の大山



風景歌碑

夜見のはま出雲不二ヶ峰中の海宍道のうみ照  
るうましかみの国



赤山歌碑

赤山の紅葉にはゆる夕津陽の影黒々と庭をゑ  
がけり

所在地 島根県松江市北堀町赤山島根本苑内三六台

建設 昭和七年十二月二十日

碑石 花崗岩

大きさ 縦一丈三尺五寸・横四尺二寸・厚さ四尺

再建 昭和二十八年十二月八日

所在地 島根県松江市北堀町赤山島根本苑内松風台

建設 昭和七年十二月二十日

碑石 花崗岩

大きさ 縦八尺七寸・横二尺三寸・厚さ二尺九寸

再建 昭和二十八年十二月八日

所在地 松江市北堀町赤山島根本苑

建設 昭和七年十二月二十日

碑石 花崗岩

大きさ 縦三尺・横六尺二寸・厚さ二尺三寸



草山歌碑（憧憬歌碑）

蓬萊のしまの要よ草山は山川すがしく生きの  
極なし

太平洋あら浪わけて常夏のしまをさやけみ吾  
来つるかも

基隆別院歌碑

足引の山川さやけし海原は太平の浪とはに世  
を歌ふ

蓬萊のしまの風光忘れかね吾は三度を渡り来  
にけり

所在地 台湾台北州七星郡士林

庄草山旧台湾別院内

建設 昭和八年八月八日

碑石 自然石

大きさ 縦六尺・横三尺

所在地 台湾基隆市幸町一丁目

旧基隆別院内

建設 昭和八年九月二十日

碑石

大きさ 縦一丈二尺・横一尺八

寸・厚さ一尺八寸

言靈歌碑

かむながらことあげなさず言靈の天照りたす  
け生くる神くに

○  
○

山川をもらもろ越の国原に生ける日本やまとの教のりを  
説とくなり

○  
○

皇道歌碑

大君おほぎみのみ代安やすかれと皇道すめみちを宣のりつつ吾われは古君ふるぎみ  
にこ来し

○

所在地 石川県小松市四丁町し

んせいゑん(旧北陸別

院)内

建設 昭和九年九月三日

碑石

大きさ 縦九尺・横四尺・厚さ

一尺七寸

再建 昭和四十年十月十八日

所在地 石川県鳳至郡穴水町古

君旧能登別院内

建設 昭和九年九月六日

碑石

大きさ 縦五尺八寸・横五尺五

寸・厚さ八寸



神 声 歌 碑

世<sup>よ</sup>をおもふ心<sup>こころ</sup>のふねに棹<sup>さ</sup>さして宮原山<sup>みやばるやま</sup>にはる  
○◎  
ばる吾<sup>われ</sup>来<sup>き</sup>つ

天 王 山 歌 碑

露<sup>つゆ</sup>のたま霜<sup>しも</sup>のつるぎをいくたびかうけて血<sup>ち</sup>し  
○  
ほにそむるもみぢ葉<sup>は</sup>

鳥<sup>とり</sup>が啼<sup>な</sup>くあづまの国<sup>くに</sup>に御代<sup>みよ</sup>をおもふ宿<sup>やど</sup>のまく  
○  
らに雨<sup>あめ</sup>の音<sup>ね</sup>さびし

所在地 鹿兒島県大島郡喜界町

坂嶺字宮原山

建設 昭和七年十二月十九日

碑石 達磨形天然石

大きさ 縦六尺

再建 昭和三十六年十二月十

五日

所在地 東京都渋谷区幡ヶ谷中

町旧天王山支部内

建設 昭和九年五月五日

碑石 花崗自然石

大きさ 縦八尺八寸・横二尺八

寸・厚さ八寸

靈泉歌碑

もろもろの病やまひを治をさむる靈泉れいせんのいさはは人の命いのち  
なりけり ○

所在地 栃木県那須郡馬頭町大

字和見旧東山分院内

建設 昭和九年二月二十五日

碑石 自然石

大きさ 縦七尺・横三尺・厚さ

一尺五寸

新居浜歌碑

和田わだの原はらうちよす波なみもしら石いしやはてなく御代みよ  
をおもふ旅たびなり ○◎

所在地 愛媛県新居浜市惣開旧

新居浜分院内

建設 昭和九年九月十八日

碑石 自然石(満福川)

大きさ 縦五尺

再建 昭和三十六年六月三十

日

神生歌碑

芦別あしわけの山やまはかなしも勇いさましも神代かみよながらの装よそは  
ひにして ○

所在地 北海道富良野市山部町

市街地北海本苑内

建設 昭和七年五月二十三日

碑石 輝緑岩

大きさ 縦十二尺・横六尺・厚

さ二尺三寸



要巖歌碑

北海道の日本要この庭は要の巖に光りそへ  
つ　つ

東北別院歌碑

北海の旅路遙けしわれはいま出羽の大野の雨  
聴きて居り

三六歌碑

(表)  
神国のとはの命を抱へたる佐世保の港はかが  
よへるかも

所在地 北海道富良野市山部町

市街地北海本苑内

建設 昭和八年九月十三日

碑石 中硬石

大きさ 縦四尺四寸・横二尺六寸・厚さ一尺六分

所在地 山形県飽海郡西遊佐村

藤崎旧東北別院内

建設 昭和七年十一月二十二日

碑石

大きさ 縦一丈三尺三寸・横四尺四寸・厚さ六寸五分

所在地 佐世保市白南風町一八

三旧佐世保別院内

建設 昭和九年九月二十六日

碑石 黒御影石

大きさ 縦一丈三尺五寸・横四尺九寸・厚さ一尺二寸

(裏) 万代の月日を浮ぶる軍港の深きは日本の要なるかな ○

国光歌碑

(表) 浪の奥雲の彼方に浮びたる生紫満くまなく朝

日は照らふ

(裏) 国のため命惜まぬ益良雄の生家の山より出で

にし常磐

九州別院歌碑

言霊の誠を筑紫のしまが根に生かし照さむ惟

神吾は

所在地 小倉市赤阪字大山旧筑紫別院内

再建 昭和八年十一月八日

建 設 昭和八年十一月八日

碑 石

大きさ 縦一丈八尺・横四尺八寸・厚さ二尺六寸

再 建 昭和三十年十一月二十三日福岡県行橋市椿市村常松

八千代分苑内に再建・昭和三十

九年三月二十一日北九州市

小倉区妙見町二丁目筑紫分苑内に移転

所在地 熊本県鹿本郡吉松村豊田九州別院内

再 建 昭和八年九月八日

碑 石 九の峰自然石(真石)

大きさ 縦七尺六寸五分・横四尺三寸五分・厚さ二尺八寸

再 建



向山歌碑

皇神の誠ひとつの御教を永久に生かさむ吉備のくにはら

山紫水明比ぶものなき神くに千代の命の道ひらくなり

月も日も五六七のたちに向山の尾根ゆ照らさむ神の光を

更生の靈気ただよふ日の本のはるを抱きて照れるたかどの

まめ人の誠ひとつの活動きに向山聖地はかがやき初めたり

所在地 岡山県赤磐郡瀬戸町方

富旧中国別院向山

建設 昭和九年十月三十一日

碑石 御影石

大きさ 縦八尺・横一丈五尺・

厚さ一尺

再建 昭和四十二年十月八日

むかふ山の春を遊びて天津国の清きすがたを  
○  
しのびぬるかな

本宮山尾の上のまつに懸る月の影もおぼろに  
○  
さくら咲くなり

吉井川登る小舟のまほかたほ水そこしろく影  
○  
はゆる見ゆ

つつじ咲く向山はやしを戦がせて吹く春風に  
○◎  
うぐひすの啼く

白布をさらせし如く見ゆるかな吉井の川の清  
○  
き流れは

青垣山よめにめぐらす向山のもすそを洗ふ吉  
○  
井の流れよ



くまやまの尾の上に澄める月かげをあほげば  
すがしむかふ山の館

天津日はたかくまやまの頂上をあかねに染め  
て今のぼるなり

熊山の尾の上に朝日かがやきてふもとに遊ぶ  
吉井の川霧

青山の溪間を縫ひて落ち合へるながれ吉井の  
水は長しも

五六七歌碑

(右碑石) 久かたの空にそびゆる富士ヶ峰を移して三六〇〇

の世を樂しまむ

所在地 佐賀県西松浦郡有田町

字中開旧有田分院内

建設 昭和九年九月二十七日

碑石 (中) 徳山花崗石

(左・右) 野北石

大きさ (中) 縦六尺・横六尺

・厚さ一尺二寸(左・

(中碑石) 月も日も水面にさゆる三六池の清きは神のこ  
○◎

ころなるかも

(左碑石) 瑞靈のあとをとどむる永祥山は三葉つつじに  
○◎

いろどられたり

### 関東別院歌碑

百日日を待ちくらしたる別院の庭のさくらは  
○

咲きそめにけり

ときのこまに吾またがりつこの春をあづまの  
○

くにの花を見るかな

右共に) 縦一丈一尺・横四尺八寸・厚さ一尺五寸

再建 昭和三十四年三月二十九日

所在地 横浜市中区滝の上旧関東別院内

建設 昭和九年五月二十三日

碑石 仙台石

大きさ 縦七尺・横二尺九寸・厚さ五寸五分



三栖の歌碑

三熊野の宮にまふでておもふかなわが神くに  
の生ける歴史を

神蹟をあこがれここに紀のくにのうづの風光  
に吾たま生かせり

紀伊別院歌碑

冬の日の花とにほへる紀の路なるからたちみ  
つつ楽しき旅なり

更生のひびきなるかもうぶ湯の浜にうちよす  
波のつづみたかしも



所在地 和歌山県西牟婁郡三栖

村中三栖元南海分院内

建設 昭和九年十一月十九日

碑石

大きさ

再建 昭和三十九年十一月十

九日

所在地 和歌山県日高郡比井崎

村比井

建設 昭和九年十一月二十日

碑石

大きさ

由良分院歌碑

雲霧に影はまかすも天津日の大みひかりに変りやはある

八雲立つ出雲の旅の帰り路を開祖と宿りし由良は懐かし

地恩郷歌碑

吾郷に立帰りたるこち地して地恩のあきのながめにしたるも

千早ぶる神代の歴史をしのびつつ秋の出雲の旅にあそべり

所在地 鳥取県東伯郡由良町由

良宿

建設 昭和十年二月二十日

碑石

大きさ

所在地 島根県平田市鹿園寺町

地恩郷別院内

建設 昭和十年二月二十二日

碑石

大きさ



神聖歌碑 (国東歌碑)

(表)

千早ふる神代ながらのまつりごと聖くはじむ  
る春となりけり

(裏)

国東は鳴根によする荒浪も凧ぎ渡るらむ神聖  
の風に

城南別院歌碑

常永に流れ清しきいづみ川は瑞の御霊の姿な  
るかも

所在地 大分県速見郡中山香村

野原

建設 昭和十年七月二十二日

碑石 真石

大きさ 高さ一丈八五寸・幅八

〇寸・厚さ三〇寸

再建 昭和三十年五月八日

大分県速見郡山香町内

河野字小松(在)

所在地 京都府相楽郡和束村旧

城南別院内

建設 昭和十年十一月二十五

日

碑石

大きさ

白梅歌碑

冬<sup>ふゆ</sup>されど熱<sup>あつ</sup>海<sup>み</sup>の宿<sup>やど</sup>は暖<sup>あたた</sup>かし鶯<sup>うぐひす</sup>うたひ白<sup>しろ</sup>梅<sup>うめ</sup>かほ  
る

新 建 設 碑

みてしろ発祥歌碑

(正面) 万<sup>ばん</sup>有<sup>いう</sup>の身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>をすくふこの积<sup>しゃく</sup>氏<sup>し</sup>心<sup>こころ</sup>のままに世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>  
すくへよ

(側面) この杓<sup>しゃく</sup>子<sup>し</sup>わが生<sup>うま</sup>れたる十二<sup>じふに</sup>夜<sup>や</sup>の月<sup>つき</sup>のかたち  
よくも似<sup>に</sup>しかな

所在地 静岡県熱海市海風閣

建設

碑石 昭和四十二年十月六日

大きさ

再建

所在地 熊本県阿蘇郡小国町杖

立温泉

建設 昭和三十八年五月三十

一日

碑石 輝石安山岩(噴出岩)

大きさ 縦二尺二〇寸・横一尺

三〇寸・厚さ八〇寸



竹田別院歌碑

白梅の教に開きときは木の松に治まる竹田の  
里かな

三朝別院歌碑

三四年前から来たいと思ふていた三朝温泉に  
やつと来ました

史蹟(賀露ヶ浜)歌碑

海鳥の声かしましく賀露ヶ浜のあしたになき  
て波の音高し

所在地 兵庫東朝来郡和田山町

竹田竹田別院内

建設 昭和四十一年四月一日

碑石

大きさ 縦一厨四八寸・横八八

寸・厚さ五八寸

所在地 鳥取県東伯郡三朝町字

東京

建設 昭和三十八年十月六日

碑石 大理石

大きさ 縦一厨六六寸・横六五

寸・厚さ二五寸

所在地 鳥取県賀露ヶ浜

建設 昭和四十二年七月六日

碑石 青御影石

大きさ 縦一厨四〇寸・横二厨

三〇寸

(第二次事件前に予定されていたもの)

伊予別院歌碑

草枕旅の二名の朝あけや静に浮ぶ御代のしま  
か

吾うゑし庭の若松茂りあひて竜の姿のほの見  
ゆるかな

所在地 愛媛県温泉郡荏原村恵

原町山口邸

建設  
碑石

大きさ



# 大 本 年 表 (三)

——大正十年六月〜大正十三年十月——

注||記事中、上段の数字は新、下段( )内は旧暦月日

大正十三年十月	十月二十三日	十月二十三日	十月二十三日
大正十三年九月	九月二十三日	九月二十三日	九月二十三日
大正十三年八月	八月二十三日	八月二十三日	八月二十三日
大正十三年七月	七月二十三日	七月二十三日	七月二十三日
大正十三年六月	六月二十三日	六月二十三日	六月二十三日
大正十三年五月	五月二十三日	五月二十三日	五月二十三日
大正十三年四月	四月二十三日	四月二十三日	四月二十三日
大正十三年三月	三月二十三日	三月二十三日	三月二十三日
大正十三年二月	二月二十三日	二月二十三日	二月二十三日
大正十三年一月	一月二十三日	一月二十三日	一月二十三日

和暦・干支	西暦	大 本	日 本	世 界
大正二〇・辛酉	一九三三	<p>6・19 墓地問題に関して役員会の招集。</p> <p>6・20 天王平奥都城移転につき栗原白嶺ら五名府庁に陳情訴願。</p> <p>6・25 京都府警察部長来綾巡覧、天王平奥都城を本月中に改築するよう命ず。</p> <p>「八面鋒」（王仁文庫）発刊。</p> <p>6・26 開祖奥都城一部改修の奉告祭。二十八日に着工。</p> <p>7・7 二代教主、浅野和三郎夫人と京都の梅田宅へ。</p> <p>7・10 聖師、亀岡瑞祥閣竣成式へ。</p> <p>7・17 (十六日付にて) 会長以下幹部の更迭発表。修齋会会長に湯川貫一氏。</p> <p>7・23 開祖奥都城改修工事終了。</p> <p>7・27 (6・23) 神示により本宮山神殿に御三体の大神様仮鎮座の祭典執行、齋主は三代直日。</p> <p>7・29 「大正日日新聞」に、現実社会に復帰し社会的事業経営を行なうという宣言書を浅野、岸一太ら発起人となって発表。</p> <p>7・30 明治天皇祭遙拝祭。</p> <p>8・10 「神の国」創刊号発刊。五六七殿において聖師の講演あり。</p>	<p>5・7 閣議、張作霖が東三省の内政・軍備を充実するかぎり援助するが、中央への進出は援助しないとの方針を決定。</p> <p>6・3 米国務長官、幣原大使に日本のシベリア占領に基づくいかなる要求、権限も有効を認めないとの5・31付覚書交手。</p> <p>7・4 幣原駐米大使、日英同盟は米国に対抗する意図を有せずと声明。</p> <p>7・7 日英同盟、国際連盟に国際連盟規約が日英同盟に優先すると共同通告。</p> <p>7・11 米国、日・英・仏・伊に軍備制限、太平洋・極東問題討議のため、ワシントン会議の開催を非公式に提議。8・13日本を正式招請。8・23参加を回答。</p> <p>8・20 この日頃、近藤栄蔵・高津正道ら曉民会を中心に八曉民共</p>	<p>6・24 駐米中国公使、日英同盟反対論を演説(中国に日英同盟更新反対運動さかん)</p> <p>7・1 上海で中国共産党創立大会。</p> <p>7・6 ソビエト赤軍・モンゴル人民革命軍、クローン占領。7・11 活仏政権と人民革命党の連合政府成立。</p> <p>7・7 ルーマニア・ユーゴ間に同盟条約調印(両国・チェコ三国間の八小協商完成)。</p> <p>7・21 スペイン軍、アブドルクリムの率いるリーフ住民にモロッコのアヌアルで大敗北。</p>



<p>大正十一年</p>	<p>一三三</p>	<p>9・15 聖師、大本事件公判開廷のため京都</p>	<p>8・15 (7・12) 聖師、第五十回のご誕生祭。満五十年と題する講演あり。十曜の神紋を個人宅神前の簾その他に使用を禁止。京都府内務部長神苑視察。</p> <p>8・18 聖師は谷村、中野および富沢弁護士その他を従え、京都地裁へ出廷。</p> <p>後、京都梅田信之の厳父発葬式に参列。</p> <p>8・20 天王平奥都城背後の稚姫君神社神霊教祖殿へ遷座。聖師、亀岡万寿苑の月宮殿ご造営の相談会へ。修斎会を万寿苑へ移転のこ</p> <p>と決定。</p> <p>8・25 聖師、教団活動の中心舞台を亀岡にうつすという方針を発表。</p> <p>8・27 天王平稚姫君神社旧社殿焼却奉告祭</p> <p>8・28 稚姫神社旧社殿焼却。</p> <p>8・30 「道の大本」(王仁文庫)発刊。</p> <p>8・31 大正日日新聞社、大阪市北区天満橋筋西四丁目二十二番地へ移転。</p> <p>9・3 修斎会顧問相談役員長会議開催。大本事件公判後修斎会を亀岡に移し、大道場との合併、出版局を事業体として独立さす等の事を決議。</p> <p>9・8 井上副会長、伊勢大神宮、加良須神社、熱田神宮参拝のため出発。</p>
<p>9・15 聖師、大本事件公判開廷のため京都</p>	<p>産党V結成。11・12検査始まる。</p> <p>8・26 極東共和国との会議を大連で開催。十一年4・16打ち切り。</p>		
<p>9・15 聖師、大本事件公判開廷のため京都</p>	<p>9・17 尾崎行雄・島田三郎・吉野作造ら軍備縮小同志会を結成。</p> <p>9・27 ワシントン会議全権に、加藤友三郎・徳川家達・幣原喜重郎を任命。</p> <p>9・1 (英)パレスチナの憲法公布(アラブ人の反対で発効せず)</p> <p>9・12 (米)フィリピン事情調査使節団報告を発表、即時独立の付与は不適と勧告。</p>		

へ。本宮村の村民は聖師の事件平安祈願のため産土神社へ参拝。

9・16 大本事件公判開廷。

9・22 大本事件につき、今日まで毎日、大神様および七社へ祈願あり。

9・23 公判開廷後の綾部はにわかに関体参拝が増加してきた。

9・25 昨夜来の暴風雨、綾部をおそい、明治三十九年来の大水なり。

9・27 大本事件公判終了。

9・28 聖師、ご帰綾。御礼の祝詞奏上後、聖師の訓示あり。

10・4 聖師、大本事件判決のため京都へ。

10・5 (9・5) 聖師懲役五年(不敬罪)の判決言渡さる。直ちに控訴の手続きを了す  
聖上御病氣平癒祈願が行なわれる。

10・7 聖師の訓示あり。

10・8 (9・8) 「神より開示しおきたる靈界の消息を発表せよ」との神示でる。

10・10 「五色草」(王仁文庫) 発刊。

10・11 聖師、京都府庁で本宮山神殿取毀命令をうける。二代教主から大本の根本立替の覚悟について訓示あり。

10・13 本宮山神殿取毀事件に対し、修斎会役員総辞職。

10・1 大日本労働総同盟友愛会創立十周年記念大会、日本労働同盟(総同盟)と改称。

10・15 岐阜県、小作争議取締りのため、警察犯処罰令に追加条項を制定(いわゆる農業警察令のうち十数県で制定)。

10・17 台湾文化協会結成(総理林献堂、台湾人の政治団体)。

10・20 仏・トルコ(アンカラ政府)間に協定調印。フランス、キリキア撤退に合意。



10・14 (9・14) 大改革発表。

聖師、二代教主隠退し、直日、教主に就任。  
皇道大本を「大本」と改称。

大日本修齋会は亀岡大道場に移転合併す。修齋等級、皇道大本役員、教監、教諭等廃止。

10・15 本宮山における最後の月次祭。当日は綾部七社祭で、人出多く本宮山ご神苑は非常にぎわう。

10・16 開祖の神霊から霊界の消息の発表についてのきびしい督促がある。

10・18 (9・18) 聖師、和知川河畔松雲閣において、霊界物語の口述を始めらる。筆録者は谷口正治、外山豊二、加藤明子、桜井重雄の四人。

本宮山神殿取毀につき奉告祭を行い、三代教主を齋主として大神様の御昇神を奏上。

10・20 (9・20) 本宮山神殿の取毀し始める。当日何鹿郡在郷軍人三千余名の総動員あり。

10・26 三代教主、弥仙山参拜。

10・27 本宮山神殿取毀完了。

本日より五六七殿にて、夕拝後、霊界物語の拜読を連日なすこととする。

11・2 開祖満三周年祭。

11・9 聖師、大阪へ。

11・4 東京駅頭で、中岡良一に原首相刺殺される(60才)。外相

11・7 (伊) ローマでファシスタ全国大会、戦闘者ファッシュヨ、国

11・10 三代教主、京都へ。

11・12 聖師、高熊山参拝へ。

霊界物語第三巻のご口述のため、当分亀岡瑞祥閣へ滞在。

11・16 外山豊二「霊界物語」出版の件打ち合せにつき亀岡へ。大正日日新聞社長沼家雲涯辞任。後任として御田村竜吉就任。

11・19 聖師、亀岡からご帰綏。教主殿で物語ご口述。

11・30 秋季大祭。午前九時から五六七殿において「霊界物語」の拝読あり。

12・2 亀岡にて大日本修齋会移転祭あり。

12・6 大正日日新聞発売禁止、論説「迷える哉当局」が理由。

12・7 大阪控訴院検事以下数名来綏。

12・8 大正日日新聞、また発売禁止。

12・11 五六七殿御礼後、教祖殿、祖霊社の御礼もすること改まる。

12・21 二代教主から訓示あり。

12・30 霊界物語第一巻発刊。

物語出版のため、神の国十二月号は発行を中止。

1・4 出口りよう（開祖の四女）帰幽。

1・8 聖師、霊界物語ご口述のため、鳥取県岩井温泉にご出発（五〜六巻を口述されて

内田康哉、臨時首相を兼任。

11・5 内閣総辞職。

11・12 西園寺公望、元老の意向として高橋是清を継後首相に推薦尾崎行雄、全国普選断行同盟を組織。

11・13 高橋是清に組閣命令。全閣僚留任のまま高橋内閣成立。

11・14 政友会協議員会で、総裁に高橋是清を推戴。12・21大会承認。

12・1 ワシントンで、山東問題に関する日華会談開始。

（時事新報）夕刊、日英同盟廃棄に代る米仏を加えた四国協定成立のニュースをスクープ、世界的に話題となる。

12・12 ワシントン会議で加藤全権、太平洋防備の現状維持を提議

12・13 太平洋方面における島嶼たる領地の相互尊重を約する日・

英・米・仏四国条約調印（大正十三年8・17批准書寄託、同時に日英同盟条約終了）。

12・26 東京南多摩郡小宮村の小

家ファッシュョ党に改組。

11・12 ワシントン会議開催。第一回総会で米全権ヒューズ、建造中の主力艦の廃棄・保有比率の設定を提案。

11・21（伊）ファッシュョ団体、ローニヤ市会（社会党掌握）を襲撃、市庁舎を占拠。

12・6 アイルランド代表、自治条例に調印。北部を除き英自治領の地位を承認。

12・12 ペルシャ・トルコ（アンカラ政府）間に講和修好条約調印

12・18 コミンテルン執行委員会労働者の統一戦線戦術を決定。

1・15（仏）ポアンカレ内閣成立



二十七日ご帰綾)

1・28 (1・1) 六合拝、開祖帰神後満三

十年、教祖殿にて神言奏上。

1・1 霊界物語発刊のため、神の国二月号発行中止。

2・3 節分祭、五六七殿内に神劇舞台仮設

霊界物語の少女劇及び神劇あり。

2・4 大日本修齋会を大本瑞祥会と改称。

支部を分所、会合所を支部と改称。

2・5 聖師、三代教主、高熊山参拜。

聖師、霊界物語ご口述のため亀岡滞在。

2・10 神馬「剣早」献納。

2・15 大阪控訴院にて大本事件の公判開廷  
六月二十一日と決定。

木の花暁丸(直日)歌集「しら梅」中村洋紙  
店より発刊。

2・20 聖師、亀岡からご帰綾。

2・24 三代教主の誕生祝、綾部在住信者に  
饗応、五六七殿にて神劇あり。

2・28 大本に取締、世話係をおく。

3・7 (2・9) 聖師、高熊山入山満二十

年。松雲閣において聖師、霊界物語第十二卷  
の総説歌および祝詞等を蓄音器に吹き込まる  
(東京の三光堂の技師来る)

3・8 聖師、蓄音器に吹き込みあり。二代

作人五十人余、小作料三割減を要  
求し小作地返還(大正十一年五月  
要求貫徹し解決)。

1・22 普選断行・綱紀肅正民衆  
大会、東京赤坂で開催。

モスクワで開催の極東民族会議に

片山潜・高瀬清・徳田球一ら出席

1・23 樺太町村制公布。

2・2 ワシントン会議で日本全

権幣原喜重郎、对华二カ条中の

第五号要求の撤回、満蒙投資優先

権の放棄を声明。

2・6 ワシントン会議で、海軍  
軍備制限条約、中国に関する九カ

国条約・中国関税など調印。

2・11 太平洋委任統治諸島に関

する日米条約調印(ヤップ島に関

する米国民の特権を承認)。7・  
13公布。

2・23 憲政会・国民党・無所属  
団共同提出の統一普通選挙法案上

程。討論中傍聴席より生蛇投入。

同夜、普選要求の群衆数万、警官  
と衝突。2・27同法案否決。

2・23 全国商業会議所大会、営

2・4 (印) チャウリィチャウラ  
で農民の駐在所襲撃事件起る。2

・11ガンディー、非協力・不服従  
運動停止を命令。

2・15 ハーグ常設国際司法裁判  
所発足。

2・27 (中) 孫文、桂林で北伐を  
宣言、4月第一次北伐を開始。

2・28 (英) エジプト独立を宣言  
し保護統治を放棄。3・15ファ

ド一世、国王を称する。

教主の霊夢により西の御宮前の建物を移転して広庭となすこととなる。

3・25 (2・27) 第十四卷、第五百六十七章の口述終えらる。

3・30 大八州彦命の神霊を五六七殿神劇舞台に鎮祭。

3・31 聖師お吹き込みのレコード到着、一同五六七殿にて拜聴。

花井卓蔵氏を大本事件の弁護士として届出。

4・11 春季大祭。分所、支部長会議。

4・12 開祖祭および祖霊祭、夜神劇。

4・13 「祝詞集」発刊。

4・14 近侍藤松氏上京の後任として佐賀伊佐男(出口字知丸)勤務。

4・17 天声社新館竣工、出版局を天声社と改称。

4・26 元伊勢参拜。二代、三代教主以下百二十余名。

4・1 物語出版のため、神の国四月号発行中止。  
5・2 聖師、亀岡にて物語十六、十七、十八巻の口述を終えられど帰郷。  
5・4 弥仙山参拜。二代、三代教主以下百六十名。  
5・10 大本購売組合解散。

業税全廃を決議。

2・25 《旬刊朝日》創刊。(4  
・2 《週刊朝日》と改題)

2・1 今井嘉幸を中心に、西日本普選大会結成。

3・3 京都で、全国水平社創立大会。

二十新聞・通信社代表、過激社会運動取締法案反対新聞同盟を組織

3・10 上野で平和記念東京博覧会開催。サンガー夫人来日。内務省、産児制限の公開講演禁止を条件に上陸許可。

3・24 貴族院、過激社会運動取締法案を修正可決(衆議院で審議未了)。

3・25 衆議院、陸軍軍備縮小建議案を可決。

3・30 未成年者飲酒禁止法公布

4・2 《サンデー毎日》創刊。

4・9 日本農民組合、神戸で創立。

4・12 農会法・借地借家調停法公布。

4・20 治安警察法改正公布。

3・17 ポーランド・ラトビア・エストニア・フィンランド間に友好・中立条約調印。

4・10 ジェノア国際会議開催。旧ロシアの債務・国際経済問題を討議(独ソ参加)。

4・16 独・ソ間にラパロ友好条約調印。相互に賠償要求を放棄し国交を回復。



<p>大正二、三、四年</p>	<p>7・31 二代教主以下四百余名、杓島冠島參</p>	<p>7・1 水曜会・曉民会・建設者</p>	
<p>大正五、六、七年</p>	<p>7・29 二代教主一行ご帰綾。 7・28 二代教主一行伊豆大仁にて、バハイ教の宣教師フィンチ女史と邂逅せらる。 7・21 二代教主一行仙台へ。 7・17 二代教主一行山形月山へ。 7・15 二代教主一行越後路へ。 7・13 大正日日新聞社長に床次正広氏を任命。 7・7 二代教主一行加賀白山へ登山。 7・3 二代、三代教主お揃いにて北陸、奥羽地方ご巡教へ。</p>	<p>7・27 閣議、現役軍人の中国中央政府・地方官憲の顧問への就任差控え方針決定。</p>	
<p>大正八、九年</p>	<p>6・20 浅野和三郎、今後社会的事業経営に従事する旨宣言をなす。 6・21 二代教主一行仙台へ。 6・15 二代教主一行越後路へ。 6・12 加藤雄三郎内閣成立。 6・11 泰平組合、対華兵器売込み第二次契約成立。 6・10 政府、十月末までにシベリアから撤兵と声明。10・25 北樺太を除き撤退完了。 6・24 政府、十月末までにシベリアから撤兵と声明。10・25 北樺太を除き撤退完了。</p>	<p>6・22 対露非干涉同志会、神田青年会館で発会式。解散を命ぜられる。 6・12 加藤雄三郎内閣成立。 6・11 泰平組合、対華兵器売込み第二次契約成立。 6・10 政府、十月末までにシベリアから撤兵と声明。10・25 北樺太を除き撤退完了。</p>	
<p>大正十、十一年</p>	<p>5・28 (5・2) 第二十二巻、第七百十二章までの口述終えらる。 5・22 対露非干涉同志会、神田青年会館で発会式。解散を命ぜられる。 5・15 新婦人協会、治安警察法五条二項撤廃祝賀会を神田仏教会館で開く(初の婦人政談演説会) 5・12 (中) 張作霖、東三省の独立を宣言。 5・11 石本恵吉・安部磯雄ら、日本産児調節研究会設立。 5・10 高橋内閣、内閣改造問題で閣内不統一のため総辞職。 5・9 孫文、上海に逃れる。北伐失敗</p>	<p>5・25 第一回全国青年団大会開催。 5・22 対露非干涉同志会、神田青年会館で発会式。解散を命ぜられる。 5・15 新婦人協会、治安警察法五条二項撤廃祝賀会を神田仏教会館で開く(初の婦人政談演説会) 5・12 (中) 張作霖、東三省の独立を宣言。 5・11 石本恵吉・安部磯雄ら、日本産児調節研究会設立。 5・10 高橋内閣、内閣改造問題で閣内不統一のため総辞職。 5・9 孫文、上海に逃れる。北伐失敗</p>	<p>4・22 閣議、張作霖顧問の日本軍人を奉直戦に干与させないとの方針を決定。 4・16 (中) 直隸軍、長城を越え奉天軍を追撃。6・17 兩軍和議成立、第一次奉直戦争終る。 4・12 (中) 張作霖、東三省の独立を宣言。 4・11 石本恵吉・安部磯雄ら、日本産児調節研究会設立。 4・10 高橋内閣、内閣改造問題で閣内不統一のため総辞職。 4・9 孫文、上海に逃れる。北伐失敗</p>
<p>大正十二、十三年</p>	<p>5・18 本宮山取毀しあと片付けに着手。 5・15 二代教主讃岐琴平神社参拝のため出発、二十一日ご帰綾。 5・12 天声社、瑞祥会から分離、独立。 5・11 石本恵吉・安部磯雄ら、日本産児調節研究会設立。 5・10 高橋内閣、内閣改造問題で閣内不統一のため総辞職。 5・9 孫文、上海に逃れる。北伐失敗</p>	<p>5・15 新婦人協会、治安警察法五条二項撤廃祝賀会を神田仏教会館で開く(初の婦人政談演説会) 5・12 (中) 張作霖、東三省の独立を宣言。 5・11 石本恵吉・安部磯雄ら、日本産児調節研究会設立。 5・10 高橋内閣、内閣改造問題で閣内不統一のため総辞職。 5・9 孫文、上海に逃れる。北伐失敗</p>	<p>4・26 (中) 張作霖の奉天軍、呉佩孚の直隸軍と長辛店で開戦(第一次奉直戦争)。 4・12 (中) 張作霖、東三省の独立を宣言。 4・11 石本恵吉・安部磯雄ら、日本産児調節研究会設立。 4・10 高橋内閣、内閣改造問題で閣内不統一のため総辞職。 4・9 孫文、上海に逃れる。北伐失敗</p>

押。海荒れて航行容易ならず、周囲を廻行して帰綾。

8・3 聖師、伊豆湯ヶ島へ。九月一日ご帰綾までの間、霊界物語二十八巻から三十三巻の中ほどまで、原稿用紙五千枚余のご口述。

8・8 東京地方の有志により新調された大本消防隊用のハッピを隊員一同に分配。

8・18 受付および従前の大広前の家屋移転につき、移転宅地の地鎮祭。

8・20 京都地方裁判所長石井氏視察。

8・23 伊豆湯ヶ島の聖師からの召電にて、二代教主同地へご出発。

9・1 聖師、伊豆湯ヶ島からご帰綾。

9・3 (7・12) 聖師、第五十一回の誕生祭、午後神劇あり。

若林京都府知事参拝。

9・5 大正日日新聞は床次氏に全部委任する、今後直接に大本は関係しない。従来の本関係の社員は聖師の名義にて解任せらる。

聖師から「神の国」を復活すべく御命令あり

9・9 バハイ教のフィンチ女史参綾、二代教主と懇談。

天声社新築決定。

9・10 フィンチ女史亀岡に聖師を訪う。

9・13 受付移転につき、黒門(明治四十二

同盟などの社会主義者、日本共産党を非合法に結成。11月、コミンテルン第四回大会で日本支部として承認。

9・1 立憲国民党解党。

9・4 日ソ長春会議開会。9・

25決裂。

9・30 日本労働組合総連合創立大会、大阪で開催。総同盟の合同論と組合同盟会の自由連合論が対立し流会。

8・1 (伊) ミラノの労働同盟、ゼネスト宣言。8・3 ファシストミラノに潜入し市庁舎を占拠。

8・7 ロンドン賠償会議開催。

仏首相、ドイツの支払猶予の代償として(生産担保)を要求(英国反対)。

8・1 (中) 関東州租借地回収運動盛んとなる。

9・15 (英) 首相ロイドジョージ、連合国にトルコに対抗し両海峡の防衛参加を要請(仏・伊応ぜず)。

9・26 ギリシャのヴェニゼロス派、サロニカを占領。国王コンスタンチノス退位を要求。9・27 国王退位。

10・3 連合国・トルコ(アンカラ政府)間のムダニヤ会談。国際管理下の海峡の中立化等について



年建設)の取り壊し始まる。

9・15 三代教主、天声社員十数名と共に弥  
仙山参拝。

9・17 黄金閣屋上の逆さ瓢箪の取替工事完  
了。

9・23 受付移転工事終了。

9・27 聖師、亀岡からご帰綾、約二十日間  
に霊界物語三十三巻の中ほどから三十六巻ま  
でのご口述を終えられる。

大本事件控訴公判、十月三十日開廷の通知来  
る。

9・28 今晚から七時のお礼後、十時まで五  
六七殿にて物語拝読(第二十八巻から)始ま  
る。三晩にて一巻を終了するように拝読する  
拝読者は松村、三味線は山上女史、聖師每晚  
おでましになる。

10・1 大本事件弁護士花井、平松氏来綾に  
つき、聖師、自らのご案内にて神苑および天  
王平参拝。

10・8 二代教主、九州巡教のため出発。

霊界物語は三十六篇を以って第一巻とされる  
五六七殿にて物語第二巻第一篇(第三十七巻  
||自叙伝)のご口述開始さる。

10・19 大本事件控訴公判延期さる。

10・20 西田、湯浅両氏の発起にて大本内部

合意。

10・1 全国の実業連合組合、  
営業税全廃デーとして統一行動展  
開。

10・14 ウラジオストック派遣軍武  
器紛失事件の軍法会議開廷。

10・20 政府、普通選挙調査会を  
設置。

10・10 英・イラクに協定調印委  
任統治を廃止し同盟関係に移す。

10・19 (英) ボナ||ロー保守党内  
閣成立。

10・24 (伊) ムッソリーニ、ナポ  
リのファシスタ大会で政権奪取の  
意図を宣言。

10・28 (伊) ファシスタ、ナポリ  
からローマに進軍。首相ファクタ

改善の協議会を開く。

10・21 天声社新築地鎮祭。

10・27 (9・8) 神島的一般参拝中止、三代教主七名総代として参拝。

11・3 二代教主九州巡教からご帰綾。

11・4 受付事務所工事竣工、神苑内の臨時事務所から移転。

11・6 (9・18) 霊界物語ご口述開始満一周年記念祭執行。

11・9 大本瑞祥会長湯川氏辞任。井上留五郎氏五六七殿取締り兼務となる。

11・12 祖霊社事務所竣工。

11・17 西の石宮前の瑞垣完成。

11・19 大正日日新聞社債整理につき相談会を催す。

11・20 秋季大祭。神劇。

11・21 (10・3) 開祖五年祭。

11・22 高熊山参拝。亀岡にて大本瑞祥会大祭。

11・29 亀岡にて物語第四十三巻のご口述終わる。二代教主亀岡へ。

天声社基礎工事始まる。

12・3 聖師、亀岡からご帰綾。

12・4 従来ありし二十日会をかえてみろく会生る。

11・7 大学・高校などの社会思想研究団体(学生連合会)を結成

11・8 犬養毅・尾崎行雄・島田三郎ら革新倶楽部を結成。

11・18 改造社の招待でアインシュタイン来日。相対性理論ブーム起る。

12・8 日華郵便約定調印。12・29 枢密院、調印後諮詢を不当とし政弾府効上奏。

国王エマヌエーレ三世に戒厳令の裁可を求める(国王拒否)。

10・30 (伊) 国王、ムッソリーニに組閣を命令。10・31 ファシスタと国家主義者の連合内閣成立(ファシスト政権成立)

11・1 ムスタファアールケマル、スルタン制の廃止を宣言(メフメト六世、英船で国外逃亡) オスマン帝国滅亡。

11・20 連合国・トルコ間のローゲンヌ講和会議。

11・25 (伊) ムッソリーニ、国王と議会により秩序回復のため独裁権を与えられる。

12・6 アイルランド自由国、憲法発効により正式に成立。

12・30 ソビエト社会主義共和国



天王平の石鳥居を西石の宮前に建てる。

12・15 物語四十六巻の口述は近來のレコード破りにて一日原稿用紙八百枚。

12・16 物語四十六巻口述四百四十枚、二日間にて脱稿。

12・17 聖師、十八日の大本事件公判出廷のため大阪へ。二十日ご帰綾。

12・18 大阪控訴院法廷にて大本事件の公判

12・20 敦賀、舞鶴間の鉄道開通し、北陸路の参綾便利となる。

12・22 元大島の家屋教主殿西側に移転改築竣工。

12・27 出口家ご家族、大島の家竣工せしため移転。

12・30 物語拝読は第四十六巻を終了す。これにて今年ご口述された分は拝読がおわる。

1・3 大本消防隊係員異動。

1・5 聖師、伊豆湯ヶ島へ。

1・27 天声社基礎工事終る。

2・1 (12・16) 開祖誕生祭、引続きみろく会あり。二代教主のお筆先の拝読およびお話あり。

2・3 聖師、伊豆湯ヶ島湯本館の臨時教主館にて、靈界物語四十七巻〜五十二巻のなかばまでを口述され、ご帰綾。

12・12 閣議、米国の北京政府に対する借款前貸の申出に反対の回答を決定。

12・13 尼港事件に憤慨、樺太沖でロシア船を襲撃、乗組員を殺害した海賊船大輝丸乗組員江連力一郎、札幌で逮捕さる。

文部省、公民教育調査委員会を設置。

12・20 閣議、張作霖の中央進出に反対の方針を決定。12・22 関東長官に訓令。

1・7 広島仏教連合会、政府のローマ法王庁への使節派遣に反対運動拡大(政府、駐派経費を予算より削除)。

1・20 普選即行全国記者同盟大会開催。

1・27 婦人参政権同盟、東京で結成。

1・30 蔣渭水ら台湾議會期成同

連邦ハンソ連邦成立。

1・2 パリ賠償会議開く。英国モラトリアム計画提案(仏拒否)

1・11 仏・ベルギー軍、ルール地方に侵入・占領。

1・13 (独) 首相クローノ、議会でルール占領への受動的抵抗を宣言。

1・14 (伊) 国王、ファシスタ国防義勇軍(黒シャツ軍)を正規の

2・4 節分祭。  
 2・8 靈界物語は在来三十六篇を以って一卷とされたるも、今度十二篇をもって一卷とすることに決定。

2・10 靈界物語五十二巻の口述終る。

大正日日新聞本日を以て休刊。

2・11 (12・26) 二代教主四十回誕生祭。

みろく殿での物語拝読第五十巻にかかる。節分を境として拝聴者増加する。

2・16 (1・1) 六合拝。

2・17 天声社上棟式。

2・23 大阪控訴院から出廷の通知来る。

3・7 (1・20) 聖師、自ら五十五巻の一節の物語拝読あり。鳥取から如意宝珠の玉献納(物語五十六巻総説参照)。

3・11 藤谷嘉一氏、開祖様の木像を献納、教主殿に安置さる。

3・15 (1・28) 三代教主誕生祭。

3・20 聖師、鳥取県の皆生温泉へ。四月九日皆生を発たれるまで浜屋旅館にて五十七巻と六十巻のなかばまでを口述される。

3・25 (2・9) 高熊山入山記念日。物語拝読あり。

宣伝、鎮魂、神憑、御帳台について、瑞祥会長および大本取締からの注意書、各分所支部

盟会設立届出を拒否される。2・16 東京で同会設立。2・22 蔡培火ら、台湾議会設置請願書を議会に提出。12・16 蔣・蔡ら首謀者檢舉

2・11 東京・大阪・京都・八幡などで、過激社会運動取締法・労働組合法・小作争議調停法の制定

反対デモ。  
 2・23 東京で普選即行大示威行進。2・25 指導部、院外運動を打ち切り。

2・28 〱帝国国防方針〱などの改訂、裁可。想定敵国を米・露・中の順とする。

3・1 衆議院、普通選挙法案を否決。

3・8 東京で、初の国際婦人デー集会。

3・10 中国、二一カ条の廃棄を通告。3・14 日本拒絶。排日運動拡大。

3・15 朝鮮義烈団の独立テロ計画発覚。

3・20 衆議院、中野正剛ら提出のソ連承認議案を否決。

国防軍として認可。  
 1・26 (中) 上海で孫文・ヨッフエ共同宣言発表。ソ連中国革命支援を表明。

2・21 (中) 孫文、広東に帰り大元師に就任(第三次広東政府)。

3・10 (中) 日本に二一カ条条約廃棄を通告(旅順・大連回収を要求する排日運動おこる)。

3・27 ルーマニア、新憲法公布



長宛発送す。

神劇協会設立。

3・26 三代教主は井上留五郎、湯川貫一と

共に皆生温泉へ物語ご口述の聖師を訪ねらる

3・28 今夕から五六七殿、教祖殿、祖霊社

の順序に礼拝、そののち五六七殿にて物語拝

読のことに変更さる。

二月初旬から休刊の大正日日新聞は、米田誠

夫氏社長となり一〇五五号から発行。

3・29 三代教主皆生温泉から帰綾。本日を

以って第五十八巻の口述を了らる。

3・30 物語筆録者松村真澄氏皆生温泉へ。

4・4 二代教主、湯浅氏を伴ない皆生温泉

へ聖師を訪ねらる。八日ご帰綾。

参拝者のための「大本はどんなところか」の

小冊子発行。

4・7 浅野和三郎、家族と東京に引きあげ

心霊研究会を創立。

4・9 聖師、皆生温泉から米子へ。十日出

雲大社参拝。十一日、十二日鳥取支部へ。十

三日ご帰綾。

松村真澄氏、皆生温泉から霊界物語五十七巻

と六十巻の原稿を持って帰綾。

4・13 五六七殿の御礼後、霊界物語第五十

七巻より順次拝読する。

3・26 衆議院、被差別部落民に

関し因襲打破の建議案を可決。

3・30 工場法改正公布（15才未

満適用を16才未満に引上げ、雇

用者の責任を加重）。

工業労働者最低年令法公布（14才

未満の就業禁止）。

4・1 ソ連漁業庁と日本業者代

表間に、ソ領沿岸漁区契約成立。

4・14 石井・ランシング協定癩

棄の日米公文交換。

4・19 全国購買組合連合会設立

（商業組合購買部門の全国組織）

4・23 大日本実業組合連合会代

表委員会で実業同志会を結成。

4・1 河合義虎ら、日本共産青

年同盟を結成。

4・9 アフガニスタン、基本法

公布。立法機関を設立、国家行政

を中央集権化。

4・19 エジプト、憲法公布。立

憲君主制・二院制・普通選挙制を

規定。

- 4・14 京都府内務部長の一行来訪。
- 4・15 聖師、二代教主一行舞鶴の博覧会見物へ。
- 4・16 昨秋二代教主九州御巡教の際、鹿児島にて注文されたる雪見灯笼三基到着、神苑に配置さる。
- 4・18 (3・3) 春季大祭。  
三代教主御婚儀発表。
- 4・20 高熊山参拝。
- 4・22 バハイ教官教師フィンチ女史、ルト女史大本訪問。
- 4・23 聖師、八木及び京都へ、二十四日ご帰綾。二代教主、北海道ご巡教へ出発。
- 5・1 大本史実編纂部生る。
- 5・2 京都府知事池松氏参綾。  
靈界物語は先般十二篇を以て輯となし、篇を巻と称したるも今度、第何巻と称するを變更され、十二支を以てすることになった。第二十五篇は「靈界物語海洋万里子の巻」となるわけである。
- 5・5 大本史実編纂部員の任命、事務開始
- 5・8 「神の国」誌の倍加運動をなすの檄を各地読者に発送す。
- 中西京都地方裁判所長来訪。
- 5・16 天主教宣教師、ワグネル、マルモニ



エ両氏来訪。

5・23 (4・8) 弥仙山参拝。

5・24 二代教主、北海道からご帰綾、夕拝後みやげ話あり。

5・31 二代教主、みろく会席上において、開祖の御生家桐村家の事につきお話あり。

6・1 聖師の命により加藤明子、同志社大学のエス語講習会を受講。

6・3 英人エドワード・スチーブンソン (日本名伊藤芳明) 来訪。

「大本三美歌」発刊。

6・5 高見元男、京都帝国大学史学部を中退。

6・15 天声社増築竣工、移転。

6・18 (5・5) 直日、大ニの結婚式。

「大本靈葬祭式」発行。

6・21 聖師、大本事件公判のため大阪へ。二十二日ご帰綾。

6・25 天声社社長に御田村竜吉氏就任。

6・28 大本エスペラント研究会誕生。

7・1 同志社大学の重松太喜三氏を講師に迎えて第一回のエス語講習、受講者聖師ほか百三十余名。

7・7 エスペラント講習終り。

日本エスペラント学会綾部支部設置。

6・5 堺利彦ら共産黨員、検挙される (第一次共産党事件)。

6・28 川上俊彦・ヨッフフェ間に日ソ非公式予備交渉開始。

6・1 (中) 長沙学生の排日運動にたいし日本海軍陸戦隊上陸 (長沙事件)。

6・1 (中) 広州で中共三全大会開く。革命統一戦線の樹立、国共合作を決定。

7・24 連合国・トルコ間にローザンヌ講和条約調印。セーヴル条約修正。連合国の財政管理・治外法権を廃止。

- 7・14 北村隆光、大本神諭を支那訳に、なお西村輝雄は近く英訳に着手の予定。
- 7・15 霊界物語六十五巻の口述、教主殿において始まる。十八日に口述終る。
- 7・21 (6・8) 沓島、冠島参拜。
- 7・26 大本エスペラントの講習会をA・B・C三科に分ち開始。
- 7・31 日本エスペラント学会雑誌レヴワ・オリエンタの編集員由里忠勝氏、大本エスペラント会の状況視察のため訪問。
- 8・1 由里忠勝講師によるエスペラント会話講習会、五日まで。
- 8・5 大和天明山別院の神殿落成鎮座祭執行。
- 8・7 聖師、熊本県小国の杖立温泉へ。
- 8・13 天王平共同墓地の慰霊祭。
- 8・31 岡山にて開催せられた日本エスペラント大会に西村光月出席。
- 加藤確治、綾部に引越す。
- 9・7 聖師、熊本からご帰綾。
- 関東震災掃幽者の慰霊祭あり。
- 9・9 大本事件公判震災のため延期。
- 聖師、杖立温泉の御土産として竹の杓子(御手代の初め)に歌を自書され拇印を捺して下さる。大本史実編集部を史実編集部と改称。

8・24 首相加藤友三郎没、26内閣総辞職。28山本権兵衛に組織命令。

9・1 関東大地震おこる。

9・2 非常徴発令、戒厳令中必要の規定適用の件各公布。

朝鮮人暴動の流言ひろがり、朝鮮人迫害はじまる(数千人殺される)第二次山本内閣成立。

8・13 (独) シュトレイゼマン大連合内閣成立。9・26 ルールにおける入受動的抵抗中止を布告。

8・23 連合国軍コンスタンチノープルを撤退。10・14 アンカラ、トルコの首府となる。

8・1 (独) マルク紙幣大暴落。

9・4 南葛労働会の河合義虎・純労働者組合の平沢計七ら十人、亀戸署で軍隊に殺害される(亀戸事件)。

9・7 治安維持のためにする罰則に関する件・支払猶予令・暴利



(施行十四日)

9・23 京都帝大生三名(エスペランチスト)来綾、エス語についての講演あり。

9・1 高見元男、京都市仁和小学校で教鞭をとる。

10・10 聖師ほか三名京都エスペラント学会集會に出席。

10・16 加藤確治から大本改革案を提出、不可能のことのみなれば、高木、井上、上西の三氏。同氏を訪ねて回答、乱打事件あり。

10・17 加藤確治傷害事件で告訴さる。ローマ字會員齋藤強三氏参綾し、ローマ字普及に関する講話あり。

綾部ローマ字会設置。

10・20 熊野神社の祭典執行(前年から大本信者が正式に氏子に加名)

10・21 聖師、京都のエスペランチストを亀岡にて松茸狩に招待せらる。

日本式ローマ字大会が京都で開かる。外山豊二、山口利隆の両氏出席。

10・23 聖師、亀岡から大阪へ。エスペラント講師由里忠勝氏来綾、向う一週間エスペラントの講習会を開催。

10・26 大本最初の御神殿(旧お広前跡)前に瑞垣を作ることになる。

取締令各公布。

9・12 帝都復興に関する詔書(遷都論による市民の動揺を防ぐため)。

9・13 ソ連救援船レーニン号、横浜に入港、退去を命じられる。

9・16 憲兵大尉甘粕正彦、大杉栄、伊藤野枝らを憲兵隊内で殺害

10・16 五大臣會議で普選案要綱を決定。10・22閣議承認。10・27

法制審議會、普選問題を審議。婦人参政権を否決。

9・1 南ローデシア、英国の王冠植民地となる。

10・1 (英) 英帝国會議開催。自治領諸国の外国との条約締結権を承認。

10・10 (独) ゼクセンに社会民主党・共産党の連合邦政府成立。10

・16チューリンゲンにも成立。10・29

エーベルト大統領、憲法第四八条によりゼクセン邦政府首相を更迭。

10・29 トルコ、正式に共和国を宣言(大統領ムスタファアケマル)。



- 11・1 綾部エスペラント普及会、舞鶴、福知山方面まで宣伝ピラを配布。
- 11・3 世界紅卍字会(儒・仏・回・老・耶の五教の統一集萃)中華總會総代としての関東震災慰問使なる支那の侯延爽氏、通訳らと参綾。
- 11・4 侯氏、二代教主に面談。打電により聖師、大阪から帰綾されご面談。大本と世界紅卍字会(本部山東省済南)との提携なる。
- 11・5 聖師、侯氏、神戸に該会の分院設置のため神戸へ。二代教主は同列車にて大阪へ
- 11・9 聖師、侯延爽氏と共に神戸からご帰綾。
- 11・10 (10・2) 秋季大祭。
- 11・11 (10・3) 開祖五周年祭天王平にて執行、午後祖霊社大祭。
- 11・12 聖師始め侯氏および信者高熊山参拝三代教主一行弥仙山参拝。
- 11・13 綾部を中心としての姫路師団の旅団對抗演習行なわれる。大本に工兵第十大隊本部および経理部を置く。
- 11・15 聖師、神戸滞在中エスペラント作歌辞典の原稿完了。
- 11・19 聖師、神戸からご帰綾。

- 11・10 国民精神作興に関する詔書。
- 11・24 第一回帝都復興審議会で伊藤巳代治ら、政府の復興案の縮少を要求。

- 11・5 (独) 国防軍、チューリッゲン邦政府を解体。
- 11・8 (独) ヒトラー、一揆をおこし失敗ハミュンヘン一揆。
- 11・15 (独) マルク下落、レンテンマルク発行を開始。
- 11・1 (中) 孫文ハ連ソ・容共・扶助工農の三大政策を決定し中国国民党の改組宣言を發表。

11・20 二代教主、台湾へご巡教。高木氏随  
行。北村隆光は侯延爽氏と共に支那の紅卍字  
会へ。

11・24 祖霊社月次祭、みろく会、のち聖師  
からエスペラントおよびローマ字につきご講  
演あり。夕拝後エスペラント談話会あり、重  
松講師はか列席せり。

11・27 上西信助、湯川貫一、社寺取締規則  
の件で京都府社寺課へ。

11・28 加藤確治の毆打事件につき、聖師、  
証人として福知山へ。

11・29 聖師、谷前氏病氣見舞のため大阪へ  
12・5 伊豆の杉山当一ら熱烈な信仰者の手  
による金竜礦山をこのほど、大本金竜礦山と  
改める。

12・6 聖師、能登方面へご巡教、十三日ご  
帰綾。

12・10 二代教主一行台湾からご帰綾、十一  
日二代教主からみやげ話あり。

12・16 聖師、三代教主ご夫婦の問題につき  
在綾信者にその顛末発表さる。

12・18 加藤確治打撲事件公判判決、罰金三  
十円の言渡し。

12・19 神命により松村真澄、伊豆の安藤唯  
夫両氏朝鮮普天教へ、同教教主車潤洪氏と会

12・18 政友会、復興院廃止・復  
興費削減の方針を決定。

嶋中雄三・青野季吉・鈴木茂三郎  
ら、政治問題研究会結成。

12・23 衆議院、治安維持のため  
にする罰則に関する緊急勅令に事  
後承諾。

12・27 難波大助、摂政を狙撃  
(虎の門事件)。

12・29 山本内閣、虎の門事件で  
引責総辞職。

12・18 英・仏・西(スペイン)  
三国間に協定調印。タンジール地  
帯の永世局外中立化と国際管理化  
を定める。



談する。普天教との提携なる。松村は北京へ安藤は普天教の役員格として名を金仁沢と改めて残留。

12・25 聖師、大阪谷前氏方へ、二十九日ご帰綾。

12・30 北村隆光、長途の支那旅行を終えて帰綾。

1・10 大本博愛医院設立。  
出口大二、福知山二〇連隊入営。

1・14 聖師、四国伊予へ。

1・31 二代教主誕生祭。佐賀伊佐男（宇知丸）、出口家に入婿。

聖師、伊予にて靈界物語第六十九卷（宇都の高砂の巻）を口述されてご帰綾。

夜、宇知丸氏の出口家入家につき親族披露宴後、突如八重野嬢と宇知丸氏との婚儀内祝行なわる。2・4結婚。

2・4 節分大祭（甲子の節分）  
日月星辰を形どりたる更始会章の授与。

聖師著「エス和作歌辞典」発刊。

2・5（1・1）六合拝。  
聖師、分所支部会議の席上にて「更始会」につき訓話あり。従来の大本取締を大本総務と改称。

2・6 聖師および信徒、高熊山参拝。

1・7 清浦奎吾内閣成立。

1・10 政友会・憲政会・革新俱樂部の三派有志、清浦特権内閣打倒運動を開始（第二次護憲運動発足）。

1・16 政友会分裂。・22政友会脱党者、新政俱樂部を結成。1・29政友本党を結成、第一党となる

1・26 摂政裕仁親王、久邇宮良子女王と結婚式を挙行。

1・28 上野公園及び動物園、皇太子御成婚記念に宮内省から東京市へ下賜。

1・30 憲政擁護関西大会、大阪中央公会堂で開かれ三党首出席。

帰途護憲三派幹部乗車の列車転覆未遂事件おこる。

1・31 衆議院、列車転覆に關す

1・20（中）中国国民党第一回全国代表大会（一全大会）、連ソ、容共・工農扶助の政策を採用（第一次国共合作成立）。

1・22（英）第一次マクドナルド労働党内閣成立。

2・1（英）ソ連邦を承認。2・7イタリヤも承認。

2・12 聖師二女梅野嬢、湯川貫一の養女とならる。北村隆光、神戸道院開設につき支那へ出発。

2・13 (1・9) 聖師、松村真澄を随え、午前3時24分発の汽車で入蒙の途に就かる。浅野遙氏と梅野嬢とのご婚儀。

2・15 大本事件の公判、五月十六日大阪控訴院にて開廷の旨通知来る。

2・18 大本博愛医院長に柴田健次郎任命。

2・21 聖師に奉天までお供せし矢野祐太郎帰綾。

取毀された本宮山神殿の中門を、西門として再建工事始まる。

3・1 北村隆光、支那から神戸へ帰着の報あり、支那道院代表侯延爽氏同道。

五六七殿安置の大八州彦命尊像を教祖殿に遷座。同神劇仮設舞台(連日物語拝読のありし舞台)は西門建設の材料とする。以後物語拝読は祖霊社にて。

3・3 聖師、奉天から蒙古へ。

満洲に相生更始会を設立、会長盧占魁。靈界物語「宇都の高砂の巻」(六十九巻)が北国夕刊新聞に本日から連載され始む。

3・5 昨秋から大本の内外を騒がしたる加藤確治京都へ引きあぐ。

る浜田国松の緊急質問中、暴漢三人壇上を占拠、議場混乱のため休憩中に解散。

2・15 閣議、国際労働会議代表の選定は千人以上の労働団体の公選にすると決定。

2・29 第三回日農大会、小作爭議調停法案反対・耕地権確立を声明。

3・11 この頃東京の震災地跡バラック街に腸チフス流行。



- 3・6 神戸道院開院式。宇知丸、聖師の代理として参列、壇訓あり。
- 3・8 聖師、洮南に安着。
- 3・16 聖師から通達あり。宇知丸は二代および三代教主補佐、上西は総務、佐沢は天声社青年監督、御田村は天声社一切の事務と。
- 3・20 二代教主、鳥取方面へ。二十四日帰綾。
- 3・25 聖師、公爺府着。
- 3・28 公爺府の王公、鎮国公が老印君の館に聖師を訪う。
- 4・1 教主殿にて聖師指定の人員による幹部会開かる。
- 4・5 分所、支部代表者会議で、大正日日新聞社負債整理の委員を決める。
- 4・6 (3・3) 春季大祭。大本博愛医院開院。
- 4・7 出口宇知丸、大本二代・三代両教主補佐との発表あり、大本教主補佐と称することとなる。
- 4・16 聖師、盧の全將兵に「神軍証」としてつけるよう大本宇宙紋章をさすける。
- 4・17 聖師「和蒙作歌辞典」の著述をはじめる。
- 4・20 大阪毎日に初めて「王仁入蒙」を報

- 4・1 大阪毎日新聞社主催、第一回選抜中等学校野球大会、名古屋で開催。
- 4・5 小作制度調査会、自作農地創定施設要綱答申案を可決。4・18同調査会廃止。
- 4・9 日農、第一回農民デー挙行。
- 4・10 排日移民法に関する駐米大使埴原正直の米國務長官宛書簡中の八重大なる結果✓の一句、米國で問題化。4・17埴原大使釈明
- 4・21 米國の排日移民法に反対し東京の十五新聞社、共同宣言を

- 4・9 賠償専門委員会(委員長米人ドーブ)、ドイツの賠償支払案ハドーズ案✓を完成。4・16独政府受諾。
- 4・13 ギリシャの人民投票、圧倒的に共和制に賛成。5・1共和國を宣言。
- 4・1 英系南ア会社、北ローデシアの行政権を放棄(英國の王冠植民地となる。)

道さる。

伊豆の信者ら、大神様の御神体、守護神を返納する事件あり。

4・25 北村、神戸道院を経て支那へ。

4・28 聖師一行二百人下木局子(索倫山)に着く。

4・30 万国エスペラント協会機関誌三月号に大本紹介の記事掲載。

5・6 西門竣工。

5・9 北村隆光、奉天・北京道院・天津を経て帰綾(5・4奉天支部開設)

5・14 聖師、上木局子に着く。

5・16 大本事件公判大阪控訴院にて開廷。

聖師、欠席なれば延期を申し出し、浅野、吉田両氏の審理のみにて終る。

5・18 三代教主、香取、鹿島神宮参拝のため出発。二十八日ご帰綾。

5・22 由里忠勝(祥星)氏、霊界物語第一巻のエスペラント訳に着手。

5・23 張作霖、奉天総領事に聖師以下の逮捕を申し入れる。

5・27 大本事件公判、六月十八日、二十日二十三日、二十五日に開廷の通知来る。

5・28 「霊の礎」のエスペラント訳完成。

5・31 (4・28) 弥仙山参拝。

発表。

5・15 駐華公使芳沢謙吉、ソ連駐華代表カラハン、北京で日ソ復交渉を開始。

5・18 対米問題国民大会、上野公園で開催。

5・23 内務省、関東大震災後の住宅不足救済のため(財)同潤会設立。

5・30 外務・陸軍・海軍・大蔵の四省、対支政策綱領を決定、経済的進出を力説。

5・15(米)排日移民法可決。7・1施行。

5・31 中・ソ間に協定調印。ソ連、旧ロシアの在華特殊權益・治外法権・義和団賠償金等を放棄。



- 6・3 聖師、西北興安嶺へ向わる。  
 6・6 (5・5) 五月五日祭。この年より大本年中行事の一つとする。  
 6・18 大本事件公判第一日、検事論告、聖師、浅野共に五年の求刑。  
 6・19 森田茂氏大本事件の弁護人となる。  
 6・21 盧占魁、銃殺さる。聖師、通遠(パインタラ)の法難。  
 6・23 黒田氏、大正日日新聞社債につき起訴、第二回目の公判。  
 6・24 大阪都新聞「王仁捕はる」の報道あり。  
 6・25 大本事件公判の最終日。七月二十一日判決言渡しを宣す。綾部町民有志、聖師の判決延期を司法大臣に嘆願。  
 6・26 奉天から「瑞月先生パインタラにあり、身体安全」の入電あり。  
 6・30 聖師、パインタラから鄭家屯へ護送せらる。  
 大正日日新聞の債権訴訟問題につき舞鶴裁判所にて公判開廷。  
 7・1 エスペラント採用一周年記念大会、ザメンホフ博士の鎮靈祭執行。  
 聖師、ご安泰の祈願。  
 7・5 聖師一行の身柄鄭家屯にて支那官憲

- 6・11 第一次加藤内閣成立(護憲三派内閣)。  
 6・25 神道宣揚会のよびかけで神仏基各教有志、日本宗教懇親会を設立。  
 6・28 嶋中雄三・青野季吉ら、無産政党結成をめざして政治研究会を結成。

- 7・22 小作調停法公布。12・1施行。

- 6・10 (伊) 社会党議員マテオツティ、ファシストに暗殺さる。6  
 ・15 野党議員、議會を退席し、ファシスタ国防義勇軍の解散・ムツソリーニの罷免を要求。

から日本領事に渡さる。当時大連にありし広瀬義邦氏、パインタラにて聖師一行に面会し本日帰綾し情報をもたらす。

7・6 聖師、鄭家屯から奉天の日本総領館に護送さる。

中野岩太、北村隆光両氏、役員信者総代として奉天にお見舞に行く。

7・15 奉天の中野、北村両氏より第三信入電『先生にだけ面会した。お元氣、大本事件を大審院へ上告するよう依頼された』と。

7・16 横尾、奉天から帰綾、聖師の情報をもたらす。

7・18 十七日付をもって大阪控訴院より、聖師に対し責付取消しの通知来る。

7・19 「霊の礎」のエス訳(70頁)発刊。奉天から入電、『退去処分と決定し二、三日中に奉天を出発せらるる模様』と。

7・21 聖師、奉天から帰国の途につかる。大阪控訴院にて、大本事件判決言渡し、第一審通り有罪(懲役五年)。ただちに上告の手続きをなす。

7・22 聖師、大連からハルピン丸にて出帆大審院にて上告受理される。

7・22 聖師お迎えのため三代教主以下多数の役員信者、門司へ出発。



7・25 聖師一行門司着。当日は広島県の大竹署にご一泊。

「霊の礎」発刊。

7・26 聖師、大竹署より笠岡署を経て兵庫県上郡署にご一泊。

7・27 聖師、上郡署をたたれ神戸相生署を経て大阪の北区支所に入監。

7・28 聖師のご動静につき全国支部分所に通知を発す。聖師ご在監中の世話係は大阪難波分所の内藤氏があたる。

全国の新聞、筆を揃えて聖師のことを書く。

8・1 エスペラント夏季特別講習会を開く

8・8 二代教主大槻伝吉氏と京都へ。翌日ご帰綾。

8・9 「神の国」大本紹介号出版。

8・12 (7・12) 聖師誕生祭。井上会長から聖師のご動静につき話あり。

8・16 みろく会席上にて、教主補佐および井上会長から聖師のご動静につき話あり。

8・16 みろく会席上にて、教主補佐および井上会長より、聖師の入蒙以来今日までのご動静の報告あり、聖師の保釈願提出。

綾部天神馬場の天理教会跡買取決定。

8・16 三代教主、佐藤六合雄の案内にて信州の温泉へ出発。九月六日ご帰綾。

8・8 英ソ通商条約調印。

8・29 (独) ドーズ案を承認。8

・30 ロンドンで調印。9・1 施行

8・20 大正日日新聞社社債債権人黒田祝氏  
債権二万円と利子四八九六円の返済を請求、  
応じなければ訴訟する旨の通告を受く。

8・24 外山豊二、教祖伝執筆の件につき、  
聖師にお伺いのため大阪へ。

8・24 大阪控訴院に提出された聖師の保釈  
願い、本日却下さる。

8・26 大本総務兼財政整理委員長上西信助  
会計の田中、病気のため辞表提出。

8・27 今晚から霊界物語拝読は第一巻から  
神諭は明治二十五年以来ご執筆の年代順に拝  
読される。

8・30 東尾吉雄、総務兼財政整理委員長に  
新任。大本瑞祥会の取締りを副会長と改称。

9・1 海外宣伝部設置し事務所を神武館に  
おく。井上会長、財政整理の件につき信州の  
三代教主を訪う。

9・2 宇知丸教主補佐、聖師に面会のため  
大阪へ(財政整理の件)

9・3 財政整理のため各地委員に召電を発  
す。森岡京都内務長来綾視察。朝鮮普天教の  
金勝政氏、聖師お見舞として参綾。

9・4 東尾、高木両氏上告の件につき打合  
せのため大阪へ。

9・6 (8・8) 大本の改革および財政整

9・1 アナーキスト和田久太郎  
元戒嚴司令官福田雅太郎大將を狙  
撃し失敗。ついでアナーキストラ  
のギロチン社による爆弾事件発覚

9・18 (中) 孫文、北伐開始宣言  
奉天軍・直隸軍、全面的交戦を開  
始(第二次奉直戦争)。

理に関する委員会開かる。(聖師、二代、三代教主の合意により、神苑、神殿を除く出口家の名義に属する土地家屋等一切を処分して債務弁済の途を講ずとの趣旨披露さる)

9・8 宇知丸教主補佐、会議の結果と弁護士に付き聖師に面会のため大阪へ。

栗原白嶺、大本改善の集会を熊野神社社務所にて開く。

9・10 黒田氏より起訴されし大正日日新聞社債につき、強制競売の通知に接す。本宮山奥津城、教祖殿、黄金閣等の神苑敷地を差し押えらる。

9・16 財政整理の件につき全国支部・分所会議開催(皆の赤誠をもって精神的にも物質的にもこの難局に処して協力奉仕する外なしとのことに一致)。のち、大本事件および聖師のご動静の報告あり。

9・17 神苑以外の出口家所有の土地家屋の処分は出口慶太郎氏に一任し、刀剣その他の什器類の売却は森良仁氏に一任する。

9・20 十六日の会議の結果の概要を支部・分所に配布。

9・25 東尾総務、岩田と共に社債の件、および保釈の件につき大阪足立弁護士方へ。

9・26 信徒有志四百名連署をもって、司法



大臣および大審院長に聖師の保釈につき森田茂氏を通して陳情書提出。二十八日三百余名の連署にて提出。十月三日三百名連署の上提出。

10・4 東尾総務、保釈の経過、財政整理の経緯につき聖師に面会のため大阪へ。

10・6 (9・8) 聖師の命により五六七殿の大鼓の七五三の打ちかたを五六七と改める

二代教主神島参拜、帰途大阪へ、七日帰綾。三代教主弥仙山参拜。

10・7 (9・9) 高砂の川西友吉、尉と姪との木像を大本に納める。

10・8 三代教主、聖師に面会のため大阪へ

10・12 河津雄、天声社副社長となる。

10・15 黒田氏の債権問題は内金を入れ、二十一日差し押え解除さる。

10・25 「靈界物語」舎身活躍亥の巻(四十卷) 発刊。

10・26 聖師上告公判は十一月十四日東京大審院にて開延のせずなりしが、明年一月十六日に延期の旨通知し来る。

10・28 西門塀竣工(かつての本宮山神殿の中門を移す)

10・29 秋季大祭。東尾総務より財政整理の件につき報告あり。

10・13 政府、中国に内政不干渉と滿蒙利権擁護の覚書を交付。

10・2 国際連盟総会、国際紛争の平和的解決に関する「ジュネーブ議定書」を採択。

10・23 (中) 呉佩孚の部下馮玉祥クーデターで北京を占領し国民軍を組織(北京政変)。11・3 呉佩孚敗走(第二次奉直戦争終る)。

10・29 (英) 総選挙、保守党勝利

正誤・補遺・疑問点

年表一—明治三十二年まで—

〈正誤〉

- 頁行 誤 正
- 90 5 (7才) (74才)
- 90 14 10・15 11・3
- 91 17 (21・2) (12・2)
- 93 1 大槻伝吉 出口伝吉
- 99 12 (28・……) (元・……)
- 100 19 4・15 4・15日付をもつて中監督の辞令が下る(本教創世記77頁)
- 100 22 三矢喜衛門 三矢喜右衛門
- 102 23 良の金神国武 良の金神のご彦の命を遷座 神体を遷座
- 103 9 一時講金 一時賜金
- 〈疑問点〉
- 頁行
- 92 1 8・27 大本年表(一)、七十年史(上巻)107頁では8・22(7・12)となっていて、ここでは旧の7・12を基として、新は天社土御門神道本庁編の万年曆によった。
- 92 6 大本年表(一)には6・30(6・6)とあるが、万年曆によると新6・30は旧5・25、また旧6・6は新7・11である。い

まのところ定かではない。

- 100 13 (2・9) 瑞の神歌—いろは歌—50頁には、「二月十日の夜半」とあり、他の文献はほとんど「2・9」である。
- 100 22 4・28(閏3・8) 大本年表、七十年史(上巻)159頁には4・28とあり、

「本教創世記」77頁では4・28日、三つ屋の案内にて出発とあり、

「物語三十七巻」(校定版)248頁では4・13穴太を立つとあり、

「故山の夢」456頁には、4・15日のおさ三屋をとまなくて静岡行きとある。

〈明治三十一年補遺〉

- 月・日
- 4・3 聖師、三矢喜右衛門(静岡県安部郡不二見村下清水月見里神社の附属の稲荷講社の配札係)と会う(本教創世記69頁)
- 4・5 聖師、長沢豊子に神器を授けらる
- (3) 「霧の海」60頁に、……頃しも三月十五夜丹波をさして帰りゆく」とあり。
- (6) 園部方面宣教、南陽寺楚玉禪師を訪ねらる。広田屋旅館に逗留して宣教。内藤半伍氏入信(霧の海408頁、417頁)
- (8・25) 園部黒田村の西田卯之助方に

臨時会合所を作る(霧の海464頁)

若森の竹村方に会合所をおく(霧の海466頁)

若森の中井忠次宅に会合所を移す(霧の海472頁)

〈明治三十二年補遺〉

- 月・日
- 1 聖師、一月静岡に行かれ、1・25日の夕暮、若森の奥につくとあり(霧の海482頁)
- 駿河より守り帰へりし御神璽を村人つどひ会合所に祭る(霧の海483頁)。
- (春) 聖師、北桑田方面の宣教(青嵐127頁、133頁)
- 7・1 四方平蔵、聖師を迎えに園部へ。
- 7・1 扇屋旅館で話す(七十年史177頁)。
- 7・1 聖師、綾部への途次、檜山の樽屋旅館に一泊(青嵐194頁)
- 7・5 本町の中村竹蔵の家を借り、金明会の広前とする。(七十年史上巻181頁)
- 8・19 上谷修業、四方祐助の息子に反対され、上谷の四方左衛門宅へ移す。
- 9・3 祖母危篤の電報は、上田家の家庭事情によるニセの電報であることがわかる(七十年史上巻197頁)
- (8・1) 湊与岐の吉崎仙人(八九十九仙人)と一夜を語る(青嵐283頁)

昭和四十五年四月一日  
昭和四十五年四月七日

印刷  
發行

大本教学

第七号

(非売品)

編集兼発行者

伊藤栄蔵

印刷者 土居重夫

発行所

大本教学研鑽所

京都府亀岡市天恩郷